

たちばな やま かま あと  
橘 山 窯 跡

2005年3月

長野県飯田市教育委員会

たちばな 橘 やま 山 かま 窯 あと 跡

2005年3月

長野県飯田市教育委員会

## 序

私たちの飯田市は、美しい自然に恵まれ、長い歴史と尊い伝統文化につつまれた人情豊かなまちとして知られており、市民憲章では「伝統を生かし、文化の香り高い飯田市をつくります」と宣言しています。松尾地区は飯田市のほぼ中央に位置し、重要文化財木造誉田別尊坐像が納められている塙ヶ嶺八幡宮や長野県史跡代田山狐塚古墳をはじめ多くの文化財に恵まれ、文化の息吹きを感じられます。また、古来交通の要衝に位置し、中世にあっては信濃国守護職小笠原氏が松尾城に居を構える等、政経の中心として重要な役割を果たした地域です。

松尾地区は、市内では比較的地形の変化も少ない地域ですが、天竜川に平行する段丘地形とそれを開析する天竜川の支流群があり、各所に急傾斜地がみられます。殊に毛賀沢川に面した段丘縁辺部は傾斜が急で、その崩壊対策が悲願でありました。今回の工事は住宅地に隣接する傾斜地に崩落土を受け止める防護壁を設置するもので、その事業実施はやむを得ないものと考えられます。

しかし、一方で今回工事が計画されましたところには、埋蔵文化財包蔵地の橋山窯跡があります。本窯跡は、昭和24年に個人により発掘が行われていますが記録等残されておらず、また文献等もないことから、窯の位置、構造や操業年代、焼かれた製品等について分からぬことが多いきました。現状のまま後世に残し伝えるべく手を尽くしましたが、やむを得ず記録保存の道をとることになりました。結果は本書の内容のとおりであり、失敗品が捨てられた灰原が確認され、どのようなものが焼かれたかなどが明らかになりました。また、幸いなことに窯本体は事業地外にあることが判明し、残されることになりましたことは望外の喜びであります。

たゆみない文化財保護活動により、このような地域の歴史が次第に明らかになりつつあります、調査記録をとどめた本報告書が活用されてはじめて、地区および市域の方々の財産として生命を与えられることになります。そうなることを切に望む次第です。

最後になりましたが、文化財保護の本旨にご理解を賜りご協力いただきました地元関係者の皆様、ならびに発掘調査に従事された方々に深甚なる感謝を捧げまして発刊の辞いたします。

平成17年3月

長野県飯田市教育委員会

教育長 富田泰啓

## 例　　言

1. 本書は長野県起業の急傾斜地崩壊対策(毛賀)工事に先立って実施された、長野県飯田市毛賀1405-1他所在の橋山窯跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は飯田市建設事務所の委託を受け、飯田市教育委員会が直営実施した。
3. 調査は、平成15年度に現地作業、同16年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり、基準点設置測量を株式会社ジャステックに、自然科学分析調査をパリノ・サー・ヴェイ株式会社に委託実施した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号としてK T Y, Yを用いた。
6. 本報告書では以下の遺構略号を使用している。  
竪穴－S B、土坑・土葬墓－S K、溝址－S D、石積・集石－S I、その他－S X
7. 本書の記載順は遺構別を優先し、遺構図は挿図とした。
8. 土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づく土色計（第一合成株式会社製、S C R - 1）を用い、マンセル表示で示した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により馬場保之が行なった。
10. 本書の執筆と編集は馬場が行なった。
11. 遺構・遺物の調査・記述・表現方法については、『飯田城下町遺跡』(飯田市教委 2001a)・『開善寺境内遺跡』(同 2002)に準拠した。
12. 本書に関連した出土遺物および図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館に保管している。

# 本文目次

序	
例言	
目次	
第Ⅰ章 経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 自然環境	3
第2節 歴史環境	3
第3節 発掘前史	7
第Ⅲ章 調査結果	11
第1節 調査区の設定	11
第2節 微地形	11
第3節 基本層序	11
第4節 橋山窯とそれ以降の遺構・遺物	13
(1) 窯体	13
(2) 灰原	13
(3) 竪穴	13
(4) 石積・集石	13
(5) 溝址	17
(6) その他	17
(7) 出土遺物	17
第5節 その他の遺構・遺物	24
(1) 土坑・土葬墓	24
(2) 遺構外出土遺物	25
第6節 自然科学分析	26
(1) 目的	26
(2) 試料	26
(3) 分析方法	26
(4) 分析結果	28
(5) 考察	29
第Ⅳ章 総括	30
引用参考文献	33
報告書抄録	93

# 挿図目次

挿図 1	調査遺跡および周辺遺跡位置図	4
挿図 2	調査地点位置図	6
挿図 3	基準メッシュ図区画調査位置	8
挿図 4	灰原上面微地形と基本層序	9
挿図 5	遺構全体図（上）と遺物等量線 図（下）	12
挿図 6	灰原遺物の重量分布（1）	14
挿図 7	灰原遺物の重量分布（2）	15
挿図 8	S B01~03、S K02・03、 S I02・04	16
挿図 9	S I01・SD01・SX01、SK01~18	18
挿図 10	S K04~10、周辺柱穴平面図	25

# 表目次

表 1	胎土薄片観察結果	28
表 2	製品の胎土の化学組成	28
表 3	中壺の釉薬塗布部分と胎土部分の 蛍光X線分析結果	29
表 4	土層注記・遺構属性表	35
表 5	陶器観察表（1）	36
表 6	陶器観察表（2）	37
表 7	陶器観察表（3）	38
表 8	陶器観察表（4）	39

## 図版目次

第1図	橘山窯跡出土遺物（1）	41	第7図	橘山窯跡出土遺物（7）	47
第2図	橘山窯跡出土遺物（2）	42	第8図	橘山窯跡出土遺物（8）	48
第3図	橘山窯跡出土遺物（3）	43	第9図	橘山窯跡出土遺物（9）	49
第4図	橘山窯跡出土遺物（4）	44	第10図	橘山窯跡出土遺物（10）	50
第5図	橘山窯跡出土遺物（5）	45	第11図	橘山窯跡出土遺物（11）	51
第6図	橘山窯跡出土遺物（6）	46	第12図	橘山窯跡出土遺物（12）	52

## 写真図版目次

図版1	調査前風景 灰原検出状況		図版14	匣鉢b種 匣鉢c種	67
	灰原断面C-C'	54	図版15	匣鉢d種 輪ドチa種	68
図版2	灰原断面D-D' 灰原断面F-F'		図版16	輪ドチb種 足付き輪ドチ 紐トチ 握りトチ	69
	調査区全景	55	図版17	团子トチ SK08出土遺物	
図版3	調査区全景 S B01・02	56	図版18	棚板a種	70
図版4	S B03 S I01・SD01 SX01	57	図版19	窯詰道具その他 握りクレ	72
図版5	SK01 SK02 東側SK群	58	図版20	素焼き段階の絵付 鉄絵もの	73
図版6	SK06埋葬状況 SK06 SK08埋葬状況	59	図版21	小碗 中鉢	75
図版7	SK08 S I02・04 発掘作業風景	60	図版22	中鉢	77
図版8	発掘作業風景 現地見学会風景		図版23	中鉢 大鉢	79
	北西側墓地	61	図版24	擂鉢 中壺	81
図版9	小碗 小碗他	62	図版25	中壺	83
図版10	擂鉢（口縁外帶三段高台作り） 土瓶	63	図版26	中壺 中瓶	85
図版11	土鍋 灯明具類	64	図版27	烟徳久利 土瓶	87
図版12	鋸手 中壺	65	図版28	蘭引 刻印もの	89
図版13	中壺 蓋類 匣鉢a種	66	図版29	胎土薄片	91

# 第Ⅰ章 経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

平成14年度に15年度以降実施予定の公共工事等に係る埋蔵文化財及び史跡・名勝・天然記念物の保護について照会を行ったところ、飯田建設事務所から急傾斜地崩壊対策（毛賀）の報告を受けた。当初、工事計画地は埋蔵文化財保有地にかからないと判断したが、飯田市教育委員会が平成9年度に刊行した『飯田の遺跡』に誤謬があり、現地を確認した結果、事業地内に橘山窯跡が位置することが判明した。橘山窯は近世末から近代初頭にかけて操業した陶器窯で、昭和24年に川路の画家今村泰蔵氏により発掘された経過があるが、記録等残されておらず、実態は不明であり、かつ地域の窯業史解明の上で欠くことのできない遺跡である。そこで、平成15年1月7日現地協議を行い、今回の工事により破壊を免れ得ないため、発掘調査を実施し記録保存することとなった。

## 第2節 調査の経過

諸協議に基づき、平成15年10月3日、飯田建設事務所長 野間広一郎と飯田市長 田中秀典との間で委受託費負担の契約を締結した。立木の補償・伐採を待って、平成16年1月27日橘山窯跡の発掘調査に着手した。人力により表土および塵芥を除去した後、検出された灰原について地形測量を行い、統いて掘り下げを行った。次いで灰原南側の平場部分について遺構検出作業の後、遺構掘り下げを行った。さらに灰原東側部分の掘り下げ・遺構検出を行い、個別の遺構について精査を行った。検出・調査された遺構について写真撮影・測量作業を実施し、埋め戻して2月27日現地作業を終了した。なお、飯田市埋蔵文化財基準マッシュ図に基づく測量調査を株式会社ジャステックに、また胎土の産地分析を行うため自然科学分析を株式会社パリノ・サーヴェイに委託実施した。調査期間中の2月21日には地元毛賀史学会はじめ市民を対象に発掘調査見学会を開催して、調査の成果を公表し、また文化財保護に対する啓蒙活動を行った。その後、飯田市考古資料館において、出土遺物や現地で記録された図面・写真類の基礎的な整理作業を行った。

平成16年度は出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物の実測・拓本とり、遺構図等の作成・トレース作業、写真類の整理、版組み、執筆・編集等整理作業を行い、本発掘調査報告書作成作業にあたった。

## 第3節 調査組織

### (1) 調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 富田泰啓

調査担当者 馬場保之  
調査員 渋谷恵美子・吉川金利・下平博行・坂井勇雄・羽生俊郎・佐々木嘉和  
作業員 金井照子 木下早苗 木下力弥 小平まなみ 小林定雄 下田美美子  
高橋七キ子 竹本常子 橘 千賀子 林 員子 植本宣子 牧内 修  
松本恭子 宮内真理子 森藤美知子 吉川悦子

(2) 指導 長野県教育委員会・愛知県陶磁資料館

(3) 事務局 飯田市教育委員会

尾曾 幹男 (教育次長)

小林 正春 (生涯学習課長)

吉川 豊 (生涯学習課文化財保護係長)

馬場 保之 ( " 文化財保護係 )

渋谷恵美子 ( " " )

佐々木行博 ( " " )

吉川 金利 ( " " " ~平成16年3月)

羽生 俊郎 ( " " " " )

下平 博行 ( " " " " 平成16年4月~ )

坂井 勇雄 ( " " " " )

## 第Ⅱ章 環 境

### 第1節 自然環境

飯田市松尾地区は、飯田市街地から南西に約2～5kmに位置し、飯田市全域から見ればほぼ中央部にあたる。東は天竜川を挟み下久堅地区に、北は松川で上郷地区と境を接する。南は毛賀沢川をはさみ竜丘地区となり、西は河岸段丘上で鼎地区と接する。

伊那谷の基本的な地形は、天竜川の流れに沿ったほぼ南北方向への断層段丘地形を特徴としている。飯田市は赤石山脈と木曽山脈に挟まれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

松尾地区はこの天竜川が東端を南流し、その氾濫原を含め5～6の段丘面で形成されている。それらは、中位と低位とに大別でき、その境は鳩ヶ峯八幡宮の社叢を中心とした段丘崖である。この段丘崖も小河川によりいくつかに開析され、北から南に、上の城・茶柄山、妙見山、八幡山、代田山、御射山原、松尾城跡とそれぞれに名前が付いている。

中位段丘の標高は480m前後でローム層に覆われた台地である。低位の段丘は前述の段丘崖下から天竜川までの間の松尾地区の大半である。この中に4面の小段丘があり、それぞれ2～5mの比高差がある。標高は380～430m程度である。それぞれの段丘面の広さは一様ではないがいずれも南北方向の段丘崖が確認でき、段丘崖直下には湿地帯が広がる場合が多い。しかし、中位段丘を開析する小河川が小扇状地を形成している箇所もあり、その部分では段丘崖の把握は困難となっている。また、これらの河川や段丘崖下の湧き水により、低位段丘は全体に水利は良い。明河原付近は天竜川の氾濫原で、北側の妙前・新井付近に天竜川支流松川の自然堤防が形成されており、内湾状を呈している。

気候面でみれば、伊那谷は比較的温かく、松尾地区は飯田市の中でもさらに温暖である。平均気温は、13℃に近く、降水量も年間1,600mm程度である。低位段丘は、後ろに段丘崖を背負っているため、冬の北風から守られる格好になっていることも要因のひとつにあげられる。

橋山窯跡は天竜川支流の毛賀沢川に面した低位段丘の上段に位置している。

### 第2節 歴史環境

松尾地区的遺跡を概観すると、天竜川氾濫原及び段丘崖を除いてほぼ全域が包蔵地である。地区内の埋蔵文化財発掘調査は近年になって増加し、各時代の様相が少しづつ明らかになってきている。

松尾地区の歴史を概観すると、縄文時代以前の遺構・遺物は中・低位段丘では断片的に報告されているにすぎない。上溝遺跡（下伊那誌編纂會 1991）では縄文時代草創期の有舌尖頭器が、明集会所付近（八幡 1972他）・寺所遺跡（飯田市教委 1999）では早期前半の押型文土器が出土しており、上郷・座光寺地区と同様、相当早くからこうした低地で人々が生活した様子が確認できる。妙前遺跡（同



1. 橘山窯跡
2. 寺所遺跡
3. 妙前大塚古墳
4. 妙前遺跡
5. 羽場獅子塚古墳
6. 姫塚古墳
7. 上溝遺跡・上溝天神塚古墳
8. おかん塚古墳
9. 上の城城跡
10. 久井遺跡
11. 松尾北の原遺跡・御射山獅子塚古墳・茶柄山古墳群
12. 鰐小場遺跡
13. 物見塚古墳
14. 八幡原遺跡・妙見山古墳
15. 八幡山古墳
16. 代田山狐塚古墳
17. 代田獅子塚古墳
18. 松尾城遺跡
19. 清水遺跡
20. 田圃遺跡
21. 御射山遺跡
22. 松尾南の原遺跡
23. 松尾城跡
24. 鈴岡城跡

挿図1 調査遺跡および周辺道路位置図

2001b) では中期後葉の集落の一画が調査されているし、田園遺跡では同期と考えられる小竪穴が調査されている(同 1993a)。これに対して、中位段丘上の遺跡では、それよりも古い旧石器時代の遺物の出土が報告されている。猿小場遺跡(同 1980)ではナイフ形石器、八幡原遺跡(同 1992a)では彫器が出土している。また、縄文時代前期の八幡原遺跡では竪穴住居址・土坑が確認されているし、中期の遺構が猿小場遺跡にある。しかし、後期・晚期についてはまだ報告がされていない。

弥生時代では、中期前半の寺所式の標式遺跡・寺所遺跡(神村 1967)が著名である。さらに後期には低位段丘の妙前遺跡・松尾城遺跡(同 1991a)・清水遺跡(同 1976・1991b)・田園遺跡(同 2000a) のほか、猿小場遺跡・松尾北の原遺跡(同 1996・2000b)など中位段丘上への進出がみられる。

古墳時代前期には、城遺跡・清水遺跡など前時代から継続した集落の姿がある。古墳時代後期の集落址は、妙前遺跡・久井遺跡(同 1993b)・上溝遺跡・田園遺跡など調査例は少ないが、現存する古墳の数から推察すればかなりの規模の集落が複数あったと考えるのが妥当である。

松尾地区に現存する古墳の数は、竜丘地区・座光寺地区と並んで多い。松尾地区にある古墳の中で最も古い古墳は、代田山に現存する前方後方墳、長野県史跡代田山孤塚古墳(平成6年2月17日指定、飯田市教委 1994)である。長野県内最古に属する古墳で、県内ではほぼ同時期に古墳が築造され始めたことが判ってきている。土器などの流れからみると、南信地方は弥生時代後期から東海地方との交流が活発になってきたようで、さらに弥生時代の終末にかけて全県下へと交流が拡大していく。こうした時代的な背景のもとに代田山孤塚古墳が築造されたと考えられる。続く5世紀代には、眉庇付冑が出土した妙前大塚(同 1972)、馬の副葬を伴う茶柄山古墳群など多くの古墳が築造される。地形と古墳群の関係をみると、中位段丘の縁辺には、帆立貝型古墳と見られる八幡山古墳、八幡原に物見塚古墳(同 1992b)・妙見山古墳(同 1992c)があった。八幡原の一段下位の北の原には、前方後円墳である御射山獅子塚古墳・茶柄山3号古墳とその周辺に点在する茶柄山古墳群がある。低位段丘Ⅱでは、天神塚古墳・おかん塚古墳・姫塚古墳・羽場獅子塚古墳の前方後円墳を中心とした上溝古墳群、代田獅子塚古墳を中心とした代田・上毛賀古墳群がある。低位段丘Ⅰでは、上溝古墳群の下位の妙前古墳群や水佐代・城古墳群、代田・上毛賀古墳群の下位に下毛賀古墳群があり、氾濫原を除く松尾地区全域に古墳が見られる。毛賀地区では、下毛賀1~7号古墳・張原古墳が知られているが(下伊那誌編纂會 1955)、いずれも現存していない。一方で、この時代には松尾城遺跡・八幡原遺跡・寺所遺跡・田園遺跡等で、方形周溝墓・円形周溝墓といった墳墓群が営まれている。特にこの4遺跡では、貼石をもつ方形周溝墓が確認されており、当時の墓制を研究する上で注目される。

奈良時代から平安時代にかけては、詳細時期ははっきりしないが、久井遺跡で2棟の掘立柱建物址が検出されている。もし、これが奈良時代のものとすれば、古代官衙址に関する可能性があり、伊那郡小村郷の舞庁もしくは東山道育良駅に比定することができるかもしれない。この他、猿小場遺跡・八幡原遺跡・妙前遺跡・田園遺跡・清水遺跡等で、奈良・平安時代の遺構が確認されている。平安時代には、猿小場遺跡で25軒の住居址が調査され相当規模の大きな集落が営まれているし、清水遺跡でも住居址や掘立柱建物址が確認されている。毛賀御射山遺跡は、布目瓦や瓦塔片が出土しており(飯田市教委 1978)、古代寺院が存在した場所である。

中世には、松尾城跡を信濃守護職である小笠原氏が本拠としており、毛賀沢川を挟んで対峙する鈴岡

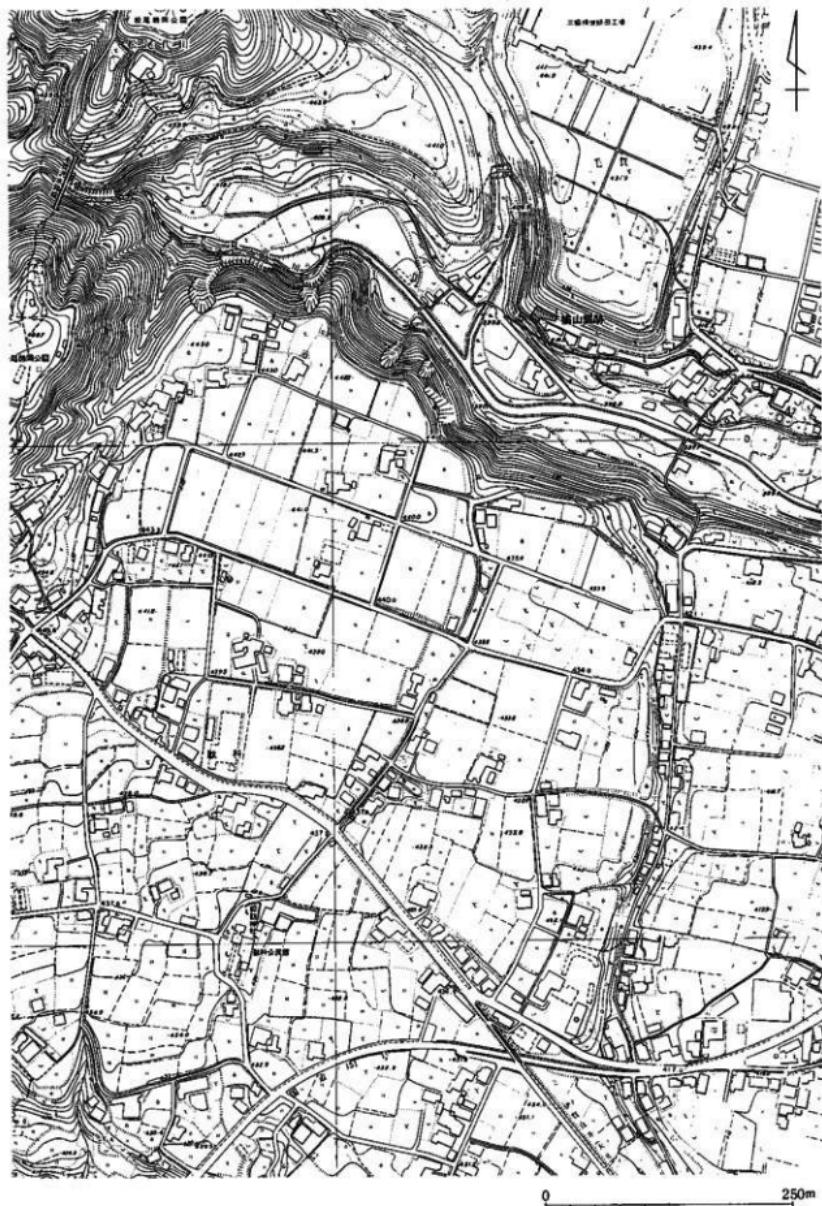


図2 調査地点位置図

城跡とともに、県の史跡に指定されている。さらに松尾地区の東端に「城」という地名が残っており、松尾城移動前の小笠原氏の居館跡があったといわれている。松尾城跡や南の原遺跡では、陶磁器や建物址が確認されている（同 1974）。この他、調査された城跡として上の城城跡があり、土壘などが把握されたが、築造・廃絶の時期や城主などについては不明な点が多い。また、松尾北の原遺跡では中世から近代に至るまでの墳墓群が調査されている。

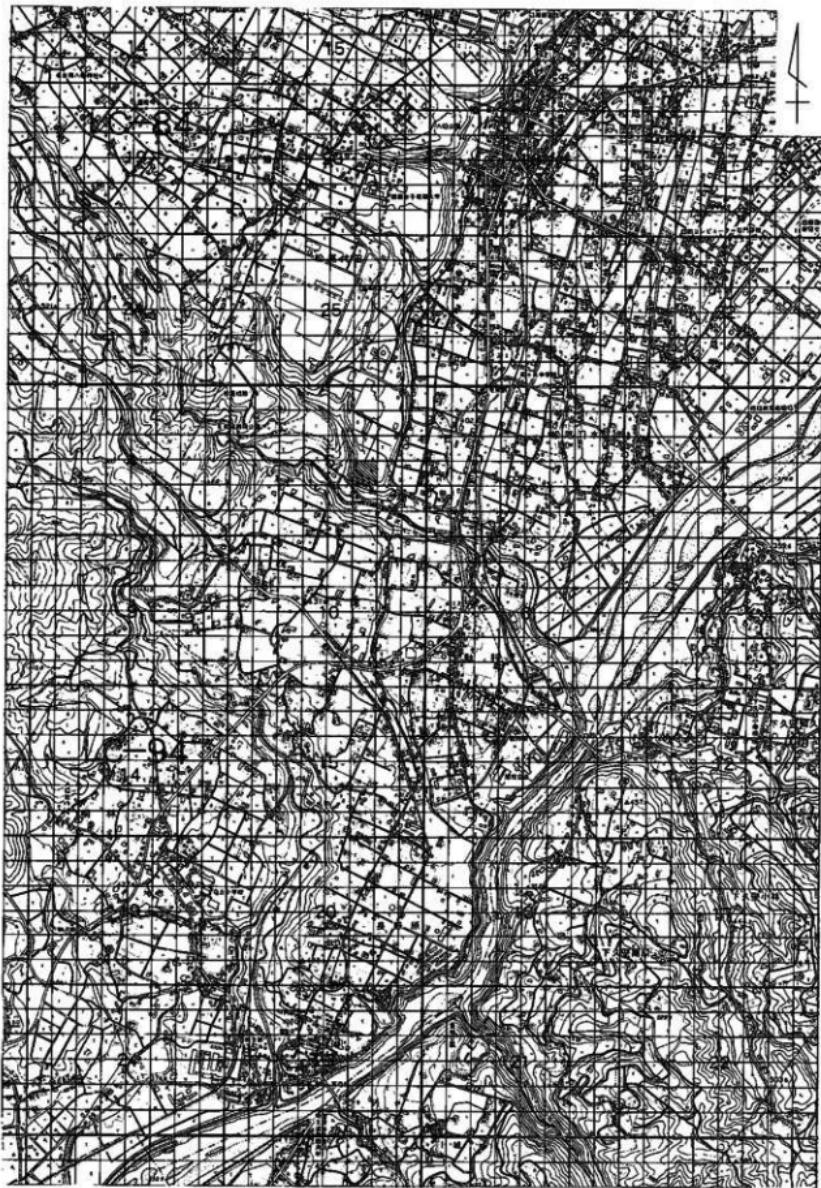
松尾地区の中央には、鬱蒼とした社叢に囲まれた鳩ヶ嶺八幡宮があり、鎌倉時代には名がみえる。八幡町はその門前町として発達してきた。本尊として奉られている誉田別尊坐像は重要文化財に指定されている。また、八幡町にはかつて街道が2本通っていた。そのうち一本が秋葉街道と呼ばれるもので、武田信玄の遠州侵攻の際に整備されたものである。もう一本は遠州街道で、中馬道として江戸時代に発達した。この2本の街道の分岐点は鳩ヶ嶺八幡宮の前であり、現在でも飯田市指定史跡の道標が立っており、交通の要所であることを示している。

松尾地区は、古代から近代に至るまでの飯田下伊那地方の政治・経済・文化の中心地の一つということができる。

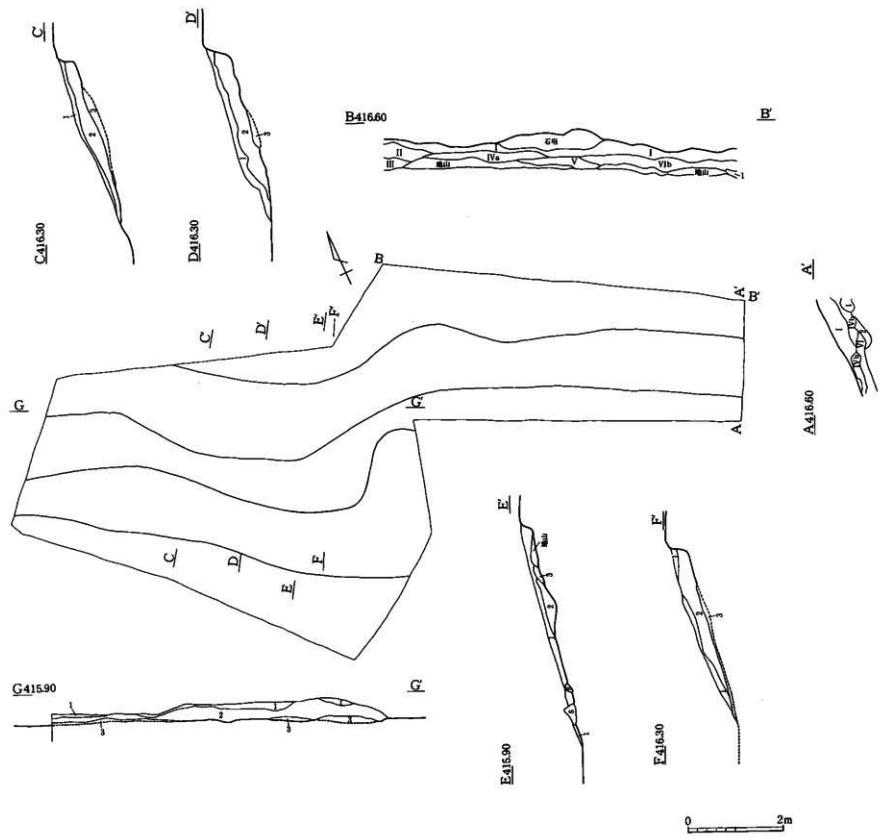
### 第3節 発掘前史

橋山窯跡は、昭和24年に川路の画家、今村泰蔵氏が毛賀の古老から話を聞いて発掘したもので、『毛賀史』（毛賀史編纂委員会 1987）によると幅約1.2m、縦4.6mの登窯であったといわれている。その際、『橋山』の刻印がつけられた陶器片が出土したことから、橋山窯跡と命名された。それ以前には『無常土焼』と呼ばれていたようである。

この「橋山」という名称については、地区内に「橋塾」という私塾が開かれていたこと、明治6年創立の小学校が「多智華学校」と称していたこと、「橋屋」の屋号や橋の家紋をもつ家があることを除くと、今日橋山という呼称に関わるものは地区内に残されていない。しかし、『信州伊奈郷村鑑』には「古来島田之内二而分ル、元和年中以村來ノ名ヲ立花村ト云、寛文十二子年御引渡シ、御帳ニ如古來ノ毛賀村ト御記シ渡ル」（信濃史料刊行会 1966）とあり、『長野県の地名』（平凡社 1979）には、「『信州伊奈郷村記』（前述の『信州伊奈郷村鑑』か）に『古来島田郷より別村に分る、脇坂様御領知之節は立花村といふ』とあるごとく、江戸時代の初期に一時、『立花村』といい『橋村』とも書いたが、堀氏時代になると旧のごとく『毛賀村』と称した」と解説されている。また『毛賀史』によると、飯田藩主脇坂氏の時代（1617～72年）に「毛賀」の語感を嫌って「橋村」とし、その後元に復したとの記述がある。



挿図3 基準メッシュ図区画調査位置



博図 4 灰原上面 微地形と基本層序

## 第Ⅲ章 調査結果

### 第1節 調査区の設定

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図（以下、基準メッシュ図と略す。）に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した（設定方法については飯田市教育委員会 2003『辻前遺跡』他参照）。今次調査地点は、LC-94 05-30内に位置する（挿図3）。

また、灰原の調査については、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいた調査区とは別に、灰原の広がりや表面の地形を考慮してC-C'、D-D'、F-F'、G-G'の4本のラインで分割し（挿図4）a～hの小グリッドを設定した（挿図6上）。遺物の取り上げや層序の把握は原則としてこの小グリッドを基準とした。なお、挿図5下は灰原以外で取り上げた遺物の補足的な等量線図であるが、若干東側に遺物の広がりがみられるものの、それほど多くの出土ではないことが看取される。

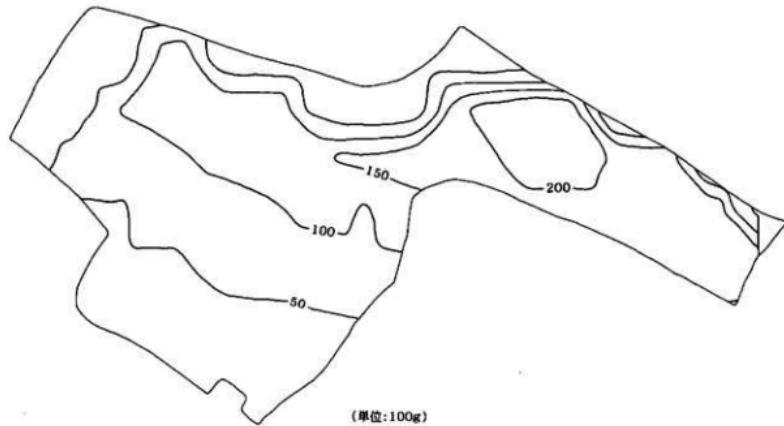
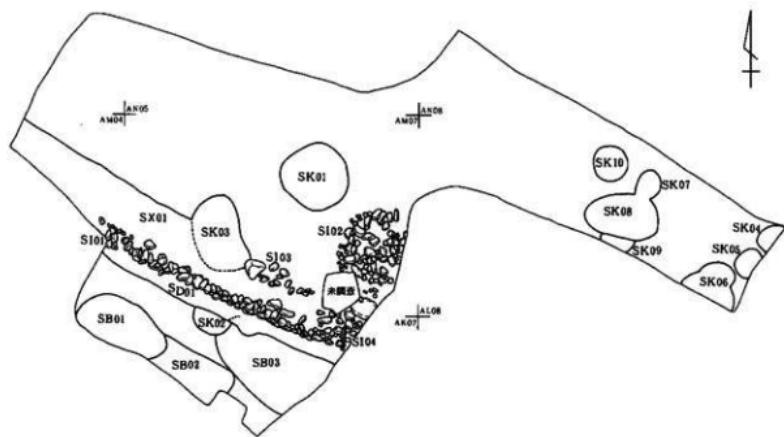
### 第2節 微地形（挿図2）

橋山窯跡は、天竜川の支流毛賀沢川とその支流北の沢川の合流部付近に位置する。天竜川に平行する低位段丘が毛賀沢川に沿って回り込んだ収束部分にあたり、狭小な平坦部から上位段丘の段丘崖下半の傾斜地にかけて立地している。毛賀沢川と本窯跡との比高差は約22m、上位段丘との比高差は約18mを測る。

土地の人の話によれば、本窯跡の西北西約250mの毛賀沢川に面した崖で粘土を採取していたという。

### 第3節 基本層序（挿図4）

調査区の西半は表土下に灰原が広く分布しており、土層の堆積状況は東半を中心に行い、南東側壁（A-A'）・北東側壁（B-B'）で把握した。傾斜が急なため斜面堆積になっており、各層の広がりもそれほど大きくない。崩落土がブロック状に分布・堆積していると考えられる。SK04の掘り込み面はVI層の下部となっている。灰原下の土層の堆積状況はE-E'で観察した。灰原下面の傾斜は緩やかで、地山までの層厚はほとんどない。



0 2m

挿図5 遺構全体図(上)と遺物等量線図(下)

## 第4節 橋山窯とそれ以降の遺構・遺物

### (1) 窯体

今回の事業地・調査区内に窯体はなく、聞き取りの結果、調査区西側隣接地に窯があったことが判明した。このため、窯構造その他についての情報は得ることができず、その実体は不明である。

### (2) 灰原

今回の発掘調査区域の西側半分、斜面部分を覆っている。50cm内外の厚さがあり、上下2層に分けることができる。下層が厚く、多量の焼土や小形・薄手の製品破片が多いという特徴がある(挿図4)が、それ以外は顕著な差はない。層序に大きな乱れは看取できない。挿図6・7は擂鉢とそれ以外の製品類、匣鉢・トチ・その他の窯詰道具等の重量を小グリッド毎に集計したものであるが、その重量分布に質的な差はみられない。また、窯詰道具や窯体の壊れたものが一箇所に集中するといった状況はみられない。灰原は調査区域より北側上方にも広がっているが、東側の土葬墓群とは明瞭に分布域を分かっている。区画施設は確認されなかったものの、墓塔等の存在により墓域が明瞭に意識されていたと考えられる。

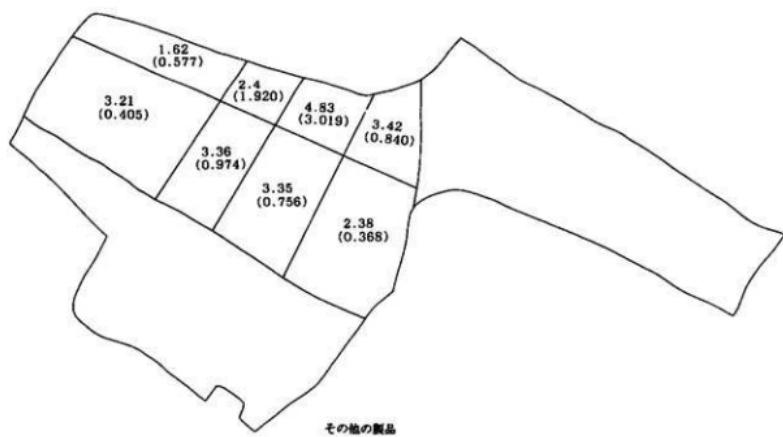
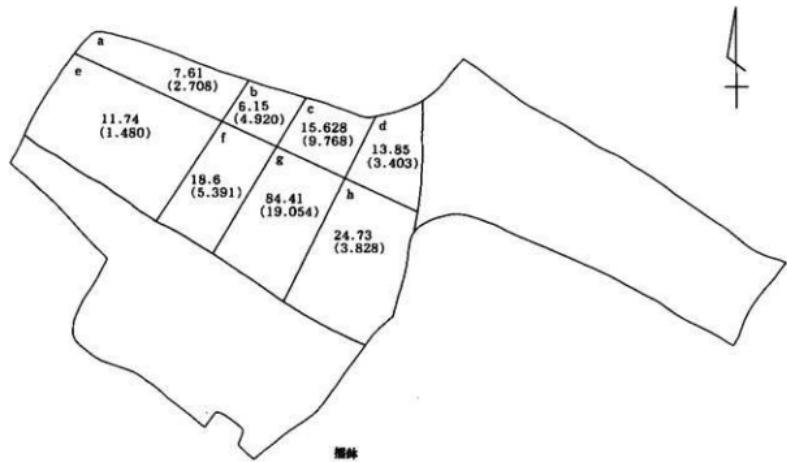
### (3) 窪穴(挿図7)

S B01とS B02は平面検出時には埋土も同一で、新旧関係は把握できなかった。ただ、S B02の方がふかふかして柔らかく、径10~20cm大の礫を多く含む。検出面より底面までこの埋土の状況は変わらないことから、S B01より新しい遺構と捉えた。しかし、遺物出土はS B01床面より上位レベルに限られており、新旧が逆である可能性も考えられる。S B01から陶器中鉢・徳久利・土瓶・土鍋片が出土した。S B03はS B01とほぼ接する部分があるが、新旧関係は不明である。両者の床面レベルはほぼ同一であり、何らかの関連性を有すると考えられる。出土遺物は陶器小碗・鉢・擂鉢・中甕・徳久利・中瓶・急須・土瓶があり、他に朱泥の急須・鰐肌釉の土瓶がある。

### (4) 石積・集石(挿図8・9)

石積S I 01は斜面部とその南側平坦部とを区分する位置に検出された。溝址SD01と一緒に構築・機能している。溝の側壁片面のみに施されたもので、掘り方の形状からみて、当初より片面側のみ積み上げることを企図していたものである。3ないし4段に野石が乱層積みされており、根石と天端石は比較的大形の礫が用いられる。AL04付近では僅かに裏込めの小礫が確認されたが、それ以外に礫は少ない。また、陶器破片や窯詰道具等が多く含まれる。本址の時期は、裏込めに中碗・徳久利・擂鉢等陶器破片や窯詰道具を含まれ、中でも擂鉢a種に灰原と接合関係がみられることから、窯の創業時期より下るものであることは確実である。しかし、それほど時間の隔たりがあったとは考えにくい。

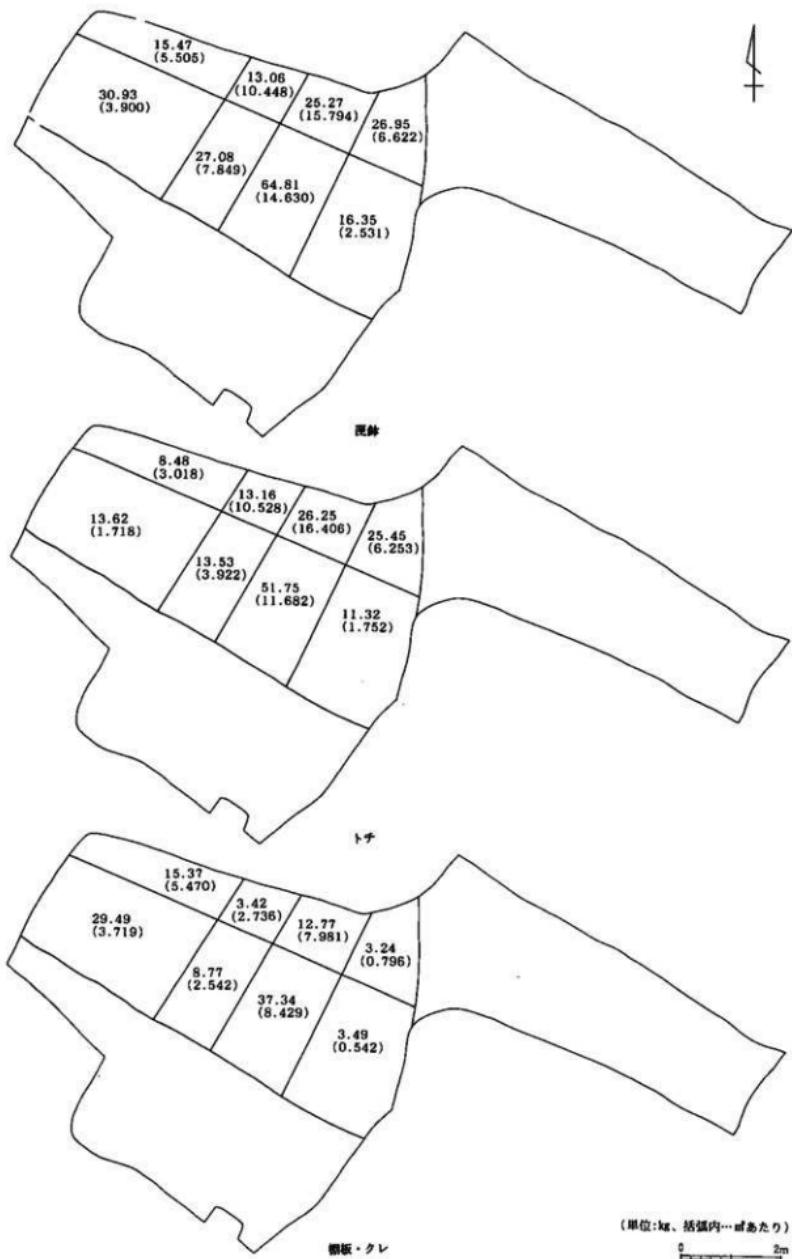
集石のうち、S I 03はSX01端部に沿って石が並ぶように検出されており、上方からの土砂崩落を支えるために配されたとも考えられる。またS I 02は礫下から陶器瓦が出土しており、ごく近々のものである。また、S I 04はS I 01・SD01の上部に被る。



(単位: kg、括弧内…mあたり)

0 2m

挿図 6 灰原遺物の重量分布 (1)



挿図7 灰原遺物の重量分布（2）

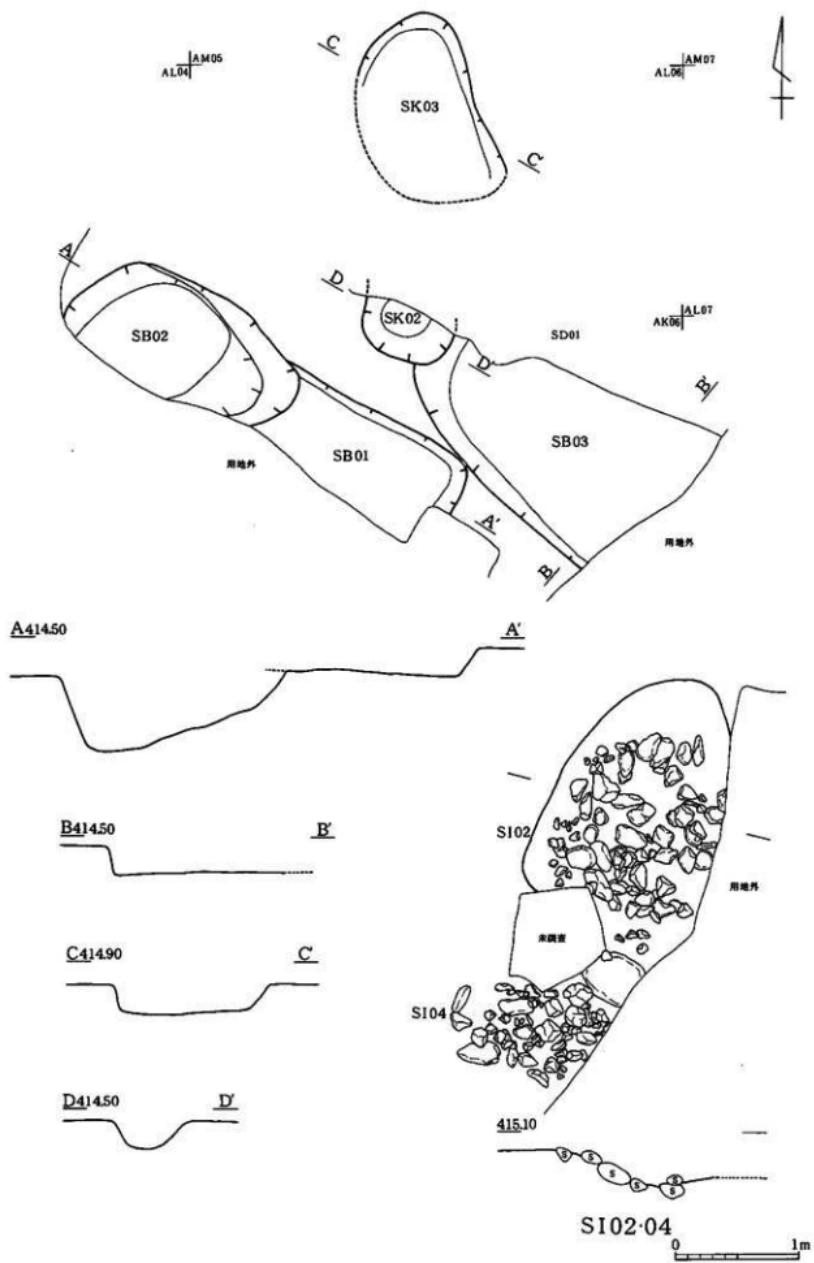


図8 SB01~03, SK02, 03, SI02, 04

#### (5) 溝址（擇図9）

S D01は幅32~68cm、深さ34~45cm、主軸方向N 63° Wを測る。南面側壁は直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。S B03重複部分はプランが不鮮明であったが、S B03底面下に連続が確認され、かつ溝址埋土が硬く締まっていること、S B03重複部分では床面レベルでS I 01の礫が欠失していることから、S B03が本址よりも新しいことが把握された。また廃絶時期については、聞き取りの結果昭和30年以前と推定され、埋土の上部にガラス瓶破片が含まれる。底面に流水の跡は観察できず、また山側のみに石積を有することから、山側からの雨水を排水することが主目的の施設と考えられる。同時に、斜面部・平坦部の境に占地していることから区画施設としての機能を併せ持つものといえる。出土遺物は陶器小碗・中鉢・擂鉢・鉢類蓋・中壺・中甕・小瓶・中瓶・土瓶・土鍋等があり、他に磁器小皿や蚊肌土瓶がある。遺物やS I 01の所見から、灰原より新しい時期のものである。

#### (6) その他（擇図9）

S X01はS I 01・S D01の北側で検出された。幅36~82cm、深さ25~40cmを測る。ほぼ平坦であり、S I 01・S D01と平行することから、通路と考えられる。

土坑SK01は灰原下層下で検出された。不整形で、壁は明確でなく、坑内に礫が入る。小碗・徳久利・土瓶といった陶器片が出土したが、窯詰道具・灰・窯体等はない。灰原形成時期よりも先行するが、それほど時間差はないと考えられる。SK02からは型紙刷りの瀬戸系磁器小碗が、またSK03からは陶器小碗・徳久利が出土している。

#### (7) 出土遺物

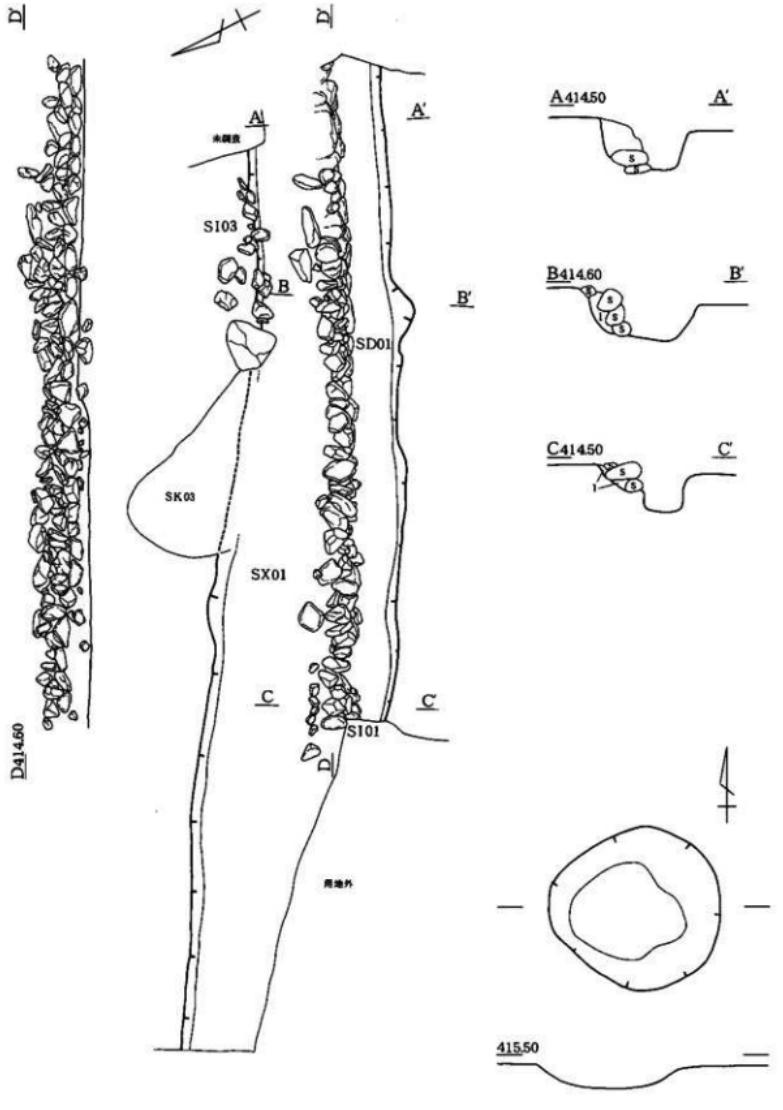
##### 1) 製品

本窯跡からは日用雑器類が出土している。出土遺物の重量についてみると、擂鉢を除く製品が65.217kg、擂鉢が363.755kgで、擂鉢が約82%を占めて圧倒的に多い。擂鉢を除く製品類では、小碗・鉢類・香炉・烟袋・土鍋・土瓶・急須・壺・壺・蓋・灯明受皿・花瓶・植木鉢・蘭引などの破片が見つかっている。色見と思われるものは管見に触れたかぎりでは出土していない。素焼き段階のものと、本焼き段階のものとがある。擂鉢は鉄釉、他の雑器類には緑がかかった釉が多用されている。緑がかかった釉については蛍光X線分析の結果、草木灰を原料とした灰釉であることが判明している。灰釉（オリーブ色に発色）と記述することとする。

なお、本窯跡の由来となった橋山の刻印は、見つかっていない。

##### ①小碗

器形は端反形・輪層形が多く、半筒形・天目形・浅半球形・變形がある。輪層形には、外面に青味がかかった鉄釉が施釉され内面から口縁にかけて白く発泡した釉薬が掛けられている6や、内外面化粧掛けされ口縁に鉄釉が掛けられた素焼き段階のもの等がある。半筒形8・9は長石釉ものと考えられる。他に、梅花文の描かれた端反形、内面化粧掛けされた上に内外面灰釉（オリーブ色に発色）が掛けられた端反形、内外灰釉（オリーブ色に発色）の天目形、鎌茶碗もみられる。胎土はきめが細かく黄色味を帯びたものが主体で素焼きの破片の中には、橋山焼の最大の特色といわれる「さらっと描かれた宝珠・梅花・山水などの鉄絵もの」とおぼしき破片がわずかながら見られる（2・3、図版20）。他に、石英・



**擇図9 SI01・SD01・SX01・SK01**

長石粒が目立つ粗い素地で、やや鼠色がかった釉薬の掛かったものがある。本焼き段階で割れたものその他、素焼き段階あるいは施釉後に割れたものも多い。

## ②中碗

浅半球形を呈すると考えられるもの（17）がある。

## ③五寸皿

素焼き段階のものとして、丸形のいわゆる「さらっと描かれた鉄絵もの」（18、写真図版20）がある。

## ④中皿

平形無高台の鉄釉もの（19）がある。

## ⑤灯明皿

20は薄手平形無高台の鉄釉ものである。

## ⑥中鉢

鉄釉もの、鉄釉地に内外灰釉（オリーブ色に発色）が掛けられたもの（33）、やや受口状を呈する口縁で内外灰釉（オリーブ色に発色）が掛けられたもの（29）、旬干形で灰釉（オリーブ色に発色）もの（26・28）、旬干形で内外面とも地が青緒がかった鉄釉で口縁に釉が掛け流しされるもの（22・30）等がある。27は端反形を呈する灰釉の碗で、赤紫～白濁の掛け流しが施される。

## ⑦擂鉢

口縁部の形態により以下の各種に分類した。このうち a 種・p 種・q 種は口縁部形態以外の属性も考慮した。

- a 種：内傾した端面で、内縁が僅かに鉗状を呈し、かつ外側に肥厚する。鉄釉地に外面および内面上方に灰釉（オリーブ色に発色）が施釉される。（35・36）
- b 種：外傾した端面で上端が丸味を帯び、外側がやや肥厚するもの（37・38）
- c 種：b 種よりも端面が長く丸味を帯び、外縁の稜が明確なもの（39～42）
- d 種：c 種より内縁が肥厚するもの（43～45）
- e 種：平坦な端面で稜がやや丸味を帯びるもの（46・47）
- f 種：e 種よりも内外縁が肥厚するもの（48・49）
- g 種：平坦な端面で、外側に肥厚するもの（50～52）
- h 種：平坦な端面で、外縁に低い張り出しがあるもの（53・54）
- i 種：h 種よりも外側の張り出しが大きいもの（55～58）
- j 種：平坦な端面で角頭状を呈し、内外縁が肥厚するもの（59～61）
- k 種：j 種よりも肥厚の程度が大きく、断面撥状を呈するもの（62・63）
- l 種：平坦口縁で内縁に低い張り出しを有し、外側に肥厚するもの（64・65）
- m 種：平坦口縁で、内面鉗状を呈するもの。器壁は外反する。（66～68）
- n 種：平坦口縁で、内面は三角の鉗状を呈するもの。器壁は直立する。（69・70）
- o 種：端面がやや内傾し、器壁はやや内湾かつ外縁が肥厚するもの（71）
- p 種：端面が丸頭状を呈し、折縁になるもの。いわゆる口縁折縁形の擂鉢（72～75）
- q 種：端面が丸頭状を呈し、外縁に三稜をもつ凸带を有するもの。いわゆる口縁外帶三段高台作りの擂鉢（76～79）

以上の分類のうち、b・c種、e・f種、h・i種、l・m・n種の近縁度が高い。p種の口唇部形態は土鍋と近似する。a～p種は体部が外反するものがほとんどで、僅かに外傾のものがある。内面の体部上方にナデにより稜ないし低い凸帯を作り出し、この稜ないし凸帯上か直下から櫛目がつけられる。底部内面の櫛目は、体部との境は同心円状、中央にはX状につけられる。また、q種は見込に放射状の櫛目が施される。調整についてみると、外面は底部からこの稜ないし凸帯付近までヘラケズリされるものが多く、a種は外面上半に凹線が4帯程度巡らされる。底面に糸切り痕をとどめるものはほとんどない。q種は内面が体部と底部に明瞭な境がなく、厚いぼってりとした高台がつく。胎土には他の播鉢類とこれといって差異はない。さらに、釉薬についてみると、a種は鉄釉地に内部上面～外面に灰釉（オリーブ色に発色）が、a種以外は鉄釉が掛けられている。

口縁部破片について種別の割合をみると、a種-2.3%、b-7.2%、c-7.0%、d-0.9%、e-6.9%、f-11.2%、g-15.5%、h-3.4%、i-16.7%、j-2.8%、k-4.5%、l-2.4%、m-1.4%、n-9.0%、o-1.0%、p-6.0%、q-1.7%であり、f・g・i・n種の比率が高い。

次に、施された刻印についてみると、刻印の施された破片は重量比で3.4%を占め、「信の字の下に橋の絵文」の刻印は灰釉（オリーブ色に発色）が施されたa種のみに、「男男」（男には「山並みがはるかな様子」の意味がある）の刻印が施されたものがc種のみに、またOに「合」の刻印が施されたものがd～n種に見つかっている。b種には刻印は見つかっていないが、近縁種のc種同様、「男男」の刻印が施されるものと考えられる。口縁外帯三段高台作りの播鉢q種には刻印が見つかっていない。刻印が見つかっているものの種別の比率は、高い方からg・i・m・c種となっている。刻印は稜ないし凸帯より上方に施され、逆位に押されたものもある。80は外面に刻書される。

#### ⑧鉢播鉢

84は角頭で内面受口状を呈し、薄手小形の鉄釉ものである。

#### ⑨植木鉢

小形で無高台の灰釉（オリーブ色に発色）植木鉢、大形で高台付の鉄釉植木鉢がある。

#### ⑩香炉

85は三足がつくるもので、ざっくりとした素地で石英等を多く含む。

#### ⑪中壺

卵形（88・89・91）ないし丸形（90）で外面に鉄釉が施され、肩部に灰釉（オリーブ色に発色）を点々と滴らす。

#### ⑫小壺

口縁部のみの破片で器形ははっきりしないが、錢甕ないし孫太形の小壺と思われるものがある。

#### ⑬中壺

胴丸形輪高台の灰釉（オリーブ色に発色）もの（92・93）、同じく胴丸形輪高台の鉄釉もの（94・95・107）がある。後者は大部分が表土からの出土であり、胎土も他の製品と異なることから他産地の製品の可能性がある。92・93は口縁部端面が釉剥ぎされ、蓋が付くと考えられる。他に、肩丸形無頸の高台付壺で、外面鉄釉が掛けられたもの（98、あるいは火鉢・火消し壺かもしれない）がある。

#### ⑭大壺

胴丸形輪高台の鉄釉もの（108・109）がある。同一個体で、中壺の94・95・107と同様の特徴があ

り、他産地の製品の可能性がある。

⑤小瓶

「べこかん」形の鉄軸小瓶、口頭部に白釉が掛け流しされる玉縁の小瓶等がある。

⑥中瓶

中瓶は接合できた資料はいずれも底部から胴部のもので(110~113)、全体形の判る物は少ない。灰釉・灰釉(オリーブ色に発色)が掛けられたものの他、鉄軸の上にこれらが掛けられたものもある。瓶類は3個の小さな団子トチを底部に挿んで焼かれる(111)。

⑦燐徳久利

鉄軸地に灰釉(オリーブ色に発色)が掛けた端反形や鳶口形の燐徳久利、鉄軸ものがある。

⑧仏花瓶

114は盤口形を呈する鉄軸ものの仏花瓶と思われる。

⑨急須

横手形の鉄軸急須がある。手および注口以外は口縁部破片ばかりで(115・116)、全体形のわかるものはない。

⑩土瓶

丸形・胴折形があり、いずれも無頬である点が大きな特徴である。鉄軸地に灰釉(オリーブ色に発色)が外面に掛けられたもの(118)が多く、他にわずかに鉄軸もの(117)がある。118は基筒底形でツメが3個つくものと考えられる。119は本焼き前のもの。土瓶蓋(131・132)には宝珠摘み(130)が付く。土瓶には「信の字の下に桶の絵文」の刻印(119)が見られる。

⑪土鍋

丸形三足板状双耳の鉄軸土鍋(121・120)が多いと思われるが、丸形無足紐状双耳の灰釉土鍋もある。後者はあるいは別産地のものかもしれない。丸頭状の端面で内面受口状を呈し、内外縁が肥厚する。受口部の立ち上がりには大小があり、大きいものは中・大形品、小さいものは小形品である。板状双耳には2ないし3孔が開けられる。

⑫秉燭(123~125)

素焼き段階のもの(125)が多い。有孔皿形の薄手小形のもので、芯立があり、器壁は外反する。他に秉燭ないし灯明皿台と考えられるものとして、身部が円筒形を呈し平らな台がつくもの(129)がある。

⑬灯明受皿

受け部に上皿から滴り落ちた油を油溜りに回収するための小孔の付いた灰釉灯明受皿(126)、油溝切立状の鉄軸灯明受皿(127)がある。128も鉄軸施釉で油溝切立状と考えられる。

⑭蘭引

137は内面に螺旋状にやや上向きの鈎が付される。上下端は段重のように他部分と重ねるよう、平坦に仕上げられている。138は底部で質の子状に穿孔される。灰釉(オリーブ色に発色)が施される同一個体で、蘭引の中段部分(「渡り部」、抽出物回収槽)と考えられる。

⑮その他

139は底部に極小の刻印がみられる。○に「口てい」と判読される。『毛賀史』に記載された「不て

い」(布袋)の刻印と考えられる。器種不明である。この他、本窯で焼かれた製品ではないが、見込みに五弁花が描かれた半筒形小碗、中碗、丸形底広の五寸皿(以上、肥前系磁器)、中碗・菊花形皿・土瓶(以上、瀬戸系磁器)が出土している。

## 2) 窯詰道具

匣鉢(さや)や輪ドチ・足付き輪ドチ・団子トチ、棚板などが出土している。

### ① 匣鉢

- a種：小形で深いもの(140)。ロクロ成形され、底部は回転糸切りされる。胴下半底近くには、指掛けかと考えられる窪みが数箇所に配される。直径16~17cm、高さ8~9cm、厚さ1.5~2cm程度を測り、器壁に比べ底部は肉厚である。胎土に粗い石英が多く含まれ、10mmを超える石英・岩片も含まれる。
- b種：小形で浅いもの。a種同様ロクロ成形され、底部は回転糸切りされる。胴下半底近くには、指掛けかと考えられる窪みが数箇所に配される。胎土に細かい石英を多く含み、粗い岩片も僅かに混じる。さらに3タイプに細分される。b1種は器壁が内湾し、平底を呈するもの(141)。口唇部が丸頭状を呈する。直径14.5~15.5cm、高さ5~5.5cm、厚さ1cm程度を測る。b2種は器壁が内湾し、底部がやや丸味を帯び凸となるもの(143)。同じく口唇部が丸頭状を呈する。直径18cm、高さ6cm、厚さ1cm程度を測る。b3種は器壁が外反するタイプで底は中央がやや浮く(142)。口唇部は平坦にされている。直径17~17.5cm、高さ5.5~6cm、厚さ1cm程度を測るが、口縁部は1.5cm程度と肥厚する。b1・b2種に比して胎土が精良で、色調も赤味が強い。
- c種：大形で底部がやや丸味を帯び凸となるもの(144)。ロクロ成形され、内面は丁寧にナデられ、底部は回転糸切り後ヘラナデされている。胴下半底近くには、指掛けかと考えられる窪みが数箇所に配される。直径24~25cm、厚さ2cm程度を測る。高さは不明であるが、b種同様立ちは小さいものと考えられる。径1mm程度の石英等を多く含む。
- d種：c種よりも底部の張り出しが大きいもの(145)。成形や胎土・焼成はc種と共通する。底の付け根部分や中央部内面にひび割れが偏在しており、底部の突出は焼け歪みの結果かもしれない。
- e種：ほぼ平板状で湾曲があまりない。ロクロ成形されていることから、口径がかなり大きいものと思われる。あるいは単に高熱を受けて焼け歪んだだけかもしれない。いずれも破片で、図示できるものはない。胎土はa・b1・b2・c種と同様、径1mm程度の石英等を多く含む。
- f種：全体形は不明であるが、コップを伏せたように上方がややすばんだ筒状のものではないかと思われる(146)。あるいは天地が逆かもしれない。口径が8.5cmと小さく、胎土はb3種と似て径1mm程度の石英を少量含み精良である。内面に調整痕を顕著にとどめることから製品ではないと考えたが、性格は不明である。

### ② 輪ドチ

- a種：短筒状のリング形を呈する(147・148)。いわゆる輪ドチの一種である。ロクロ成形され、下端は回転糸切りされる。上端に通気用の抉り部が4箇所設けられる。直径11.5~14cm、高さ3~4.5cm、厚さ1~1.5cm程度を測る。胎土はやや精良で、径1mm程度の石英を含む。

b種：不整円形の平板状を呈する、輪ドチの一類である（149～151）。一面はほぼ平坦で、粘土紐で輪を作り、上から手のひら等でつぶして扁平にしている。ナデ調整が主であるが、中には敷物や布と考えられる圧痕を持つものがある。直径10cmを超える幅2～3cm程度の大形のもの（149）と、小形薄手のもの（151）等がある。胎土に1mm程度の砂粒を多く含む。

#### ③足付き輪ドチ

大形品（152）は推定8脚で径14cm・幅2cm・高さ2.3cmを測る。小形品（153）は3脚で径8～10cm・幅1.5～2cm・高さ約2cmを測る。胎土に石英等は含まず精良で焼きの綺麗なもののと、径1～3mmの石英を多く含み焼きのあまり良くないものがある。前者は身部に比較的丁寧なナデ調整が施される。

#### ④紐トチ（154～157）

紐状のもので団子トチなどと組み合わせて用いられる。不定形で焼成の際製品に適宜あてがわれたもの。幅1.2～1.8cm程度で、胎土に径1～2mm程度の石英等含む。

#### ⑤握りトチ（158・159）

片手ないし両手で握っただけの細長いもので、指痕をとどめる。不定形で焼成の際製品に適宜あてがわれたもの。胎土に径1mm程度の石英を多く含む。

#### ⑥団子トチ（160～163）

団子状に丸めたものである。不定形で焼成の際製品に適宜あてがわれたもの。胎土は握りトチと類似する。

#### ⑦棚板

4種が認められた。

a種：円形・板状を呈するもの（168）。直径17cm、厚さ2～3cm程度で片面側が僅かに窪む。胎土に1～10mm程度の石英等砂粒を多く含み、きめが粗い。

b種：方ないし長方形・板状を呈するもの（169）。いずれも破片で、長・短辺のサイズが把握できるものはない。厚さは3～3.5cmとやや厚いが、胎土についてはa種と変わりがない。

c種：大形の箱状を呈するもの（171）。長辺のサイズが把握できるものはないが、短辺のわかるものは19cmを測る。厚さは4～5.5cm程度である。胎土はa種と同様、1～10mm程度の石英等砂粒を多く含み、きめが粗い。サイズや形状から窓体構築材の箱格れとも考えられるが、製品の溶着が認められることから、製品を焼く際の台として用いられたと考えられる。

d種：小形の箱状を呈するもの（170）。c種同様、長辺は不明であり、判明する例では短辺10cm、厚さ4.5cmを測る。胎土・焼成はa種と同一である。

c・d種はレンガを思わせる箱状を呈し、クレとよばれる窓体構築材に近いかと思われたが、クレが日干煉瓦（平凡社 1984）とされる点とは異なっており、また、製品の溶着痕があることから棚板に含めた。

#### ⑧その他

小形の角棒状を呈するもので、a・b2種がある。角グレの一類かと考えたが、焼成を受けており、棚板等を支える役割などを果たしたと考えられる。

a種：やや扁平なもの（173・174）。長辺12cm、短辺6cm、厚さ3～4cm程度を測る。胎土は棚板

c・d種と同一である。174のように、上下端に团子トチが付着するものがあり、棚板等を支える柱として用いられたものと考えられる。

b種：断面方形を呈するもの（172）。長辺10cm、短辺・厚さ5cmを測る。a種より砂気が強い。

### 3) 窯体構築材

#### ①握りクレ

長辺20cm・短辺10cm・厚さ10cm程度に粘土を固めたもので、焼成されてはいない。窯体の残骸と同様の粘土が用いられているが、強い火熱を受けてはおらず、窯体を構築する際に芯材として使われたものと考えられる。

### 4) 柱（164～166）

主に円錐形を呈する素焼きの製品で、底面中央部に穿孔されるもので、孔の径は開口部より孔央部の方が大きい。窯体の色見穴の柱である。体部は火熱を受けて器面がボロボロに荒れている。大形（164）と小形（165・166）の大小2種あり、166のように体部に段を有するものもある。胎土に径1mm程度の石英等を多く含む。

### 5) その他（167）

高壊状の台と思われるが、台部か身部かは不明である。ロクロ成形され、内面ナデ、外面にケズリが施される。胎土は精良である。

## 第5節 その他の遺構・遺物

灰原の東側部分は、表面では擂鉢破片や窯詰道具類が採取されたが、窯に関連する施設などは確認できなかった。以前は墓地であったと伝えられる部分である。

#### （1）土坑・土葬墓（擇図8～10）

土葬墓はSK06・SK08の2基が調査された。長方形の墓坑であり、ともに上に置き石がなされる。埋葬体位についてみると、SK06は北頭位側臥東面屈葬、SK08は西頭位側臥南面屈葬である。SK08は成人男性と推定され、分銅と考えられる金属製品（176）・羅字煙管の吸口（177）・火打ち石と推定される石片2点、六道錢の一部と考えられる銅錢1枚、平鉄釘が副葬される。分銅と考えられる176は、本体が鉄製で内部は空洞であり、銅製の鎖が付けられる。平鉄釘は176の本体と銹着しており、火打金の代用と考えられる。

調査地点北西側に近代になって改葬された墓地の中には、元禄の年紀をもつものがあり、埋葬や墓塔の造立は少なくともこの時期まで遡る可能性がある。

なお、平成16年度に急傾斜地崩壊対策工事実施中に人骨および墓塔が出土した。発掘調査実施部分の東側にあたり、上記墓地に改葬される前のものと考えられる。

## (2) 遺構外出土遺物

東半部分から縄文時代後期前葉の壺之内1式（178・179）および後葉の深鉢片、硬砂岩製の横刃形石器（181・182）が出土している。また土葬墓からではないが「寛永通宝」銅銭1点が出土しており、土葬墓に副葬された六道鏡の一部と考えられる。

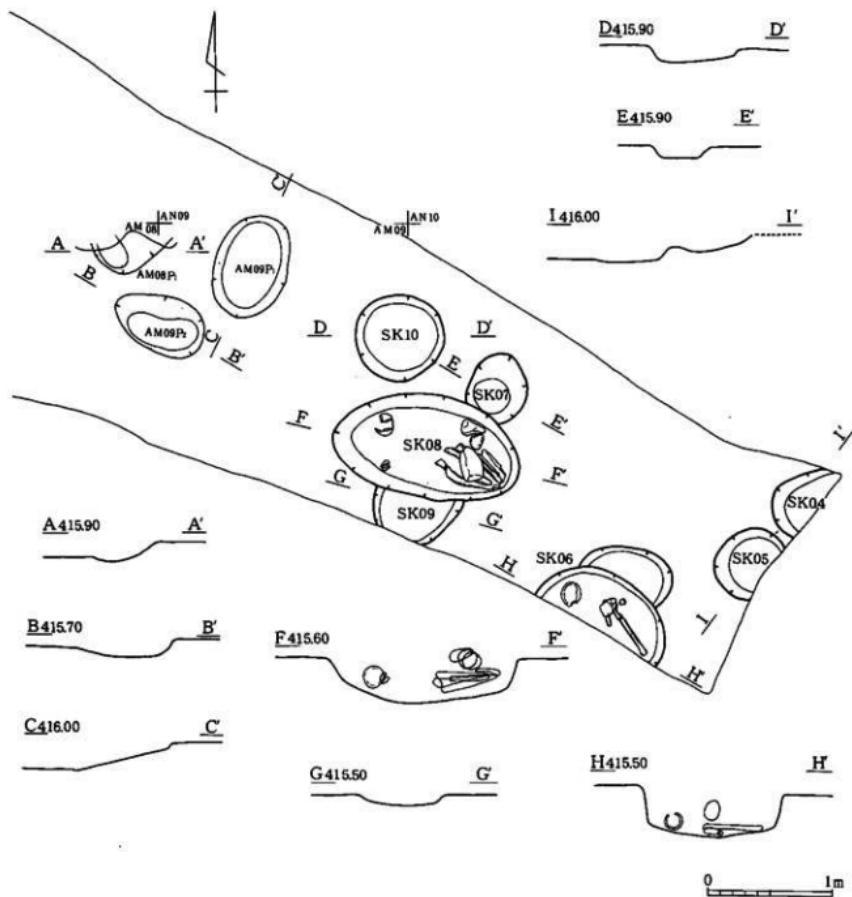


図10 SK04~10 周辺柱穴平面図

### (1) 目的

長野県飯田市に所在する橋山窯跡は、天竜川の支流毛賀沢川の左岸に臨む段丘崖の南側斜面に立地し、江戸時代末期から明治時代にかけて操業した窯であると考えられているが、その規模や構造は現段階では明らかとなっていない。当窯跡の発掘調査では、茶碗、皿、鉢、擂鉢などの生活雑器類の製品や、窯道具、窯体が出土している。したがって、これらの出土遺物の材質と焼成・被熱温度を明らかとし、また、比較することにより、当時の窯業に関する有意な情報が得られると推測された。

そこで、本報告では、これらの製品や窯道具、窯体について、薄片作製による顕微鏡観察と蛍光X線分析により、材質の特性を把握し、比較を行う。さらに、これらの材質の特性から得られる地質学的情報と窯跡周辺の地質学的背景を比較し、各試料の材質の由来についても検討する。また、製品に施されている釉薬についても、その化学組成を調査し、当該期の窯業に関する基礎資料を作成する。

### (2) 試料

試料は、橋山窯跡から出土した本焼き段階の製品である中壺と擂鉢、窯詰道具である匣鉢、窯体片の計4点である。なお、上述の中壺や擂鉢は釉薬が認められる。

### (3) 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられており、その手法は鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法に大きく分類される。前者は重鉱物分析や薄片作製などが主として用いられ、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられる。

これらの分析の特徴は、重鉱物分析では、胎土の特徴をパターンとして捉えやすいことや、地質との関連性を考えやすいといった利点がある。一方、須恵器や陶磁器等の重鉱物粒をあまり含まない高温焼成品では、適正なデータが得られないという問題もある。これに対し、薄片観察では、試料の種類にかかわらず、胎土中における砂粒の量をはじめ、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類などを捉えることが可能であり、得られる情報が多いといった利点がある。さらに、鉱物の高温変質をみるとことにより、焼成温度の推定も可能である。蛍光X線分析は、胎土中の砂粒だけではなく、素地土となる粘土も含めた特性を表し、機器分析による数値データが得られることから客觀性、再現性という点で優れている。

今回の分析では、4試料の胎土の特徴や焼成温度の推定を薄片観察によって行い、さらに、製品である中壺、擂鉢の2点については、蛍光X線分析による化学組成も求める。この蛍光X線分析は、破壊分析であるガラスピート法を用いる。また、中壺に認められる釉薬の由来を検討するため、非破壊分析による蛍光X線分析を行い、その化学組成を明らかにする。以下に、各手法の手順を記す。

#### 1) 薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の

種類構成を明らかにする。薄片下におけるこれらの量比を多量は○、少量は△などの記号で示す。また、胎土の基質は、孔隙の分布する程度と砂の配列や孔隙などの方向性の確認や、基質を構成する粘土が焼成の結果、どの程度ガラス化してどの程度粘土鉱物として残存しているか、酸化鉄などの鉄分の含まれる程度について定性的に記載する。

## 2) 蛍光X線分析（ガラスピート法）

主要10元素のSiO<sub>2</sub>、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、TiO<sub>2</sub>、MnO、MgO、CaO、Na<sub>2</sub>O、K<sub>2</sub>O、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>およびLOIについて蛍光X線分析法によって分析する。以下に、各分析条件を記す。

### ①装置

理学電機工業社製RIX1000 (FP法のグループ定量プログラム)

### ②試料調製

岩石カッターで切断した試料を振動ミル（平工製作所製TI100:10ml容タンクステンカーバイト容器）で微粉碎し、105°Cで4時間乾燥する。この微粉碎試料についてガラスピートを以下の条件で作成する。なお、胎土表面に塗装または釉薬が確認される試料については、これらを除去し、試料として供する。

溶融装置：自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ピートサンプラー（3491A1）

溶剤及び希釈率：融剤（ホウ酸リチウム）5.000g : 試料0.500g

剥離剤：LiI（溶融中1回投入）

溶融温度：1200°C 約7分

### ③測定条件

X線管：Cr (50kV-50mA)

スペクトル：全元素K $\alpha$

分光結晶：LiF, PET, TAP, Ge

検出器：F-PC, SC

計数時間：Peak40sec, Back20sec

## 3) 蛍光X線分析（非破壊法）

中壢の釉薬の化学成分調査を目的とし、蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ製：SEA2120L）による元素分析を実施する。ただし、本調査では土器表面の釉薬の厚みが不明であり、釉薬の下地（胎土）の成分も同時に検出される可能性が予想されることから、釉薬塗布部分と胎土部分の両方を計測し、比較対比することとした。

なお、本調査によって得られた特性X線スペクトルは元素定性を実施した後、FP法（ファンダメンタルパラメーター法）により、酸化物として定量演算を行い、相対含有率（質量%）を算出することとした。ただし、本調査では釉薬部分と胎土部分との比較対比を目的とすることから、ノンスタンダードによるFP定量演算を行い、概略の含有量を求めるに止まっている。したがって、前項における胎土の化学組成とは必ずしも一致するとは限らず、結果の評価には留意が必要となる。さらに、本装置による定量可能な元素は<sub>11</sub>Naから<sub>92</sub>Uの範囲にある元素であり、これら範囲外の元素についてはFP法による定量演算に利用することが出来ない事にも注意する必要がある。本調査における測定条件の詳細を以下に示す。

測定装置：SEA2120L

管球ターゲット元素：Rh

## コリメータ：管球ターゲット元素

フィルター：なし

マイラー：OFF

## 雾围气：真空

励起電圧 (kV) : 15, 50

管電流 ( $\mu$ A)：自動設定

測定時間（秒）：300

定性元素：Na~Ca, Sc~U

#### (4) 分析結果

### 1) 薄片作製觀察

結果を表1に示す。砂粒の種類構成は、4点の試料間に特に大きな差異は認められず、いずれも中量程度の砂粒を含み、粒径の淘汰度は不良である。ただし、中麦は、やや淘汰が良好であり、この他の試料と比べ細粒の傾向がある。一方、鉱物片では、石英を主体とし、微量の斜長石やジルコンを含み（ただし、中麦のみカリ長石を少量含む）、岩石片では花崗岩に由来すると考えられる多結晶石英または花崗岩を微量～少量含み、他に微量のチャートや結晶片岩などを伴っている。

各試料における高温による鉱物の変質の状況は、表1に記載する通りである。この状況から、中型は  
1150°C +、擂鉢、匣鉢および窓体は、いずれも1250°C +の焼成・被熱温度が推定される。

## 2) 蛍光X線分析（ガラスピート法）

結果を表2に示す。中堀、播鉢は、ほぼ同様の組成を示す。すなわち、 $\text{SiO}_2$ は約70%、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ は約20%であり、他に $\text{Fe}_2\text{O}_3$ が14%、 $\text{K}_2\text{O}$ が2%程度含まれる。

图1. 胎大囊片断面结果

区分	種類	試験 試料名	耐候性												備考					
			砂粒			砂粒の			粗			成								
			粒度	表面	形状	粒度	形状	片	石	片	粗	成	粗	成						
本焼き陶器	中板	②	○	△	0.9	○	△	+	+	+	+	+	+	△	×	×	△	○	×	カリ石は落着し、粗長い矢状柱状を示す。斜面の粗粒部には、落着したカリ石が見られる。
本焼き陶器	薄板	②	○	×	1.7	○	+	+	+	△			○	×	×	+	○	●	石には落着カリが発生し、カリ長柱は完全に消滅している。斜面も落着して大部分がムライト化している。このような落着状況から落着温度は、1250℃ + 上限と考えられる。	
窯業道具	匣鉢	①	○	○	2.8	○	+	+	+	△	△	+	+	○	×	×	+	○	●	石には落着カリが発生し、カリ長柱は完全に消滅している。斜面も落着して大部分がムライト化している。落着状況から落着温度は、1250℃ + 上限と考えられる。
窯業	-	⑤	○	○	3.1	○	+		△	+	+	+	○	×	×	○	●	石には落着カリが発生し、カリ長柱は完全に消滅している。斜面も落着して大部分がムライト化している。ムライトの粒度は、0.3mmに満たないもので認められる。落着してガラス化しており、光沢表面を有する。このような落着状況から落着温度は、1250℃ + 上限と考えられる。		
																				石には落着不透明硝酸銀が散在しており、斑点は黒色化している。

表2. 銀昆の粘土の化学組成

試料名	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	電気炉	合計
中粒	68.86	0.74	21.81	4.31	0.03	0.78	0.49	0.92	1.89	0.05	0.12	100.00
粗粒	68.40	0.75	20.50	3.84	0.02	0.74	0.52	0.92	2.05	0.04	2.22	100.00

◆ 標題與章節

表3. 中壺の陶器造市部分と胎土部分の蛍光X線分析結果（検出元素及び半定量結果）

資料番号	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>
陶器部分	60.00	0.48	15.68	4.16	0.19	2.72	11.94	1.23	2.73	0.74
胎土部分	62.19	0.64	25.98	5.25	0.06	1.94	0.60	0.80	2.10	0.09

資料番号	S	Cu	Zn	Rb	Sr	Zr	Ba
陶器部分	0.01	0.01	0.01	0.01	0.03	0.03	0.04
胎土部分	0.04	0.01	0.01	0.01	0.02	0.04	0.04

\* 単位は重量%

### 3) 蛍光X線分析（非破壊法）

結果を表3に示す。胎土部分に比べて釉薬部分に特に多い元素はCaOであり、またMgO、Na<sub>2</sub>O、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>なども比較的多いとみることができる。このことから、使用されている釉薬は、草木灰を原料とした灰釉と推測される。

### (5) 考 察

橋山窯跡の所在する飯田市は、伊那盆地の南部に相当する。この盆地に分布している河岸段丘や沖積低地を構成する碎屑物は、天竜川とその支流によって盆地周辺の山地より供給されたものである。伊那盆地を取り巻く山地を構成している地質は、領家帯とよばれる地質であり、主に花崗岩類と変成岩類から構成されている（日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会、1988）。また、伊那山地側の領家帯の分布域の外側には三波川帯とよばれる変成岩類からなる地質と秩父帯とよばれる堆積岩類からなる地質が分布し、伊那盆地の北部の木曾山脈側には美濃帯とよばれる堆積岩類からなる地質も分布している（前掲同）。このことから、飯田市および周辺域に分布する碎屑物は、花崗岩類、変成岩類および堆積岩類の岩石片とそれらに由来する鉱物片が混在していると考えられる。

本分析結果では、中壺と匣鉢の胎土には、花崗岩と変成岩である結晶片岩そして堆積岩であるチャートが混在しており、上述の飯田市の地質学的背景を反映していると見ることができる。また、窯体の胎土では堆積岩が認められず、擂鉢の胎土では堆積岩と変成岩が認められないが、花崗岩類を主体とする岩石片の組成は、上述した地質学的背景と異質なものではなく、特に、中壺と擂鉢の化学組成がほぼ同様であることは、このことを支持していると考えられる。

焼成温度については、製品である擂鉢、窯道具の匣鉢、窯体のいずれからも1250℃+という高温の可能性が示唆された。このことから、橋山窯跡においては、比較的高温の焼成が行われていたと推測される。中壺のように焼成温度の若干低い製品も認められたが、窯体の位置、製品によって焼成温度が異なっていた可能性が考えられる。

以上の結果、現段階では、橋山窯跡の製品や窯道具、窯体の材料の採取地の特定には至らなかったが、今後、周辺域における同時期の窯跡等の分析結果を蓄積することで、より詳細な議論が可能となることが期待される。

## 第IV章 総 括

調査の結果は以上のとおりであり、窯本体は今回の発掘調査では直接把握されず、『毛賀史』に記載された窯の構造を確認することはできなかった。しかし窯跡そのものは事業地外として後世に残されることになり、結果的にその保存がはかられたことは幸いであった。

これまで本窯の製品については断片的に紹介されている程度であった。生産された製品類は、中小の碗・皿・鉢類、擂鉢・鍔擂鉢、香炉、中小の壺・甕類、徳久利・中瓶、急須・土瓶、土鍋、灯明具類といった日用雑器類が主体であり、その内容が明らかにされた点が今次調査の大きな成果のひとつといえる。また、蘭引や鍔擂鉢といった特殊品も生産されていたことが明らかにされた。製品の約8割は擂鉢類で、口縁部や底部の形態、施釉の有無、それに刻印から考えると、その生産に関わる少なくとも4人以上の工人がいたことがわかる。擂鉢のうち、a種とした灰軸（オリーブ色に発色）が掛けられた製品は、土瓶にも同じ刻印がみられることや、同種の釉薬が中鉢・大鉢・中壺・中甕・中瓶・蘭引など主要製品にみられることから、本窯の中心的な工人の手によるものと考えられる。さらに不明製品の「不てい」や今回確認されなかつた「橘山」の刻印等からすればさらに2人以上の工人の存在が推定されよう。なお「不てい」については、『毛賀史』第八章の一項「毛賀旧道（遠州街道）の宿場」に「…その北隣（林矩貴氏との間）はほてい屋と言つて酢屋があり…」という記述があり、さらに同項で「時代は明確ではないが何時の代か毛賀地域は僅かな戸数の中から飯田藩のお仕送り御用達を拝命した人が七人もいたと言うことを聞かされております。」として、本窯跡から指呼の間にあった宿場に裕福な屋敷がいくつもあったことが触れられている。その中には個人ではなく村単位に遠く南安曇村まで金貸しをしていた富豪の話などあり、こうした富豪達を単独ないし複数の出資者として本窯が開窯されたのかもしれない。また、橘塾を開いた関家の漢方医閻文亮や「お下の別家」の造り酒屋等は、医療具・酒道具としての蘭引の出土との関わりを連想させるし、本窯で生産された中壺・中瓶は酢や酒等の移動用の容器としても位置づけ得る。

なお、本窯で生産された製品類は高さ20cm、口径40cm以下の中・小形品に限られ、これまで『毛賀史』で紹介されている大形の製品はみられない。所有者の丸山昌寿氏の家人からは、茶を入れて運んできた際の容器であると聞いており、大壺や大甕といった大形の製品は焼かれていなことが明らかである。

本窯の技術的な系譜がどの産地にあるかについては、窯の構造がわからぬためはっきりしない部分がある。しかし、高台付の擂鉢、鍔手の茶碗や土瓶の破片、匣鉢や棚板などの窯詰道具等、瀬戸・美濃との関連をうかがわせる資料が多く出土している。また、尾林焼水野窯では何度か瀬戸との交流があったといわれており、当地方の諸窯が多く瀬戸・美濃との結びつきを指摘されていることから、橘山窯でも瀬戸・美濃の影響を強く受けていると思われる。

製品の焼成方法としては素焼きと本焼きの二度焼きが行われており、こうした焼成方法がみられる塩尻市洗馬焼和兵衛窯では、信楽系の技法との関連が指摘されている（塩尻市教委 1996）。以前は素焼きと本焼きの二度焼きは瀬戸・美濃系には見られないといわれていたが、磁器生産が始まつてからは瀬

戸でも導入されており、焼成の失敗を減らす上で効果があったといわれている。また、素焼き段階の小破損品では、灰褐色を呈しきめの細かな素地が看取される。こうした特徴は美濃焼との関連が指摘されたことがある一方で、鉄分が多い粘土を酸化気味に焼いた場合通有の現象であり、鉄分が多い当地方の土壤特性を考慮すれば必ずしも美濃の粘土との関連にこだわる必要はないという説もある。粘土の自然科学分析を踏まえ、今後さらに周辺窯等の製品についても分析を進め、素地土の入手先について明らかにしていく必要がある。さらに蘭引の生産に関しては、高遠焼や洗馬焼和兵衛窯のものについて、京・信楽系の技術の影響が指摘されており（愛知県陶磁資料館 1997）、本窯の場合にも考慮しておく必要がある。

県内の陶土の特徴については、「鉄分を多く含んでいるため耐火度が低く、焼き上がりの土色が赤褐色や暗褐色となり、厚手ですっしりと重いのが一般的」で「このような陶土の性質をふまえた上で、成形、釉法等に数々の工夫が重ねられると共に、生産器種の選択も行われた」とされ、灰釉による素地の鉄分と調和したオリーブ色の種やかな発色を得たり、不透性的鉄釉を全面に掛けたり一旦白化粧土を掛けたから施釉し素地の土色を隠す方法が採られたりしていることが指摘されている（同前）。さらに、「僅かに産出する良質な陶土は、限られた製品に用いられており」、「厚目ですっしりとした安定感あふれる特徴をふまえ」「壺、甕、捏鉢、徳利等の台所用具を中心とした器種」が生産されている（同前）。こうした諸特徴は本窯でも共通している。なお、本窯で特徴的とされるオリーブ色に発色した釉も、灰釉と素地や鉄釉との調和により得られたものであろう。

窯の操業年代については、残念ながら明示できる資料はない。文書類についても新たな史料の発見は難しい状況にある。ただ、擂鉢にq種とした口縁外帯三段高台作りものがある。この高台付の擂鉢は備前焼の影響を受けたものといわれ、備前では17世紀末から18世紀前半に登場し、18世紀後半から19世紀にはほとんどのものに高台がつくようになる（江戸遺跡研究会編 2001）。瀬戸本業焼では、19世紀以降に大高窯を初出として作られるようになり（瀬戸市歴史民俗資料館 1988）、19世紀の第2四半期以降には赤津村・下品野村で焼かれるようになる（同 1989）。本窯での生産はこれより下ることは確実で、おそらく19世紀半ば以降に位置づくものと推定される。また、先述の本窯との関連が大きいと考えられる漢方医閻文亮が開業したのが天保14（1843）年正月廿八日であり（松尾村青年会 1928）、蘭引の生産はこれより下ることは疑いない。また、必ずしも下限を示すものではないが、S B03やSD01、それに表土等から出土した鮫肌釉の土瓶の生産年代は明治7年以降（東北大学埋蔵文化財調査会 1985）であり、窯の操業年代として推定されている幕末～明治初年の年代観とは矛盾しない。さらに、刻印のうち、「信」字に横の花文が組合わさった刻印は、「信」の字が「信州」・「信濃国」を表すものと考えられ、筑摩県設置が明治4（1871）年であることから、あるいは窯の操業年代が明治4年以前に遡ることを示すと言いうかもしれない。なお、「信」の字からは、少し飛躍するが「信州・信濃国」外を流通対象とした生産を目論んでいたことも推察される。

江戸時代後期から末にかけて、飯田下伊那地域では朝臣洞窯・小川窯・富田焼富田窯・同大原窯・風越窯・東窯・濃間窯・谷川窯・久米窯・尾林焼水野窯が相次いで開窯している。それは運搬に向かない重量品や扱れ易いものの生産を目的としたものであった。本窯も推定される操業年代から、こうした潮流に乗ったものということができる。

本窯の操業期間についてはそれほど長くなかったことは、記録類が一切残っていないこと、また灰原からの出土量が少ないと、さらに単独に1基のみ窯が構築されていたであろうことから容易に想像できる。

灰原の南側で調査された片面石積みを有する溝址・豊穴・土坑等の遺構群は、調査時に工房址との関係が想定されたが、新旧関係や出土遺物から窯よりも新しい時代のものと考えられる。

『毛賀史』によれば、昭和24年春に今村泰蔵氏が調査した時には「その後三ヶ月位を費やして大半の陶片を採取整理して…」と記述されている。今回の調査で灰原として把握し調査した部分は、窯が操業していた時に形成された本来の灰原なのか、あるいは昭和24年の調査の結果残された二次的な堆積であるのかはひとつの争点であった。灰原断面の所見からは層序に大きな乱れではなく、窯詰道具や窯体の壊れたものが一箇所に集中するといった状況はみられない。擂鉢やそれ以外の製品類、窯結道具の重量分布には質的な差は見いだし難いことは前述したとおりであり、従って灰原として調査した部分が二次的な堆積状況を示すとは考えられない。今村氏の調査した箇所は窯本体部分には限られるとみて間違いなさそうである。

次に工房址について考えてみる。まず、灰原南側の平坦部分は、片面石積みを有する溝址で灰原とは区画されている。SB01～03といった豊穴や土坑SK02が分布しており、この部分に工房址等があつた可能性がまず考えられる。しかし、窯跡下を流れる太郎井についてみると、開削年代は不明であるものの、延宝元（1678）年9月の『三分郎井筋御引帳控』が残っていることから、太郎井・次郎井の開削は中世以前に遡ることはほぼ確実である。すると開窯時には太郎井と灰原の間には工房を置くだけの十分なスペースはなく、工房に付随した何らかの施設の存在は考えられても、この部分に主要な工房が置かれた可能性は低いといえる。未調査部分ではあるが、太郎井の南側ないし調査区域北西側にその場を求めることが妥当であろう。このうち、調査区域北西側に位置する墓地には以前屋敷があったといわれ、前述の溝址や通路はこの方向に延びている。この墓地部分が工房の主要な施設があった場所と考えられる。

前述のとおり、近世後期以降には、飯田城下郊に多くの陶器窯が相次いで開窯されている。このことは、長野県内で数少ない陶器生産に適した粘土産出、一大消費地としての飯田城下町の需要以外に、江戸中期以降の地場産業の振興や、一大生産地の瀬戸・美濃に近く、交通の要衝であった飯田の地理的・地勢的な性格によるものと考えられる。本窯における陶器生産の実態解明は、今後、商業都市飯田城下町の特性や、周辺農村における産業振興と経済力の発展等の諸問題を解き明かす一助となること疑いない。

飯田の旧市街地では、明治維新の際の廃城や飯田大火とそこからの復興によって、飯田城および飯田城下町の姿や記録の大半が失われてしまっている。今日当市教委では考古学的成果が飯田の近世史解明の上で重要な役割を果たすという認識に立って、市街地の再開発等に先立ち発掘調査を実施している。調査によって、飯田城の構造や城内の暮らしをはじめ、町並の復元や商家等の屋敷地の様子、さらに生活用具にみる都市住民の生活実態、城下を襲った火災・水害等の歴史が次第に明らかにされてきている。

こうした消費地における調査はまだまだ始まったばかりであり、今のところ橘山焼の破片すら見つかってはいない。しかし、今後消費地における調査が進展することにより、本窯製品の流通実態が明らかにされ、併せて本窯の操業年代も明らかにされることが期待される。

#### 引用参考文献

- 愛知県陶磁資料館 1997 『長野のやきもの』  
飯田市教育委員会 1972 『妙前大塚（3）号古墳』  
飯田市教育委員会 1974 『松尾南の原遺跡発掘調査概報』  
飯田市教育委員会 1976 『清水遺跡』  
飯田市教育委員会 1978 『毛賀御射山遺跡』  
飯田市教育委員会 1980 『猿小場遺跡』  
飯田市教育委員会 1991a 『城遺跡』  
飯田市教育委員会 1991b 『清水遺跡』  
飯田市教育委員会 1992a 『八幡原遺跡』  
飯田市教育委員会 1992b 『八幡原遺跡 物見塚古墳』  
飯田市教育委員会 1992c 『八幡原遺跡』  
飯田市教育委員会 1993a 『田園遺跡』  
飯田市教育委員会 1993b 『久井遺跡』  
飯田市教育委員会 1994 『長野県飯田市代田山狐塚古墳の測量調査』  
飯田市教育委員会 1996 『北の原遺跡（遺物編）』  
飯田市教育委員会 1999 『寺所遺跡』  
飯田市教育委員会 2000a 『田圃遺跡（Ⅱ）』  
飯田市教育委員会 2000b 『北の原遺跡（遺構編）』  
飯田市教育委員会 2001a 『飯田城下町遺跡』  
飯田市教育委員会 2001b 『妙前遺跡』  
飯田市教育委員会 2002 『開善寺境内遺跡』  
飯田市教育委員会 2003 『辻前遺跡』  
飯田市教育委員会 2004 『上溝11号古墳』  
江戸遺跡研究会編 2001 『図説江戸考古学研究事典』柏書房  
神村 透 1967 「飯田市寺所遺跡とその他の遺跡」『長野県考古学会誌』 4  
毛賀史編纂委員会 1987 『毛賀史』  
佐藤魁信 1982 「寺所遺跡と寺所式土器」『中部高地の考古学』 II  
塙尻市教育委員会 1996 『洗馬焼和兵衛窯跡』  
下伊那誌編纂會 1955 『下伊那史』第二卷  
下伊那誌編纂會 1955 『下伊那史』第三卷  
下伊那誌編纂會 1991 『下伊那史』第一卷  
信濃史料刊行会 1966 『信州伊奈郡郷村郷』『新編信濃史料叢書第四巻』

- 瀬戸市歴史民俗資料館 1988 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅶ』
- 瀬戸市歴史民俗資料館 1989 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅷ』
- 東北大学埋蔵文化財調査会 1985 『東北大学埋蔵文化財調査年報1』
- 長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 全一巻（一）遺跡地名表』
- 長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 全一巻（三）主要遺跡（南信）』
- 日本の地質「中部地方I」編集委員会 1968 『日本の地質4 中部地方I』共立出版 330p.
- 平凡社刊 1979 『長野県の地名』日本歴史地名大系20
- 平凡社刊 1984 『やきもの事典』
- 松尾村誌編纂委員会 1982 『松尾村誌』
- 松尾村青年会 1928 『松尾村小史』
- 八幡一郎 1972 『日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究（上）』

通報名	地質層色	土性	検出位置	法面 (cm)	系輪	平面形	出土遺物	時期	備考
基本層序	表土	I	5YR 3/3	暗赤褐色	SIC				
A-A'	II	5YR 3/2	暗赤褐色	SIC					
B-B'	III	JOYR 3/2	黒褐色	SIC					
IVa	75YR 2/2	黒褐色	SIC						
IVb	75YR 2/2	黒褐色	SIC						
V	75YR 3/2	黒褐色	SIC						
VI	75YR 2/1	黒褐色	SIC						
1	10YR 3/2	黒褐色	SIC						
2	75YR 3/1	黒褐色	SIC						
3	75YR 3/1	黒褐色	SIC						
灰原下土層 E-E'	1	75YR 2/1	黒褐色	SIC					
2	75YR 3/2	黒褐色	SIC						
3	75YR 4/2	灰褐色	SIC						
灰原原	1	75YR 3/2	灰褐色	SIC					
2	5YR 3/3	暗赤褐色	SIC						
3	10YR 3/2	黒褐色	SIC						
SB01	75YR 3/2	黒褐色	SIC	AK06	155×82×22	N57°W	圓丸方形容器	近代?	
SB02	75YR 3/1	黒褐色	SIC	AK04	197×85×51	N63°E	不整形	近代?	
SB03	10YR 3/3	暗褐色	SIC	AK06	213×144×24	N63°W	不明	陶器一小碗・鉢・壺・中壺・施久利・	
SK01	75YR 2/1	黒褐色	SIC	AM06	140×133×18	IN90°W	稍円形容器	陶器一小碗・急須・土瓶	近代
SK02	75YR 3/2	黒褐色	SIC	AK05	78×(40)×22	—	—	陶器一小碗・急須・土瓶	
SK03	10YR 3/2	黒褐色	SIC	AL05	(130)×87×22	N26°W	(輪円形容器)	磁器一小碗・施久利	
SK04	10YR 3/2	黒褐色	SIC	AL11	(72)×(38)×24	—	—	陶器一小碗	近代
SK05	75YR 3/1	黒褐色	SIC	AL11	59×(41)×17	N87°W	W(円形容器)	—	
SK06	75YR 2/1	黒褐色	SIC	AL10	115×(76)×40	N82°W	—	近世	土轉轍
SK07	75YR 3/2	黒褐色	SIC	AM10	(52)×47×10	IN32°E	(輪円形容器)	—	
SK08	10YR 3/2	黒褐色	SIC	AL10	84×36	N78°W	稍円形容器	煙管・分離具	近世
SK09	75YR 3/2	黒褐色	SIC	AL10	71×(33)×8	—	—	—	
SK10	75YR 3/1	黒褐色	SIC	AM09	71×69×13	IN90°W	円形容器	陶器一中壺・施久利・壺鉢・深鉢道具	近代
SI01	1	75YR 3/2	黒褐色	SIC	AL05	540以上×50×56	—	—	近代
SI02	—	—	—	AL07	178×(130)×35	—	—	—	近代
SI02籠り方	—	—	—	AL06	(224)×(146)×35	—	—	—	近代
SI03	—	—	—	AK07	150×48×—	—	—	—	近代
SI04	—	—	—	AL05	130×(120)×—	—	—	—	近代
SD01	10YR 3/2	黒褐色	SIC	AL05	540以上×32~68×34~45	N63°W	陶器一小崩・中壺・鉢類・鉢蓋・中壺	中壺・小瓶・中壺・土瓶・土鍋	近代
SX01	75YR 3/1	黒褐色	SIC	AM04	730以上×32~25×40~45	N57°W	—	—	—

表 4 土层注记·透構属性表

No.	出土地点	器名	分類	法寸 (mm)				重さ (g)	成形	鑑定法			地土色	印・墨など	作 品		参考				
				a	b	c	d			角 端	文様	装飾特徴	製作地		製作場所	製作年代					
1	岡原山中層	小鉢	逆反形	120	56	42	—	—	ロクロ	内外白化した施	なし	なし	灰青	なし	桃山窯	日本～明治初期					
2	岡原山中層	小鉢	逆反形	100	—	—	—	—	ロクロ	内外白化した施	無	無文	灰青	なし	桃山窯	日本～明治初期					
3	岡原山中層	小鉢	逆反形	120	—	—	—	—	ロクロ	内外白化した施	無	宝塚文	灰青	なし	桃山窯	日本～明治初期					
4	岡原山中層	小鉢	逆反形	120	—	—	—	—	ロクロ	不明	無	—	黄白	なし	桃山窯	日本～明治初期	表面を洗ぬ。施の上に施物が剥げている。焼成時に至らず。				
5	AM094山上	小鉢	逆反形	96	—	—	—	—	ロクロ	化粧接ぎ	なし	なし	灰白	なし	桃山窯	日本～明治初期	表面を洗ぬ。				
6	岡原山中層	小鉢	逆反形	76	—	—	78	—	ロクロ	施物地、内～外露外壁 化粧接ぎ	なし	なし	灰青	なし	桃山窯	日本～明治初期					
7	岡原山中層	小鉢	逆反形	90	—	—	91	—	ロクロ	施物地、内～外露外壁 灰被	なし	なし	灰白	なし	桃山窯	日本～明治初期					
8	岡原山中層	小鉢	半開形	90	—	—	—	—	ロクロ	内外長石跡	なし	なし	灰青	なし	桃山窯	日本～明治初期					
9	岡原山中層	小鉢	半開形	86	—	—	—	—	ロクロ	内外長石跡	なし	なし	灰青	なし	桃山窯	日本～明治初期					
10	岡原山中層	小鉢	安部	91	—	—	—	—	ロクロ	内外白化した施	なし	なし	灰白	なし	桃山窯	日本～明治初期					
11	岡原山中層	小鉢	安部	—	—	64	90	—	ロクロ	—	なし	なし	白	なし	桃山窯	日本～明治初期	表面を洗ぬ。				
12	岡原山中層	小鉢	逆反形	—	—	40	—	—	ロクロ	外灰施 (オリーブ色)、 外露地	なし	なし	暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期	別に口端部破片あり				
13	AL077窓	小鉢	逆反形	—	—	35	—	—	ロクロ	外灰施 (オリーブ色)、 外露地	なし	なし	暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期	別に口端部破片あり				
14	岡原山中層	小鉢	天目形	—	—	42	—	—	ロクロ	内外白化した施	なし	なし	灰白	なし	桃山窯	日本～明治初期					
15	岡原山中層	小鉢	逆反形	—	—	44	—	—	ロクロ	内外白化した施	なし	なし	灰青	なし	桃山窯	日本～明治初期					
16	岡原山中層	小鉢	—	—	—	32	—	—	ロクロ	—	なし	なし	白	なし	桃山窯	日本～明治初期	表面を洗ぬ。				
17	岡原山中層	中鉢	透半球形	140	—	—	—	—	ロクロ	—	なし	なし	灰青	なし	桃山窯	日本～明治初期					
18	岡原山中層	五寸鉢	丸形	140	—	—	—	—	ロクロ	不明	無	店草	灰青	なし	桃山窯	日本～明治初期	表面を洗ぬ。				
19	岡原山中層	中鉢	平形深高台	180	21	90	—	—	ロクロ	内外長地	なし	なし	白	なし	桃山窯	日本～明治初期					
20	岡原山中層	打皿	平形深高台	120	18	76	—	—	ロクロ	内外長地	なし	なし	暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期					
21	岡原山中層	小鉢?	圓形	105	—	—	—	—	ロクロ	施物地、内面灰施 (オリーブ色)、 外露地	なし	なし	灰青	なし	桃山窯	日本～明治初期					
22	岡原山中層	中鉢	勾手形	200	91	72	—	—	ロクロ	内に施地、口縁に 剥離された施物の発掘	なし	なし	白	なし	桃山窯	日本～明治初期					
23	岡原山中層	中鉢	勾手形	178	93	76	—	—	ロクロ	施物地、口縁に剥離 された施物の発掘	なし	なし	白	なし	桃山窯	日本～明治初期	口縁に物干し骨付、 口縁部破片				
24	岡原山中層	中鉢	勾手形	200	94	80	—	—	ロクロ	施物地、剥離剥落し	なし	なし	暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期	口縁部				
25	岡原山中層	中鉢	勾手形	160	—	—	—	—	ロクロ	施物地、剥離剥落し	なし	なし	暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期	口縁部と記される				
26	岡原山中層	中鉢	勾手形	160	—	—	—	—	ロクロ	内面灰施 (オリーブ色)	なし	なし	暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期	口縁部				
27	岡原山中層	中鉢	—	172	83	66	—	—	ロクロ	内面灰施、口縁に剥離 した施物の後退し	なし	なし	暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期	表面に多く付る。 見入あり				
28	岡原山中層	中鉢	勾手形?	140	—	—	—	—	ロクロ	内面灰施 (オリーブ色)	なし	なし	暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期					
29	岡原山中層	中鉢	—	110	—	—	—	—	ロクロ	内面灰施 (オリーブ色)	なし	なし	暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期					
30	岡原山中層	中鉢	—	—	72	—	—	—	ロクロ	内面高台と内外施地、 口縁部に剥離された 施物の発掘	なし	なし	灰青～ 暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期					
31	土器	中鉢	—	—	60	—	—	—	ロクロ	施物地、灰施? 剥離し	なし	なし	暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期					
32	岡原山中層	中鉢	—	—	86	—	—	—	ロクロ	内外長地	なし	なし	暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期	内面に粘土目2種				
33	岡原山中層	中鉢	—	216	—	—	—	—	ロクロ	内外灰施 (オリーブ色)	なし	なし	暗灰	なし	桃山窯	日本～明治初期					
34	岡原山中層	大鉢	—	300	127	106	—	—	ロクロ	内外灰施 (オリーブ色)	なし	なし	白～灰	なし	桃山窯	日本～明治初期	あるいは剥離か? 外面 下部へケツリ				
35	岡原山中層	圓鉢	凸凹圓形 (a種)	320	—	—	—	—	ロクロ	施物地、内面下部一 周灰施 (オリーブ色)	—	赤褐	なし	なし	桃山窯	日本～明治初期					

表5 陶器観察表(1)

No.	検出地点	器種	分類	法 直 (mm)				重 量 (g)	成 形	調 査 技 法			施 土 色	印・模 など	製 作		備考		
				a	b	c	d			輪 周		文 織	裏面特徴		製作地	製作年代			
										内面目	外面目	見込部	目盛状						
36	高尾土	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	-	-	160	-	-	ロクロ	鉛筆地、外唇・底面灰 色(オリーブ色)	内面目	見込部	周一本 筋	なし	橘山窯	草木・明 治初期	見込・底面に施土日		
37	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	340	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	-	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り		
38	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	380	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り	
39	灰原g上層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	380	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上下半までヘラケズ り	
40	表土	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	380	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青	-	橘山窯	草木・明 治初期		
41	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	360	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	-	橘山窯	草木・明 治初期		
42	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	340	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期		
43	表土	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	340	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期		
44	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	380	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青	なし	橘山窯	草木・明 治初期		
45	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	380	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期	施土に石英を少混合	
46	灰原上層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	360	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り	
47	灰原中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	360	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り	
48	灰原g上層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	380	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り	
49	灰原d上層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	340	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期		
50	灰原a	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	320	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	○に合	橘山窯	草木・明 治初期		
51	灰原g上層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	360	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り	
52	灰原h中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	380	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青~青 灰	なし	橘山窯	草木・明 治初期		
53	灰原e中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	380	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期		
54	灰原g上層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	340	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り	
55	灰原g上層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	350	128	140	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	見込部	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上下半ヘラケズり、 見込に施土日	
56	表土	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	360	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青	○に合	橘山窯	草木・明 治初期		
57	灰原h中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	290	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色~ 灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期	ほぼ底端まで遺存、 底端下半までヘラケズり	
58	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	340	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	○に合	橘山窯	草木・明 治初期		
59	灰原g	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	280	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	○に合	橘山窯	草木・明 治初期		
60	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	380	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り	
61	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	340	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り	
62	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	-	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青	なし	橘山窯	草木・明 治初期		
63	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	360	148	190	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	見込部	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り	
64	灰原h上層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	-	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青~暗 灰	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り	
65	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	380	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色~ 暗灰	なし	橘山窯	草木・明 治初期		
66	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	340	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期		
67	灰原g上層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	360	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青	○に合	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り	
68	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	-	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青	なし	橘山窯	草木・明 治初期		
69	灰原g上層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	296	109	130	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	見込部	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期	底部に施土日、外面上 下半ヘラケズり	
70	灰原g中層	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	-	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青~暗 灰	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り、抜け込みやすい	
71	表土	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	380	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	青	なし	橘山窯	草木・明 治初期	外面上半までヘラケズ り	
72	表土	縦轍	口縦無筋 縦轍(中幅)	260	-	-	-	-	ロクロ	内外共鉛	内面目	目	-	灰褐色	なし	橘山窯	草木・明 治初期	施土に径1mm程度の石 英等含む	

表 6 陶器観察表(2)

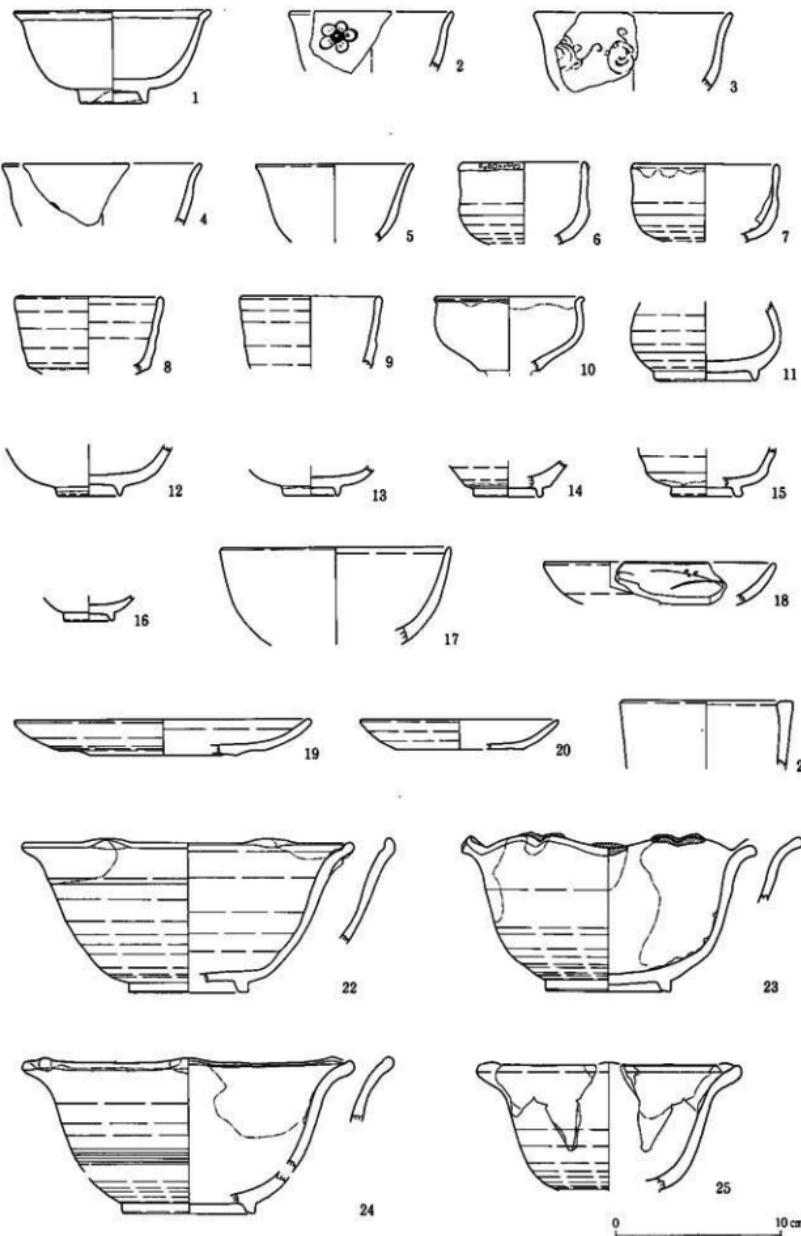
No.	出土地点	器種	形状特徴	法 尺 (mm)				重量 (g)	成形	審 査 技 法			地 色	印 など	製 作	備 考	
				a	b	c	d			地 盆	文 領	鑑定特 徴					
73	土 士	器体	口縁折唇(口縁)	340	-	-	-	-	ロクロ	内外模胎	内面緑色	-	南	なし	松山東	豆文~明治初期	
74	灰原 g 中層	器体	口縁折唇(口縁)	340	-	-	-	-	ロクロ	内外模胎	内面緑色	-	灰島	なし	松山東	豆文~明治初期	
75	灰原 g 上層	器体	口縁折唇(口縁)	340	-	-	-	-	ロクロ	内外模胎	内面緑色	-	南	なし	松山東	豆文~明治初期	
76	灰原 e 中層	器体	口縁外縁三段高台作り(口縁)	320	-	-	-	-	ロクロ	内外模胎	内面緑色	-	外端灰、内島	なし	松山東	豆文~明治初期	
77	灰原 g 中層	器体	口縁外縁三段高台作り(口縁)	-	-	-	-	-	ロクロ	内外模胎	内面緑色	-	南	なし	松山東	豆文~明治初期	
78	灰原 c 中層	器体	口縁外縁三段高台作り(口縁)	-	-	170	-	-	ロクロ	内外模胎	内面緑色	瓦込目	灰原~坂路	なし	松山東	豆文~明治初期	
79	灰原 h 上層	器体	口縁外縁三段高台作り(口縁)	-	-	148	-	-	ロクロ	内外模胎	内面緑色	瓦込目	灰島	なし	松山東	豆文~明治初期	
80	土 士	器体	-	-	-	-	-	-	ロクロ	内外模胎	内面緑色	-	南	外端に缺口	松山東	豆文~明治初期	
81	灰原 g 中層	器体	-	-	140	-	-	-	ロクロ	内外模胎	内面緑色	瓦込目	灰原~坂路	なし	松山東	豆文~明治初期	
82	灰原 g 上層	器体	-	-	160	-	-	-	ロクロ	内外模胎	内面緑色	瓦込目	灰原~坂路	なし	松山東	豆文~明治初期	
83	灰原 g 上層	器体	-	-	160	-	-	-	ロクロ	内外模胎	内面緑色	瓦込目	灰原	なし	松山東	豆文~明治初期	
84	灰原 g 上層	器體	-	160	61	66	-	-	ロクロ	内外模胎	内面緑色	瓦込目	灰原	なし	松山東	豆文~明治初期	
85	灰原 f 上層	器体	有三足支脚	160	62	120	-	-	ロクロ	内面上部~外端模胎	-	-	南	なし	坂路	豆文~明治初期	
86	灰原 c 上層	器体?	-	100	-	-	105	-	ロクロ	内面上部~外端模胎	-	-	坂路	なし	松山東	豆文~明治初期	
87	灰原 e 中層	鉢類	-	180	-	-	-	-	ロクロ	内外面下部平灰島(オリーブ色)	-	-	赤錆	なし	松山東	豆文~明治初期	
88	灰原 e 中層	中盤	仰形	90	197	90	190	-	ロクロ	内上面下部外端模胎	背面に底状に灰路(オリーブ色)	なし	なし	灰原~南	なし	松山東	豆文~明治初期
89	灰原 f 上層	中盤	仰形	104	-	-	180	-	ロクロ	内上面下部外端模胎	背面に底状に灰路(オリーブ色)	なし	なし	灰島	なし	松山東	豆文~明治初期
90	灰原 g 上層	中盤	新丸形	103	-	-	220	-	ロクロ	内上面下部外端模胎	背面に底状に灰路(オリーブ色)	なし	なし	坂路	なし	松山東	豆文~明治初期
91	灰原 f 上層	中盤	仰形	-	-	90	166	-	ロクロ	外・直面模胎	-	なし	灰錆	なし	松山東	豆文~明治初期	
92	灰原 a 中層	中盤	新丸形高台	200	-	-	209	-	ロクロ	模胎地、内外面模胎	(オリーブ色)	なし	なし	坂路	なし	松山東	豆文~明治初期
93	灰原 e 中層	中盤	新丸形高台	195	-	-	206	-	ロクロ	模胎地、内外面模胎	(オリーブ色)	なし	なし	坂路	なし	松山東	豆文~明治初期
94	土 士	中盤	新丸形高台	180	-	-	-	-	ロクロ	内外模胎	-	なし	灰白	なし	松山東	豆文~明治初期	
95	土 士	中盤	新丸形高台	240	-	-	-	-	ロクロ	内外模胎	-	なし	灰白	なし	松山東	豆文~明治初期	
96	A NOB高	中盤	半圓形	200	-	-	-	-	ロクロ	内外模胎	-	なし	赤錆	なし	松山東	豆文~明治初期	
97	灰原 g 中層	中盤	半圓形	192	-	-	-	-	ロクロ	模胎地、内外模胎(オリーブ色)	なし	口縁部に縫合に隙間	暗路	なし	松山東	豆文~明治初期	
98	灰原 f 上層	中盤	新丸形高台	130	169	124	186	-	ロクロ	模胎地、斜面削溝し	-	なし	坂路~南	なし	松山東	豆文~明治初期	
99	灰原 c 上層	中盤	新丸形高台	100	-	-	166	-	ロクロ	模胎地	-	なし	暗路	なし	松山東	豆文~明治初期	
100	灰原 g 上層	中盤?	新丸形高台?	100	-	-	164	-	ロクロ	模胎地、内上面と内側に灰路(オリーブ色)	-	なし	坂路	なし	松山東	豆文~明治初期	
101	灰原 f 中層	中盤?	新丸形高台?	110	-	-	176	-	ロクロ	模胎地、内面縁一对外面模胎(オリーブ色)	-	なし	坂路~坂路	なし	松山東	豆文~明治初期	
102	灰原 e 上層	中盤	氣泡?	-	-	96	164	-	ロクロ	模胎地、内外面模胎(オリーブ色)	-	なし	坂路	なし	松山東	豆文~明治初期	
103	灰原 f 中層	中盤	氣泡?	-	-	78	-	-	ロクロ	模胎地、内外面模胎(オリーブ色)	-	-	暗路	なし	松山東	豆文~明治初期	
104	土 士	中盤	氣泡?	-	-	96	-	-	ロクロ	模胎地、内外面模胎(オリーブ色)	-	なし	四錆	なし	松山東	豆文~明治初期	
105	灰原 g 中層	中盤	新丸形高台	-	-	120	175	-	ロクロ	模胎地、内外面模胎(オリーブ色)	-	なし	坂路~灰島	なし	松山東	豆文~明治初期	
106	灰原 g 中層	中盤	新丸形高台	-	-	121	-	-	ロクロ	模胎地、内外面模胎(オリーブ色)	-	-	暗路~灰島	なし	松山東	豆文~明治初期	

表 7 陶器観察表 (3)

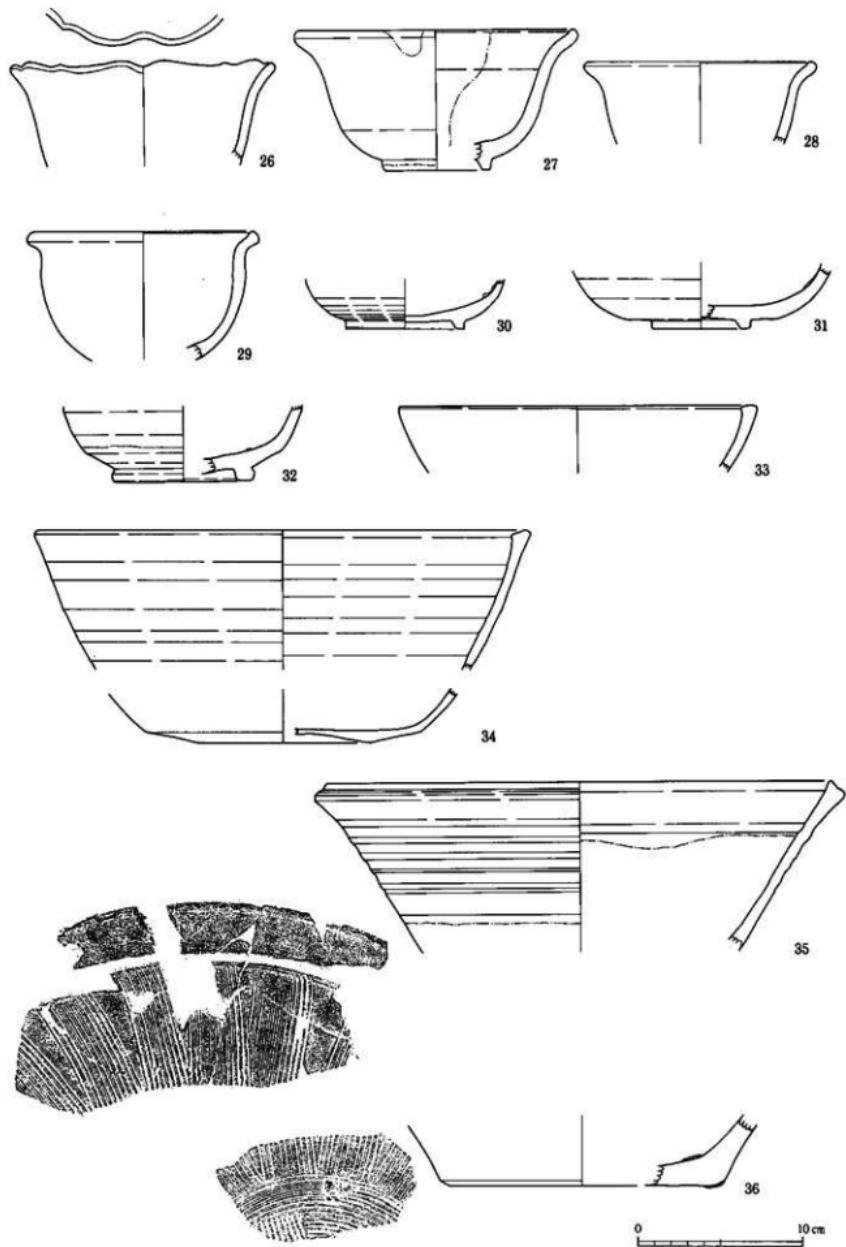
No.	検出地点	器種	分類 形状特徴	法 直 (mm)				重量 (g)	成形	儀 準 技 法			施土色	印・模 など	製 作		備考
				a	b	c	d			陶器	木模	旋轉特 徴			製作地	製作年代	
107	表土	中壺	圓丸形輪 高台	-	-	92	-	-	ロクロ	内外模輪	なし	なし	灰白	なし	あらいは 他處地か	内面に施土日	
108	表土	大壺	圓丸形輪 高台	300	-	-	-	-	ロクロ	内外模輪	表面に凹 凸	なし	灰白	なし	あらいは 他處地か	109と同一個体	
109	表土	大甕	圓丸形輪 高台	-	-	160	-	-	ロクロ	内外模輪	なし	なし	灰白	なし	あらいは 他處地か	108と同一個体	
110	灰原e 中層 地	中壺		-	-	104	-	-	ロクロ	内外模輪	植物地、外延灰斑（オ リーブ色）	なし	なし	褐	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	
111	灰原e 上層 地	中壺		-	-	108	-	-	ロクロ	内外模輪	植物地、外延灰斑（オ リーブ色）	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	底部に信子子チ
112	灰原h 中層 地	中壺		-	-	98	-	-	ロクロ	内外模輪	植物地、外延灰斑（オ リーブ色）	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	
113	灰原g 中層 地	中壺		-	-	105	-	-	ロクロ	内外模輪	植物地、外延灰斑（オ リーブ色）	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	
114	灰原g 中層 地	仏花?	盤口形	300	-	-	-	-	ロクロ	内外模輪	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期		
115	表土	急崩		77	-	-	-	-	ロクロ	内面口縁を鋸歯状	なし	なし	灰黒	なし	藤山窯 幕末～明 治初期		
116	灰原工中層 地	急崩		64	-	-	-	-	ロクロ	内外模輪	なし	なし	灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期		
117	A N08灰上 層	土壺		134	-	-	-	-	ロクロ	内外模輪	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	外腹上半までヘラケズ り	
118	灰原f 上層 地	土壺	丸形	-	-	74	166	-	ロクロ	内外模輪	陶地地、施墨から見 て外腹上部に灰斑（オ リーブ色）	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	
119	灰原a 中層 地	土壺		-	-	80	-	-	ロクロ	内外模輪	内面縁	-	灰黒	目に織 の文	藤山窯 幕末～明 治初期	後き投用	
120	表土	土瓶	丸形三足?	300	-	-	-	-	ロクロ	内外模輪	なし	なし	灰黒	なし	藤山窯 幕末～明 治初期		
121	灰原f 上層 地	土瓶	丸形三足? 板状底	250	-	-	-	-	ロクロ	内外模輪	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	外腹下半までヘラケズ り	
122	表土	土瓶	丸形三足?	-	-	100	-	-	ロクロ	内外模輪	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	外腹側面下半まで施墨	
123	表土	樂器	なんころ 形、皿形	60	11	24	-	-	ロクロ	右回転	内外模輪	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	底
124	灰原h 中層 地	樂器	なんころ 形、皿形	64	12	26	-	-	ロクロ	右回転	内外模輪	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	
125	鳥	樂器	なんころ 形、皿形	66	13	30	-	-	ロクロ	-	なし	なし	褐	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	施墨とき段階、条切記 孔あり	
126	灰原e 中層 地	灯籠形	灯籠形、 筒形、乳頭	74	-	-	-	-	ロクロ	内外模輪	なし	なし	灰白	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	小形品	
127	灰原e 中層 地	灯籠形	灯籠形、 筒形、乳頭 立	105	18	62	-	-	ロクロ	内外模輪	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期		
128	表土	灯籠形	灯籠形、 筒形	100	18	64	-	-	ロクロ	内外模輪	なし	なし	褐	なし	藤山窯 幕末～明 治初期		
129	A K05高 度?	灯籠形	灯籠形、 筒形	-	-	90	-	-	ロクロ	右回転	内外白化した輪	なし	なし	褐	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	
130	灰原f 中層 地	土器	土器型	-	-	17	-	-	ロクロ	-	なし	なし	褐	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	施墨とき段階	
131	灰原h 中層 地	土器	土器型	92	-	-	72	-	ロクロ	-	縦文	なし	なし	褐	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	
132	灰原e 中層 地	土器	土器型	80	-	-	62	-	ロクロ	上面灰斑（オリーブ色）	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期		
133	灰原h 中層 地	土器	輪形?	72	13	22	30	-	ロクロ	上面灰斑（オリーブ色）	なし	なし	褐	なし	藤山窯 幕末～明 治初期		
134	灰原e 中層 地	土器		76	11	-	50	-	ロクロ	上面模輪	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期		
135	表土	土器	輪形?	120	-	-	96	-	ロクロ	上面模輪	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期		
136	A L04高 度?	土器		-	-	94	-	-	ロクロ	-	なし	なし	暗灰	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	施墨とき段階	
137	灰原e 中層 地	瓶引		148	-	-	-	-	ロクロ	内外灰斑（オリーブ色）	なし	なし	暗灰～ 灰黒	なし	藤山窯 幕末～明 治初期		
138	表土	瓶引		-	-	130	-	-	ロクロ	内面灰斑（オリーブ色）	なし	なし	褐	なし	藤山窯 幕末～明 治初期	中壺。133と同一個体。 蓋面に2箇以上の穿孔 あり	
139	A K04高 度?	不明		-	-	90	-	-	ロクロ	陶地地、外延灰斑（オ リーブ色）	なし	なし	暗灰	あり	藤山窯 幕末～明 治初期	Oに「不てい」	

表8 陶器観察表(4)

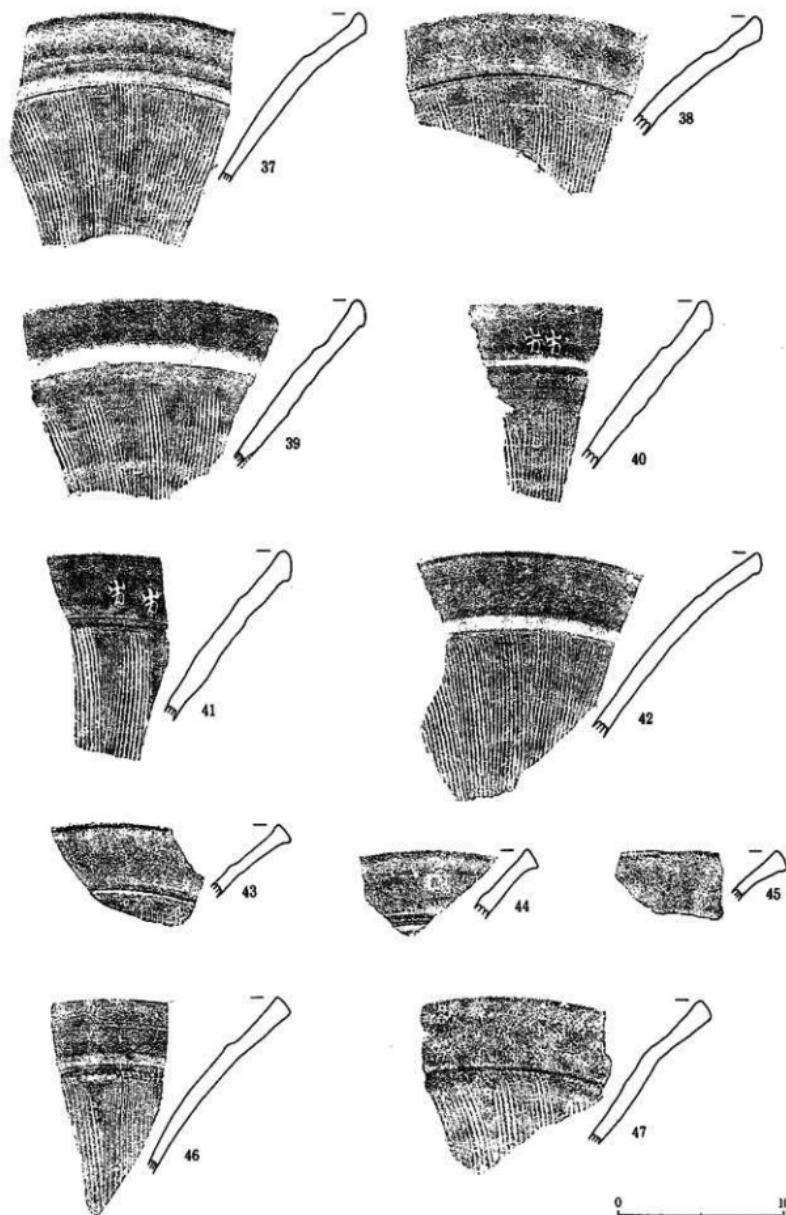




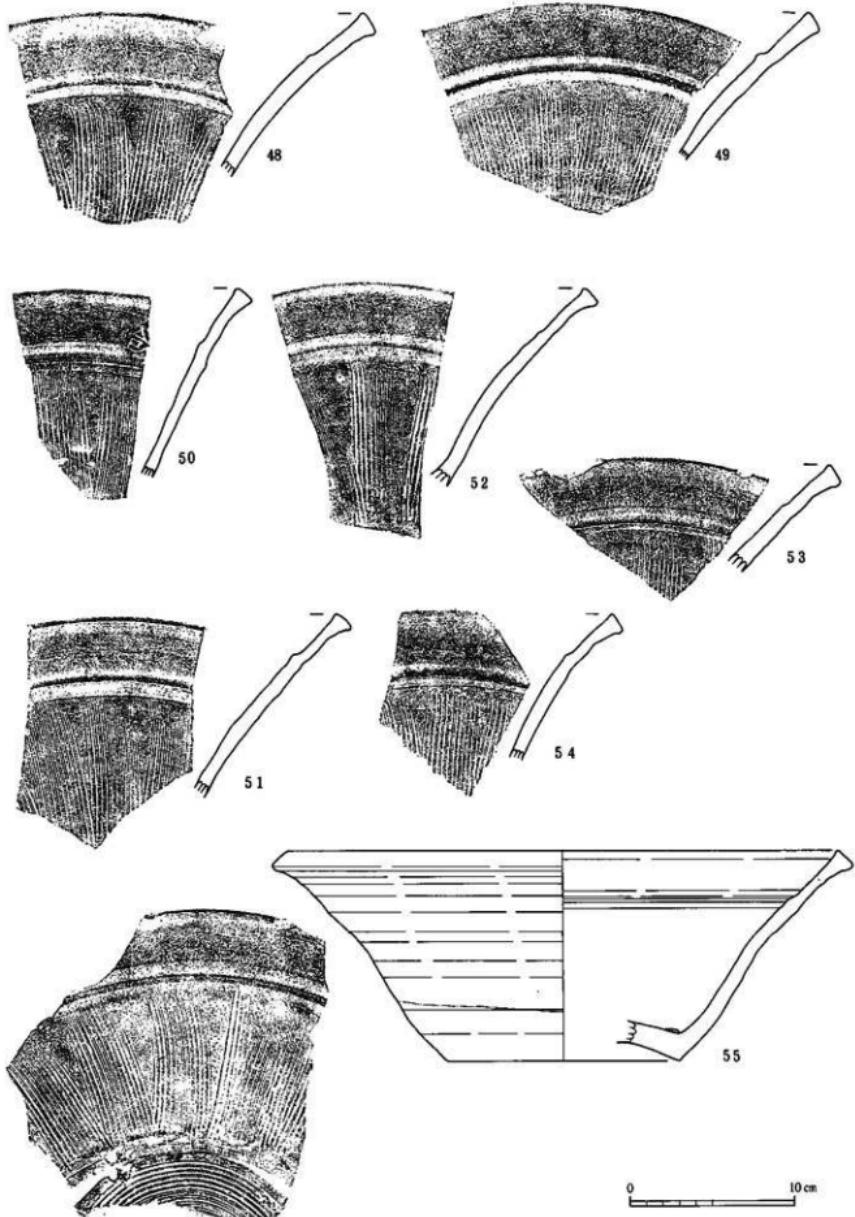
第1図 橋山墓跡 出土遺物（1）



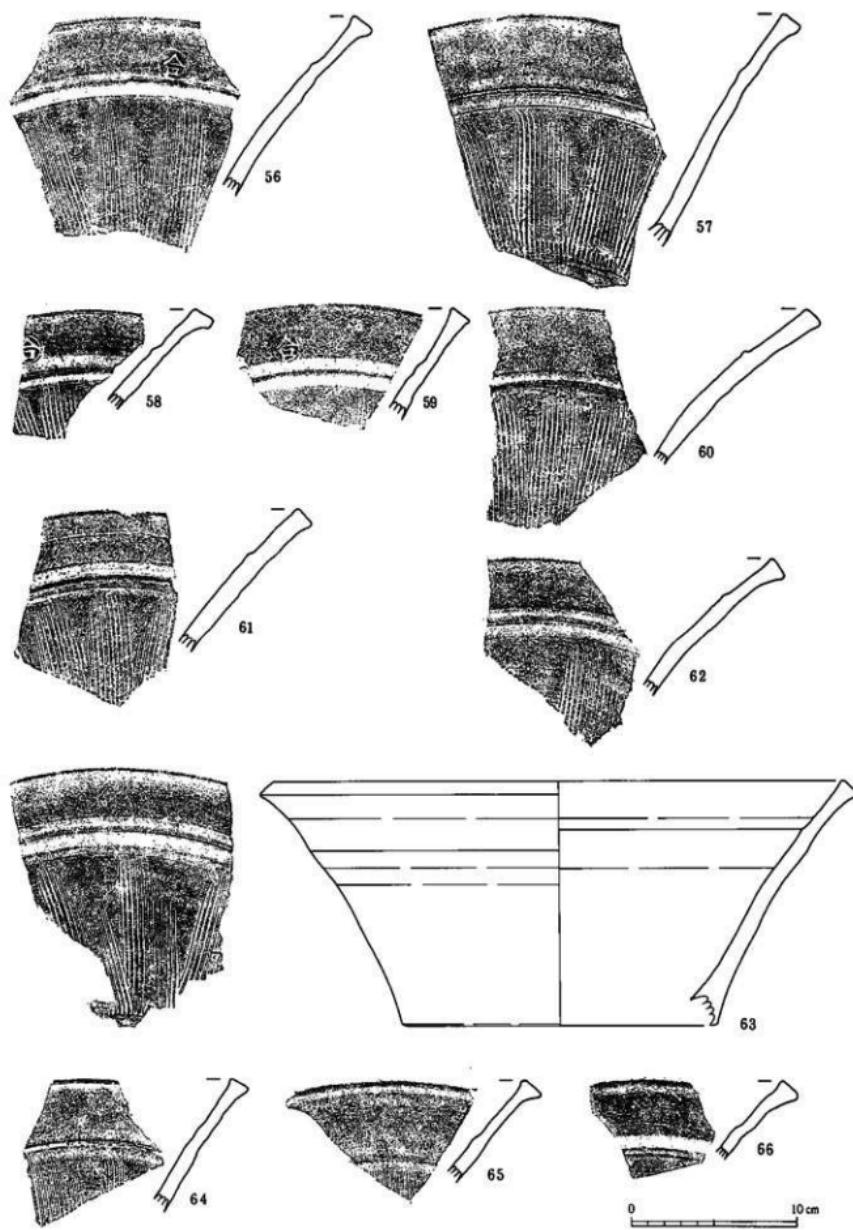
第2図 橋山窯跡 出土遺物（2）



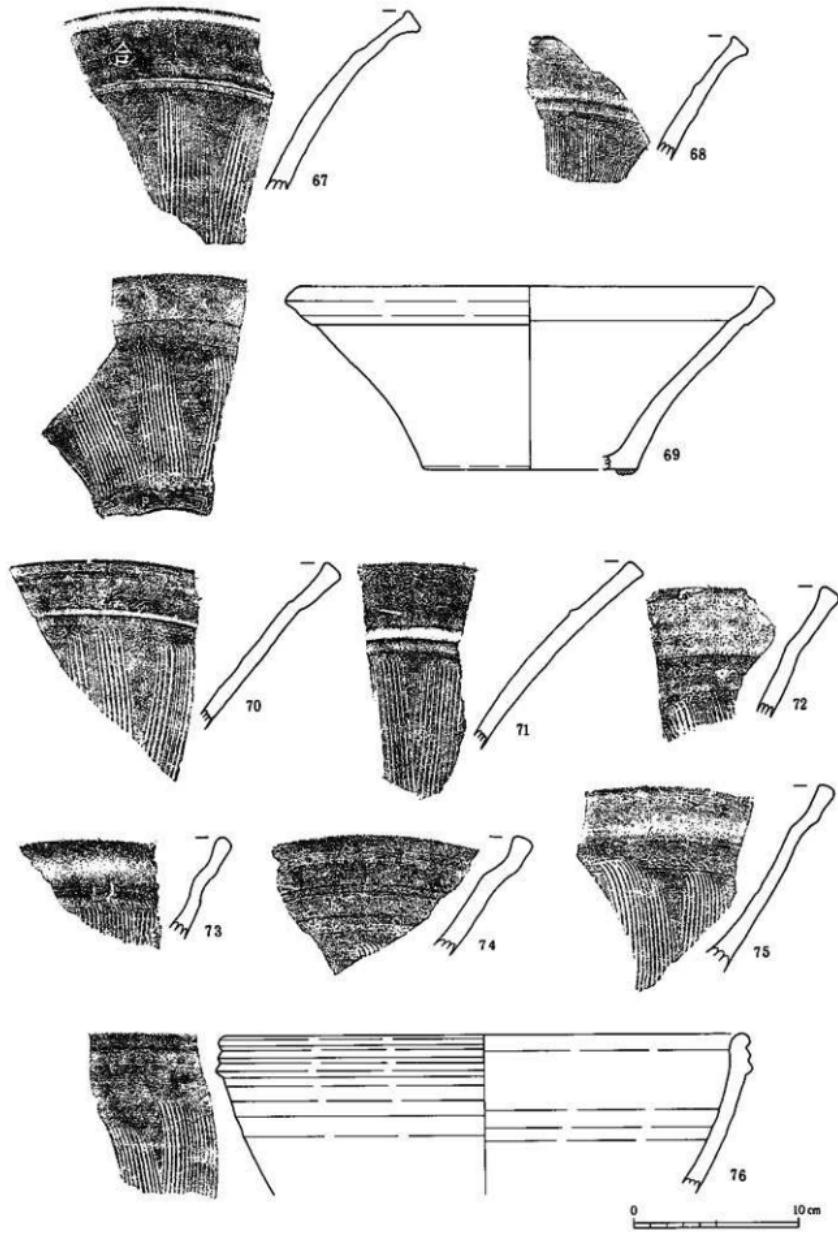
第3図 橋山墓跡 出土遺物（3）



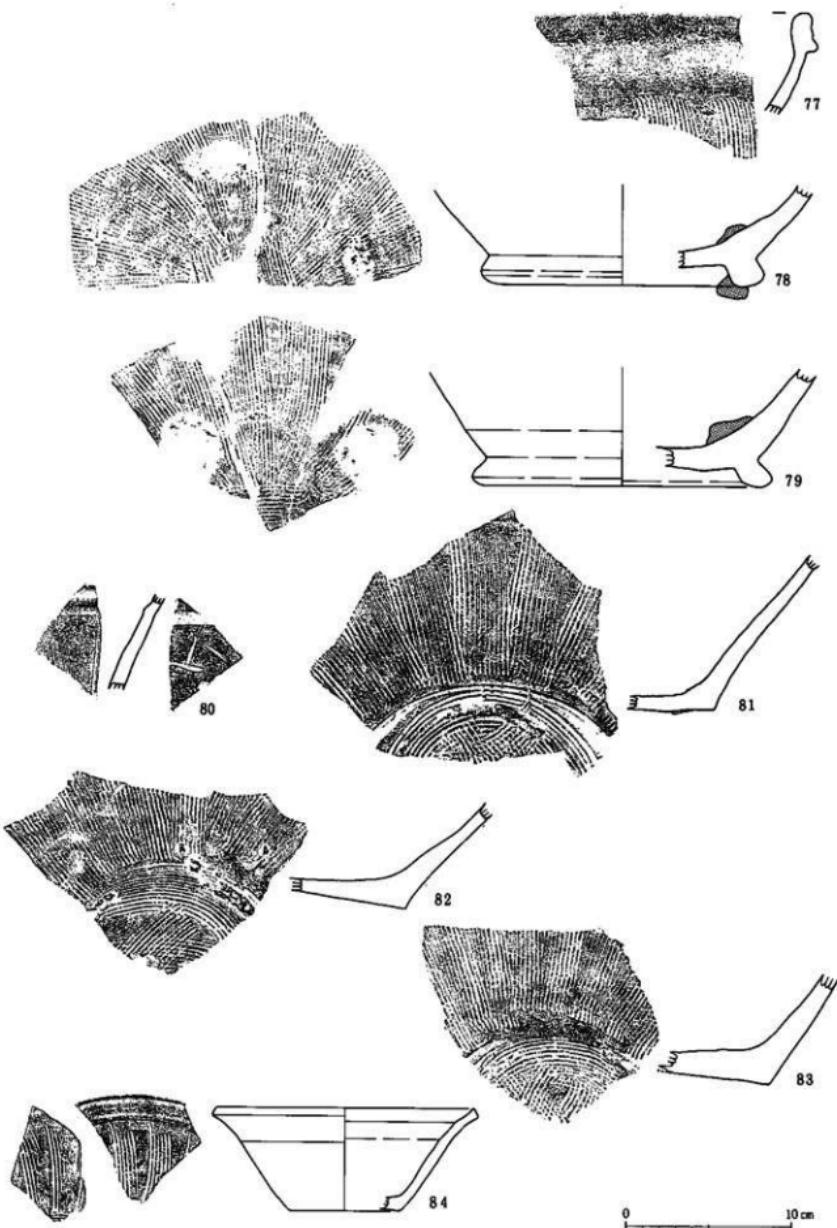
第4図 橋山墓跡 出土遺物（4）



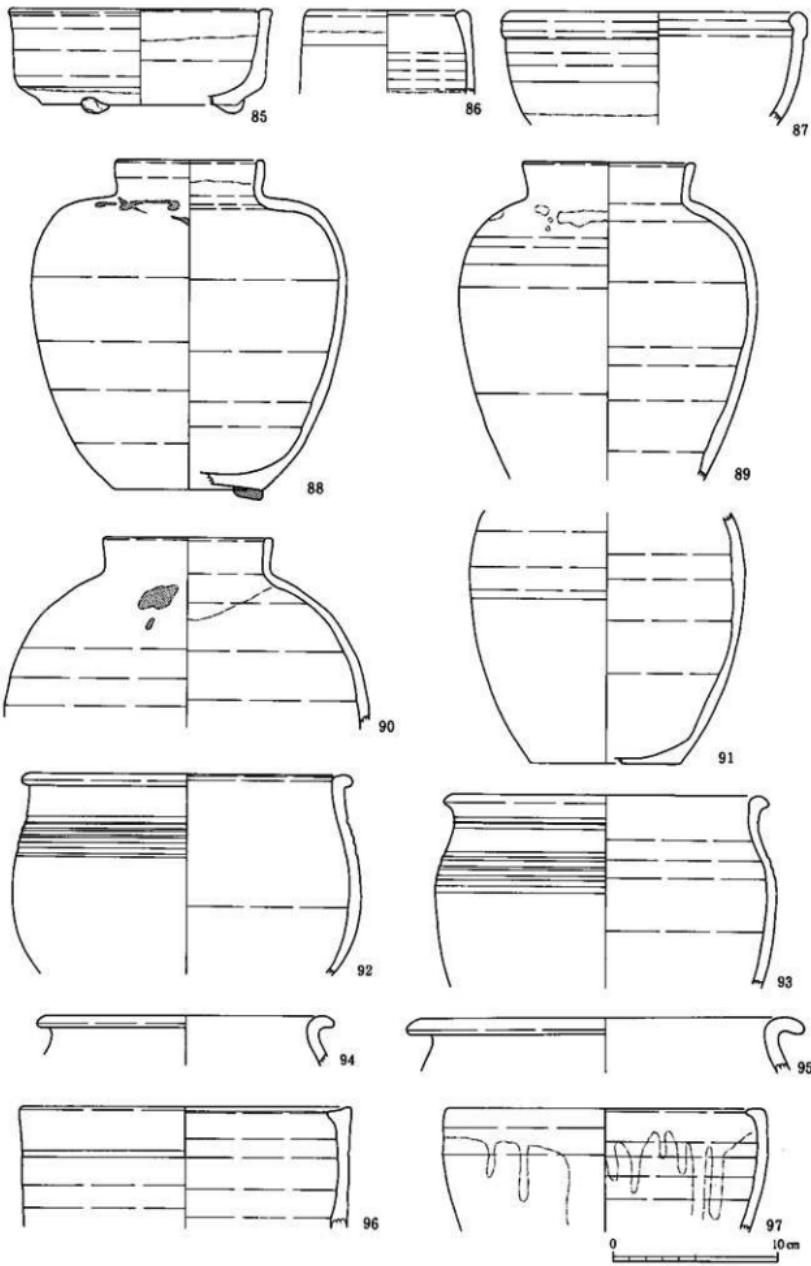
第5圖 橋山窯跡 出土遺物（5）



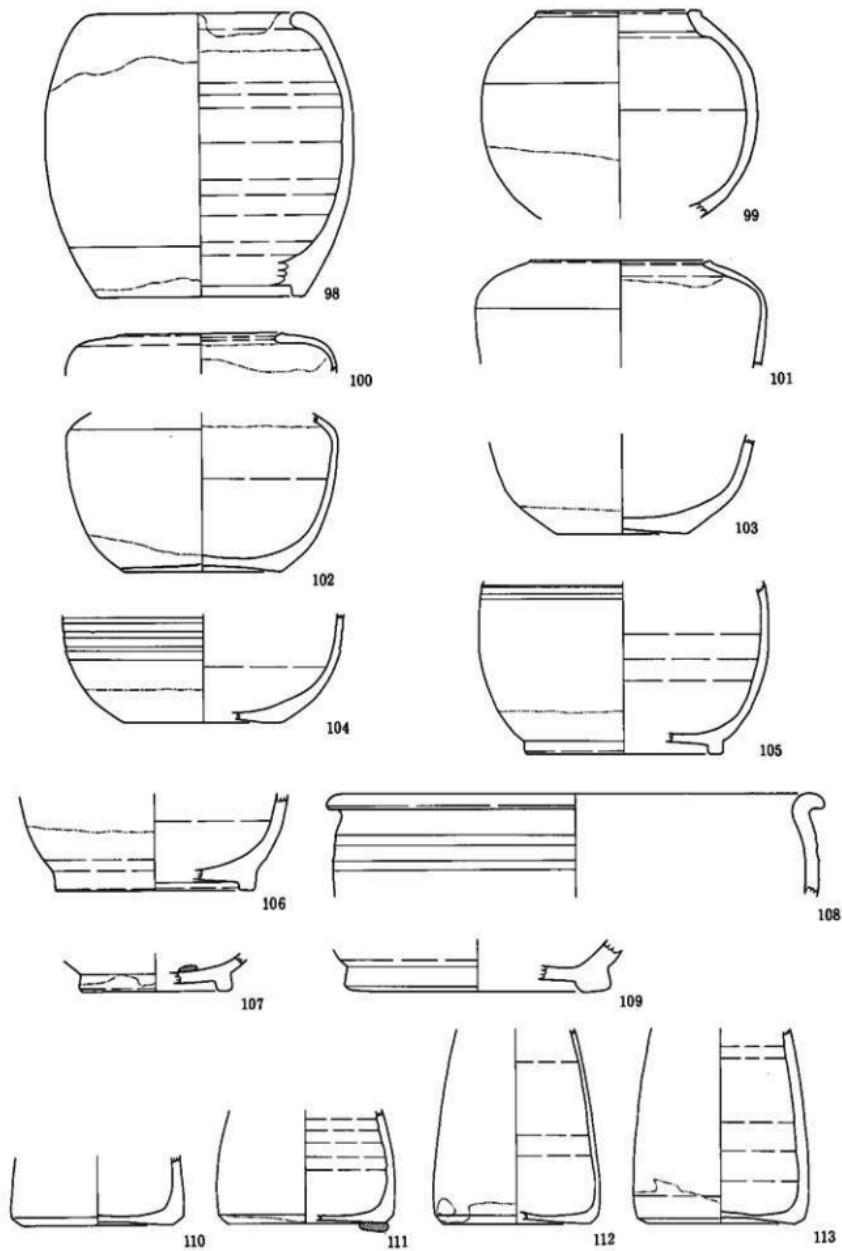
第6図 楊山窯跡 出土遺物（6）



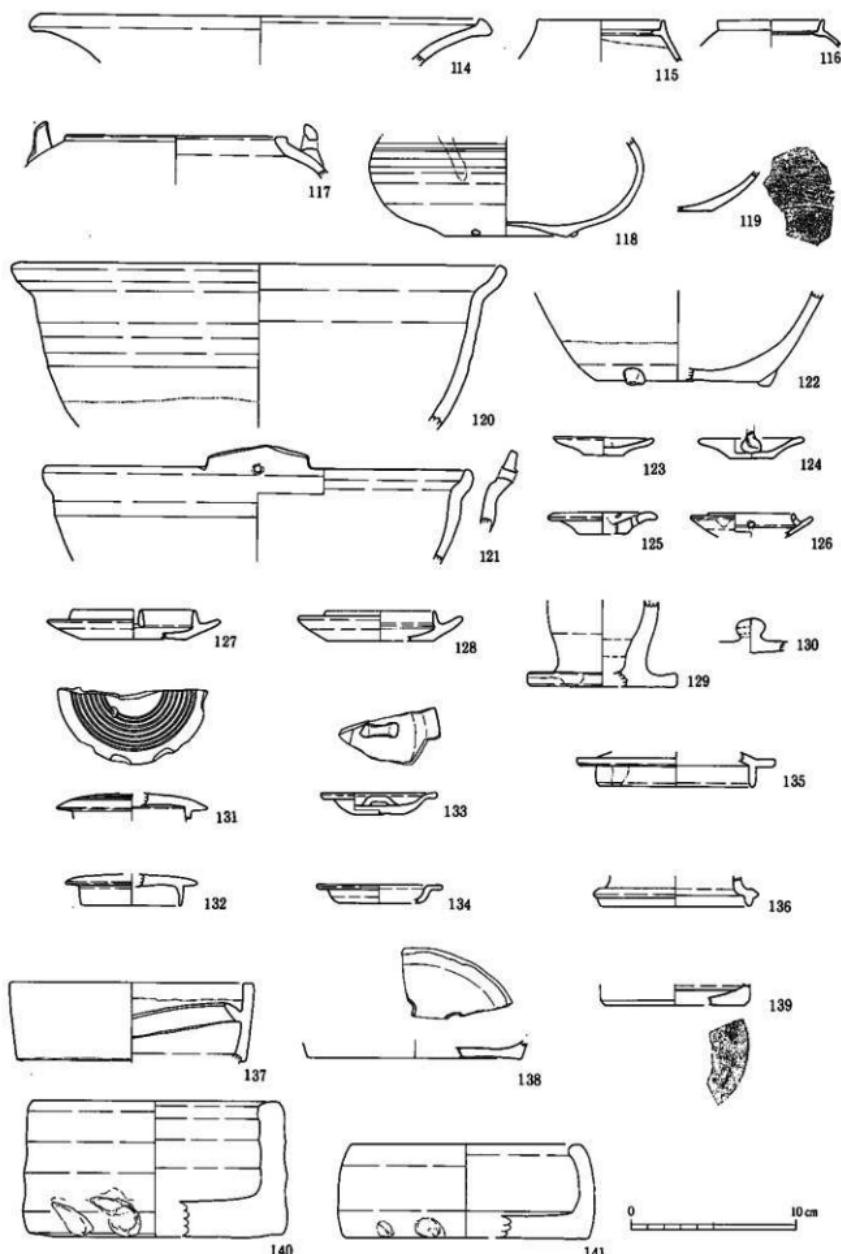
第7図 楊山窯跡 出土遺物(7)



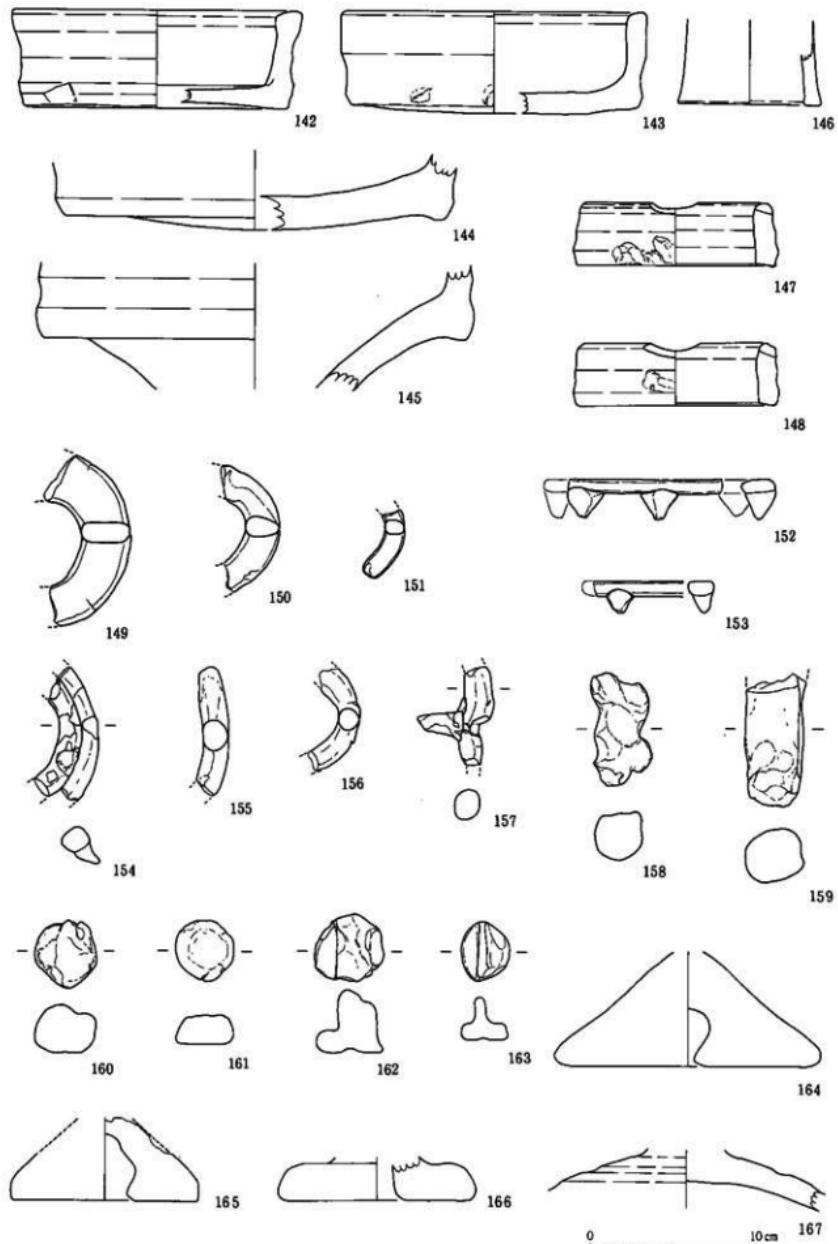
第8図 橋山窯跡 出土遺物 (8)



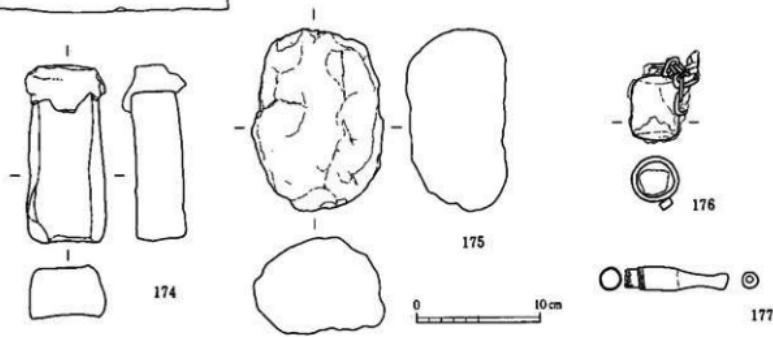
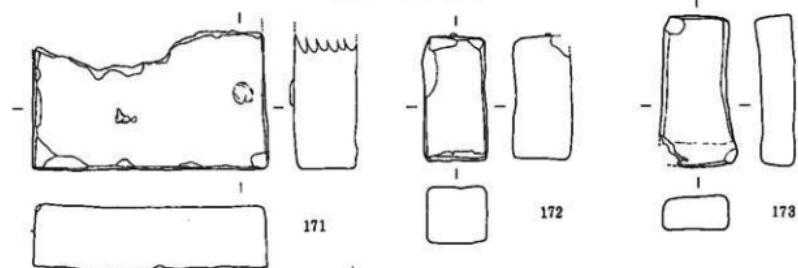
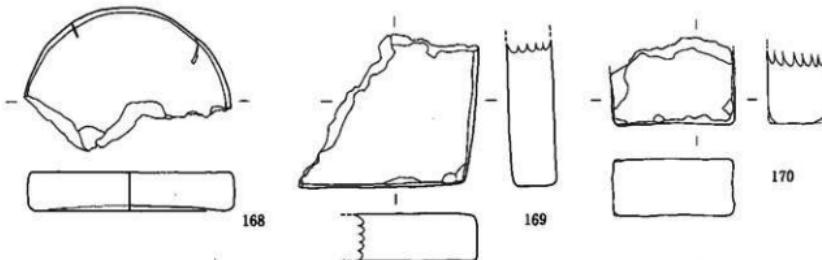
第9図 橋山蒸跡 出土遺物 (9)



第10図 橋山窯跡 出土遺物 (10)



第11図 橋山蒸跡 出土遺物 (11)



第12図 橋山窯跡 出土遺物 (12)

写 真 図 版

図版 1



調査前風景



灰原 検出状況



灰原 断面



灰原 断面

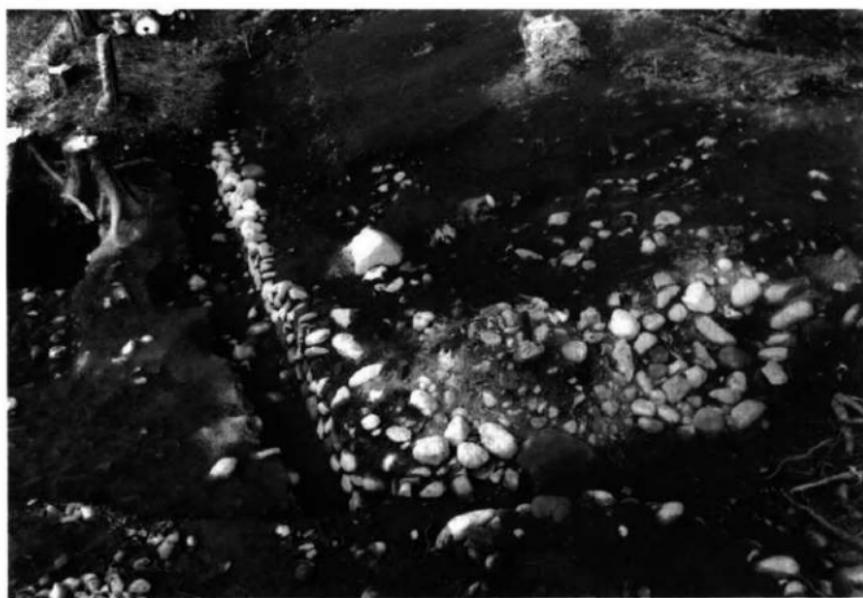


灰原 断面



調査区全景（南東より）

図版 3



調査区全景（北東より）



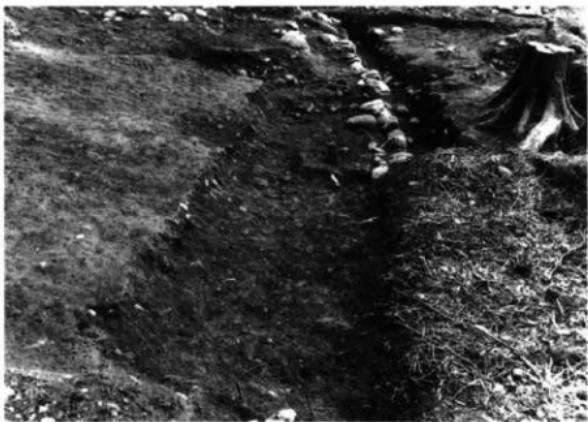
S B 01・02



S B 03

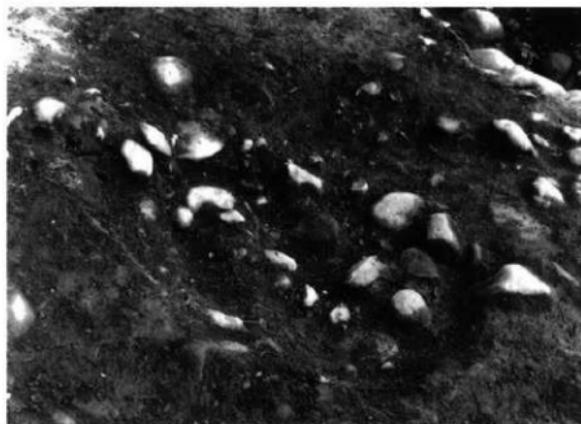


S I 01・S D 01

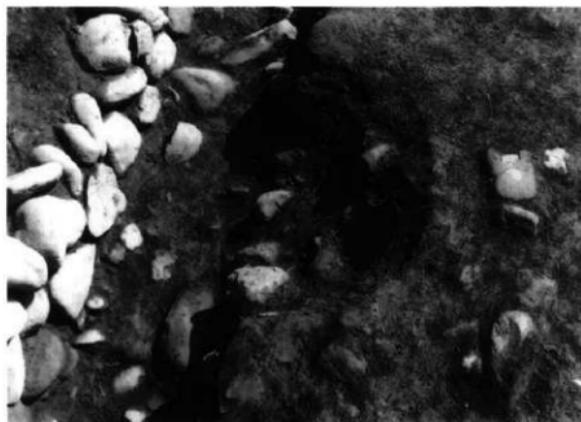


S X 01

図版 5



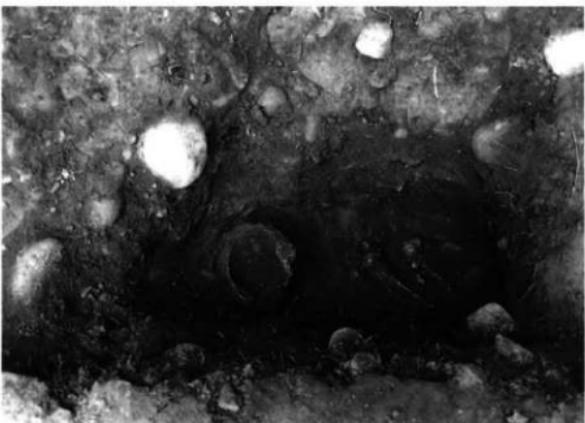
SK01



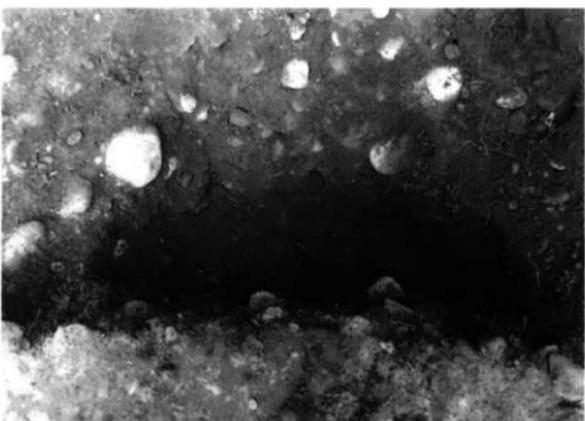
SK02



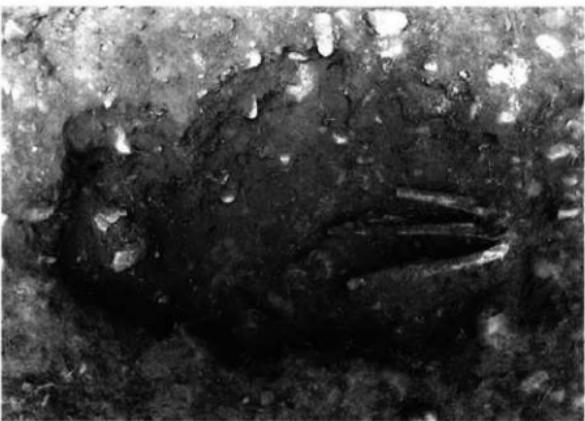
東側 SK群



SK06 埋葬状況

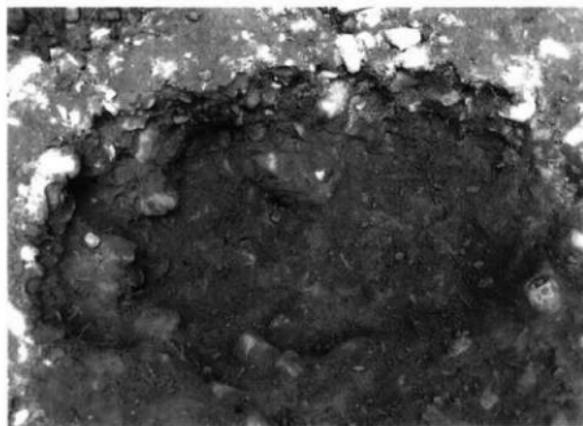


SK06



SK08 埋葬状況

図版 7



S K 08



S I 02・04



発掘作業風景



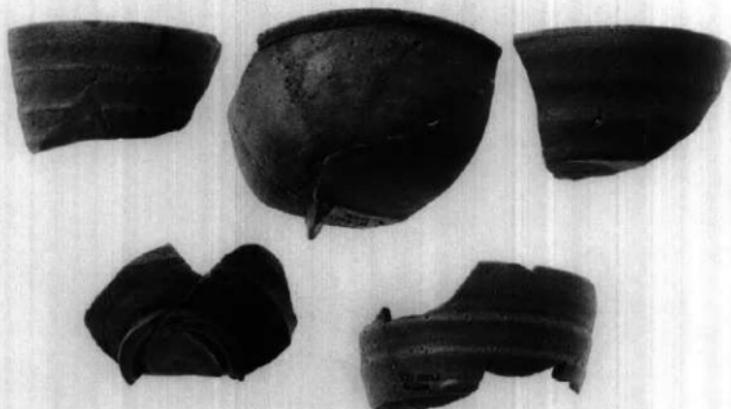
発掘作業風景



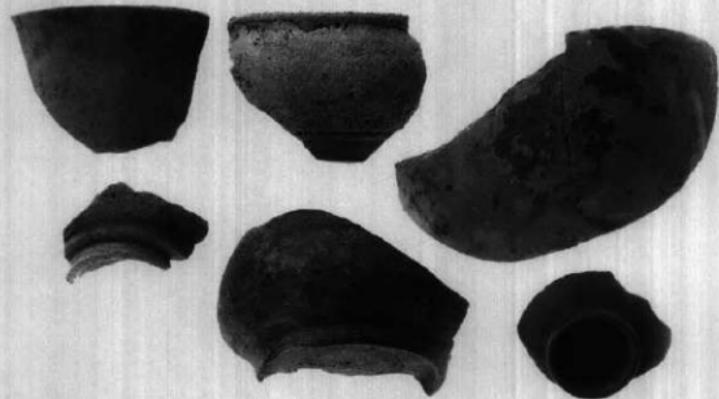
現地見学会風景



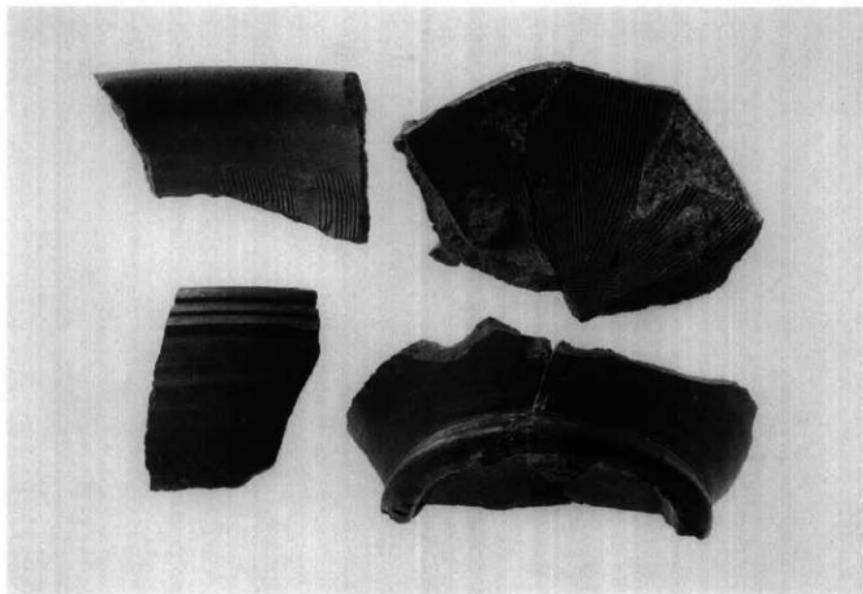
北西側墓地  
(推定工房跡)



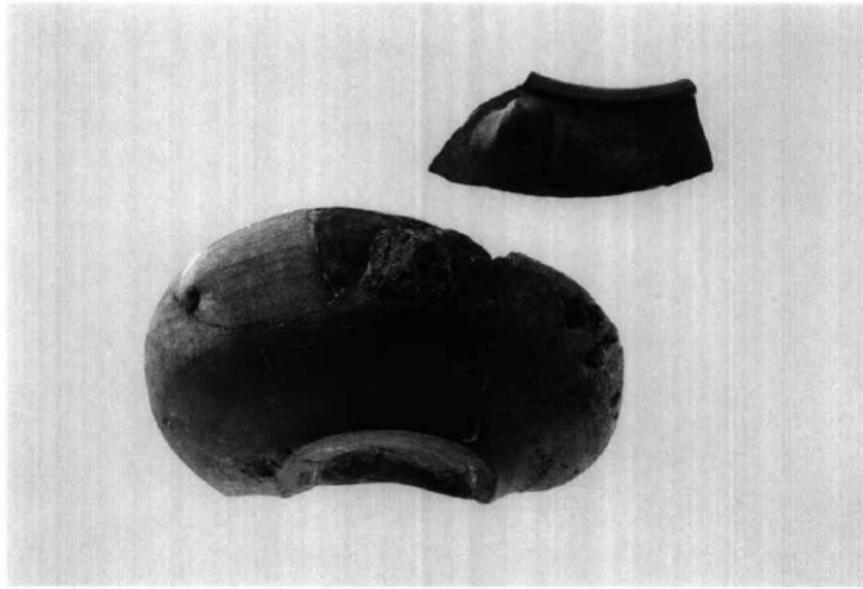
小碗



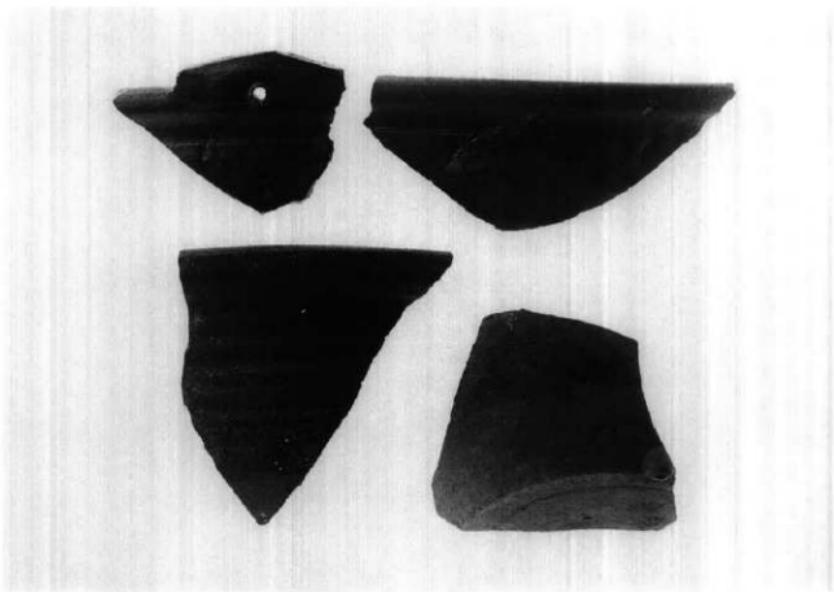
小碗他



擂鉢（口縁外帶三段高台作り）



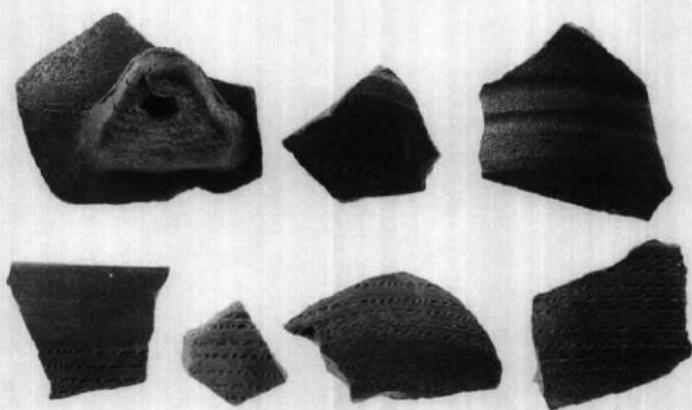
土瓶



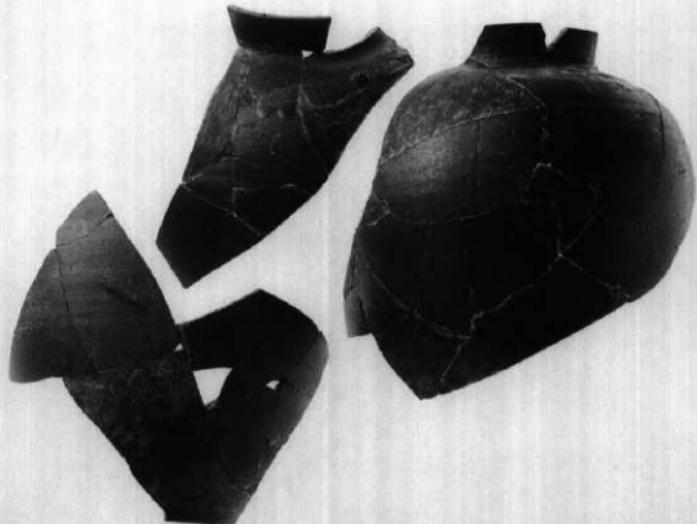
土鍋



灯明具類



鋸手



中壺



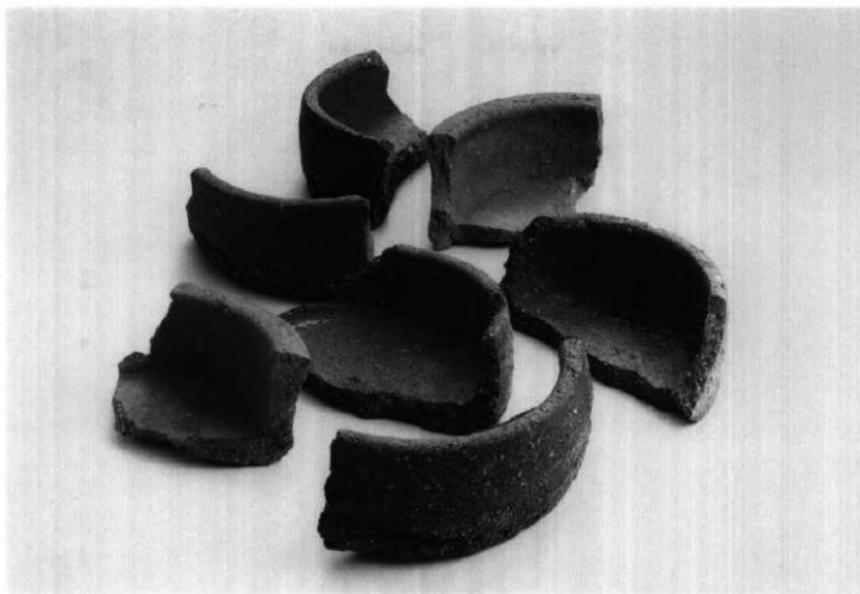
中臺



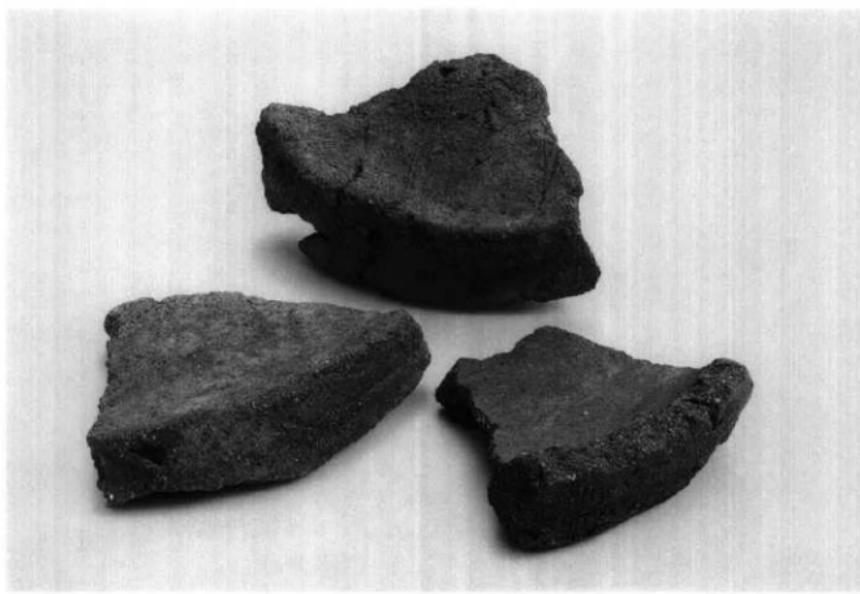
蓋類



匣鉢 a 種



匣鉢 b 種



匣鉢 c 種



匣鉢 d 種



輪ドチ a 種



輪ドチ b種



足付き輪ドチ



紐トチ



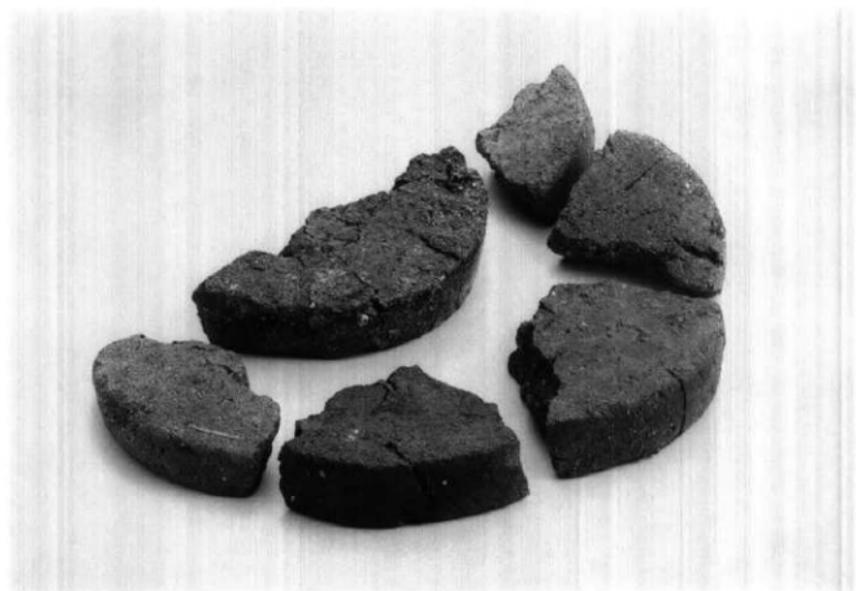
握リトチ



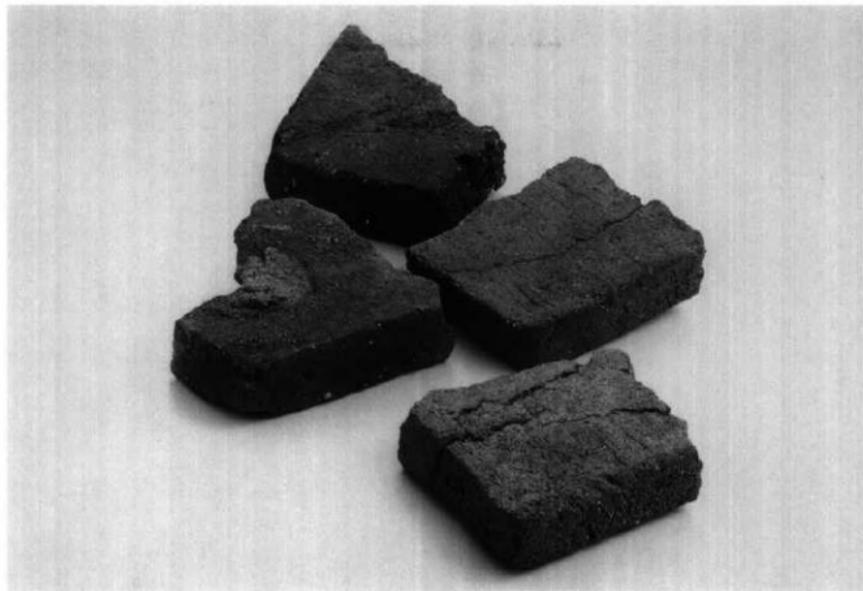
団子トチ



S K 08出土遺物



櫛板 a 種



棚板 b 種



棚板 c・d 種



窯結道具 その他



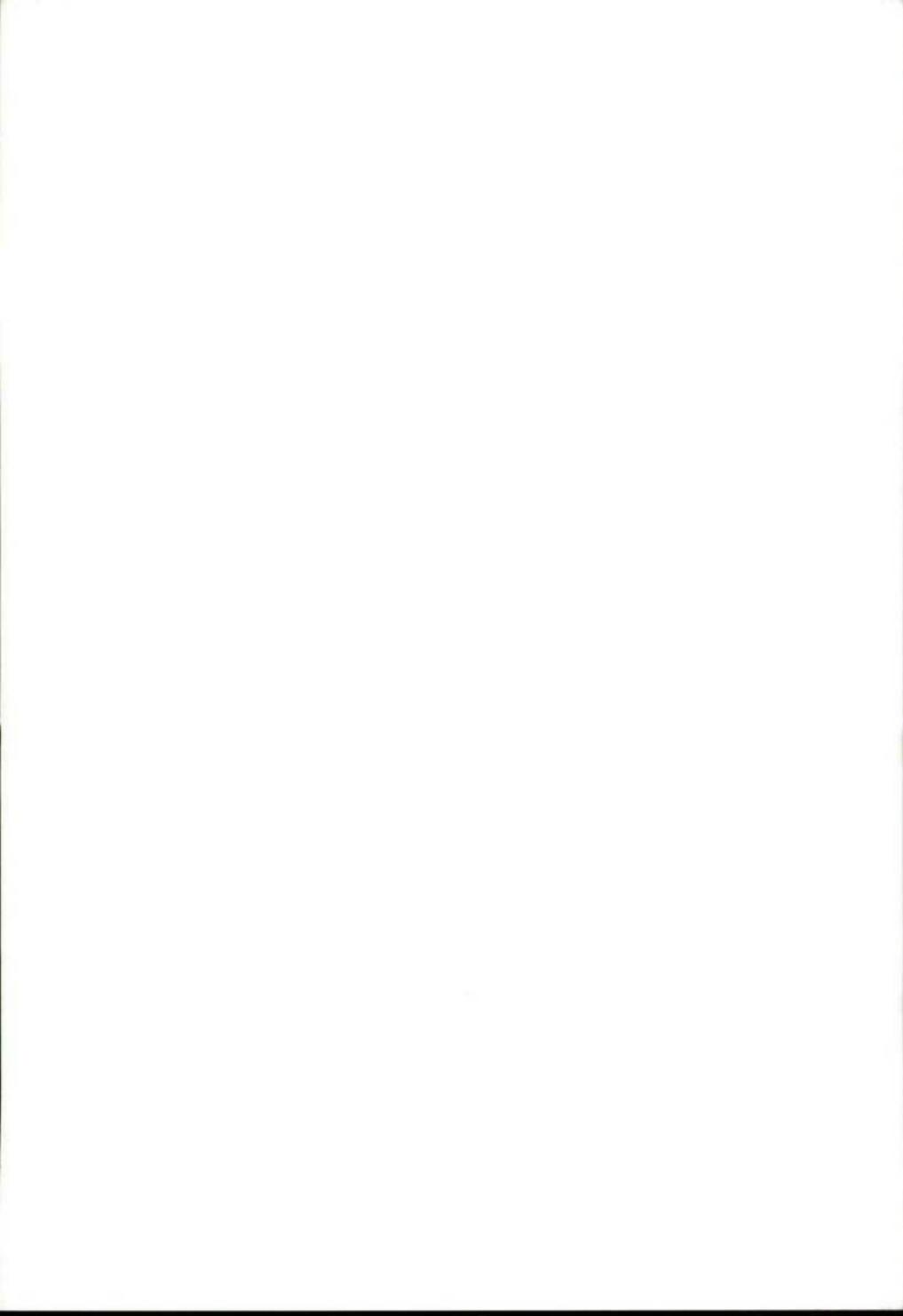
握りクレ



素焼き段階の絵付



鉄絵もの

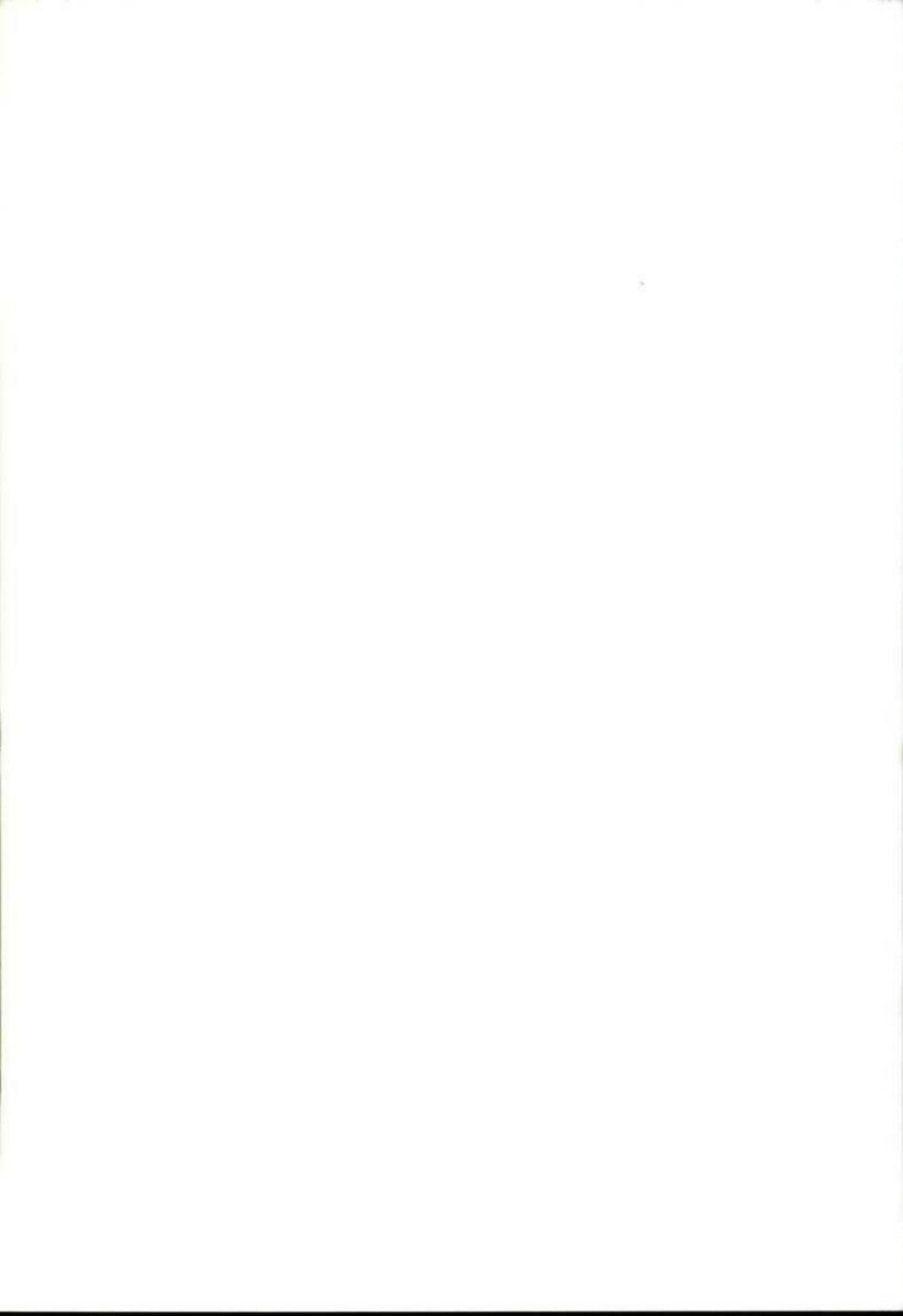


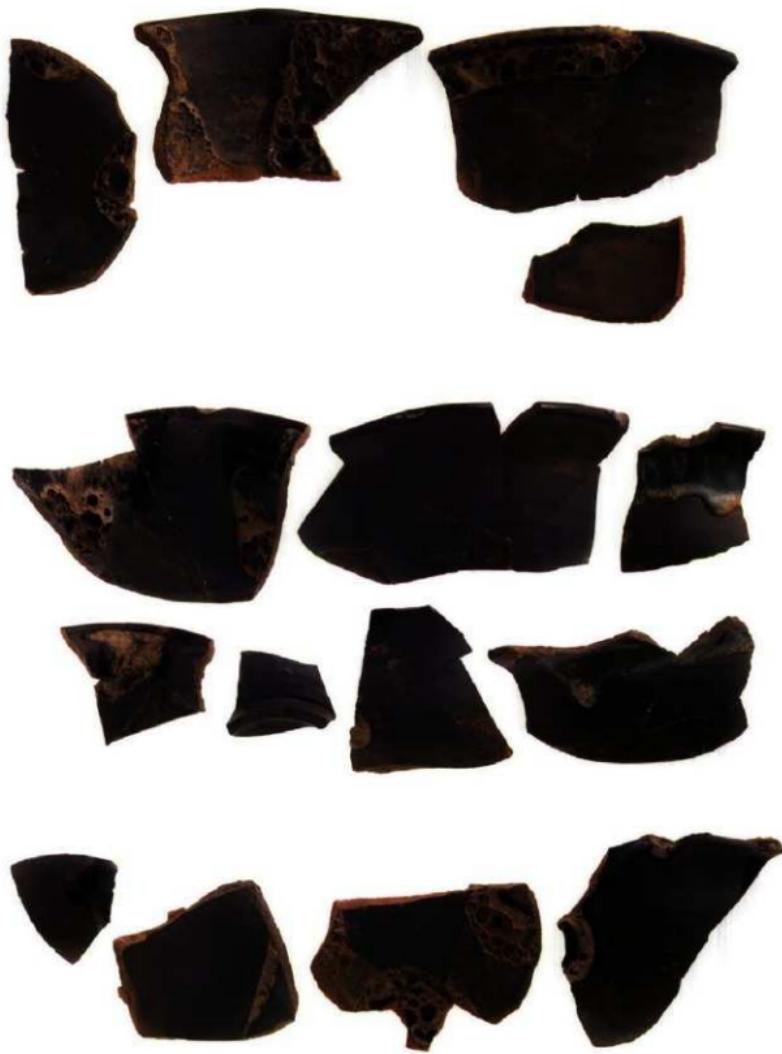


小碗

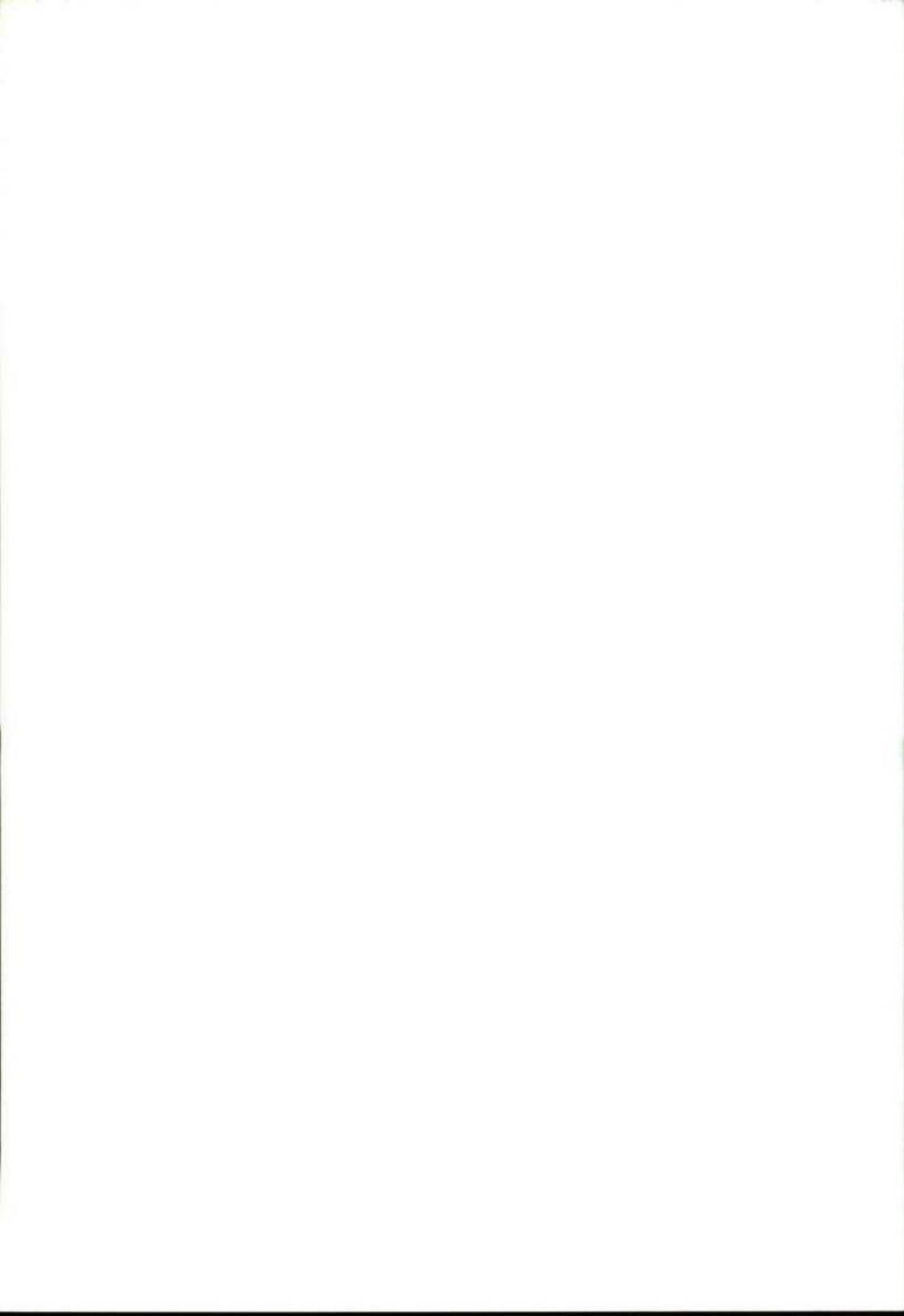


中鉢





中鉢

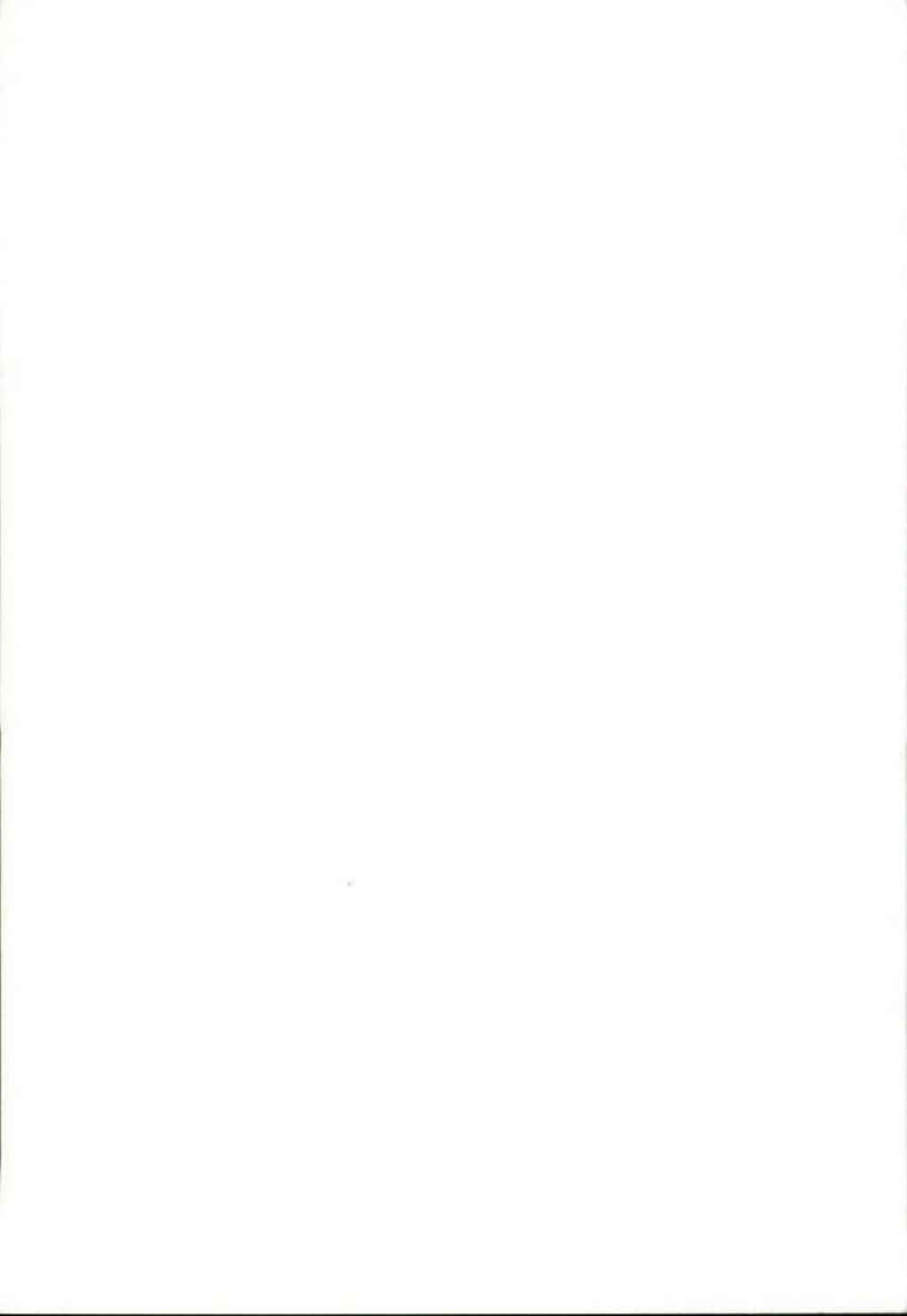




中鉢



大鉢

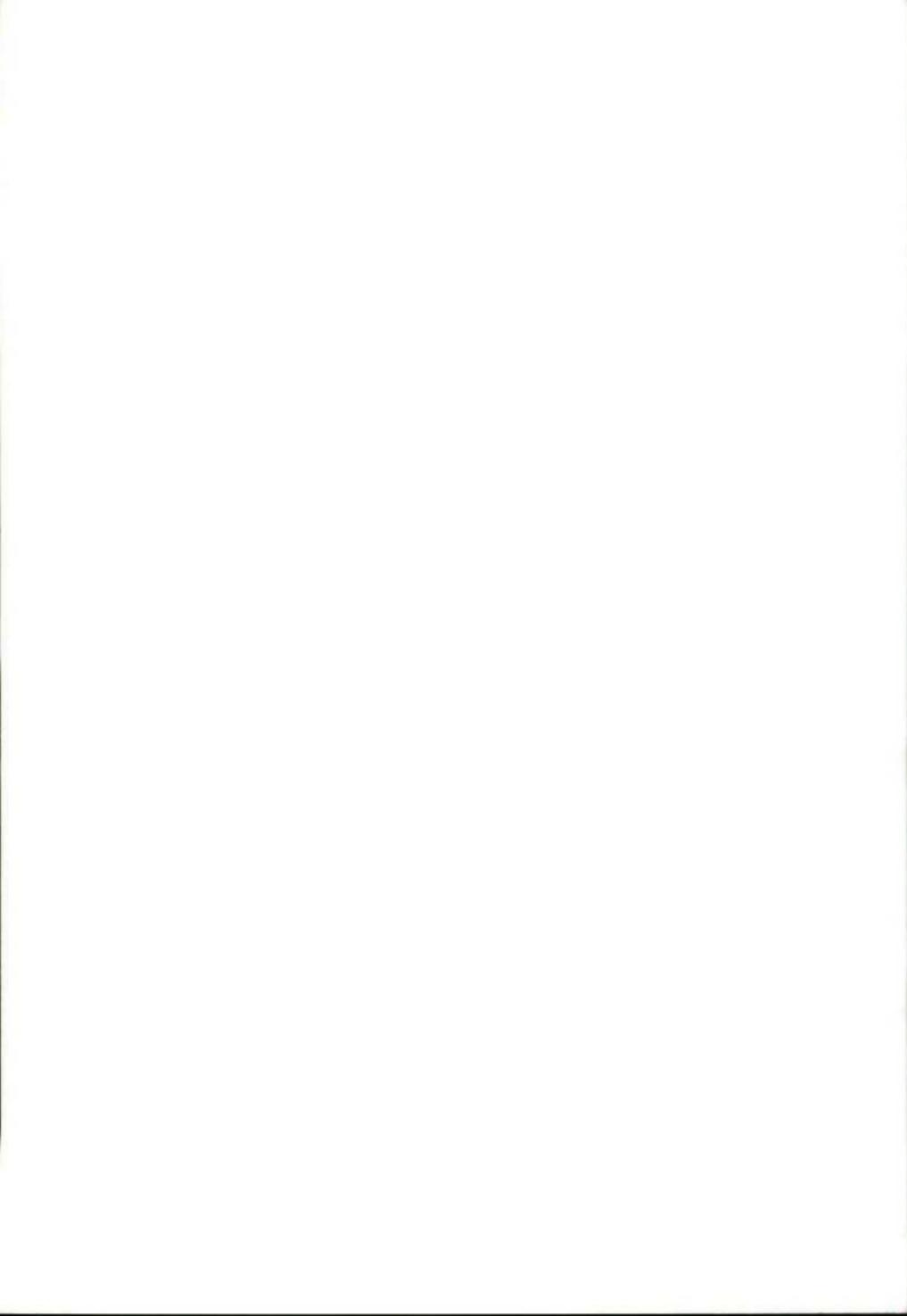


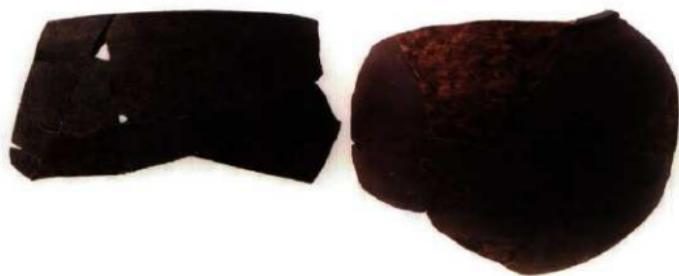


擬鉢



中壺

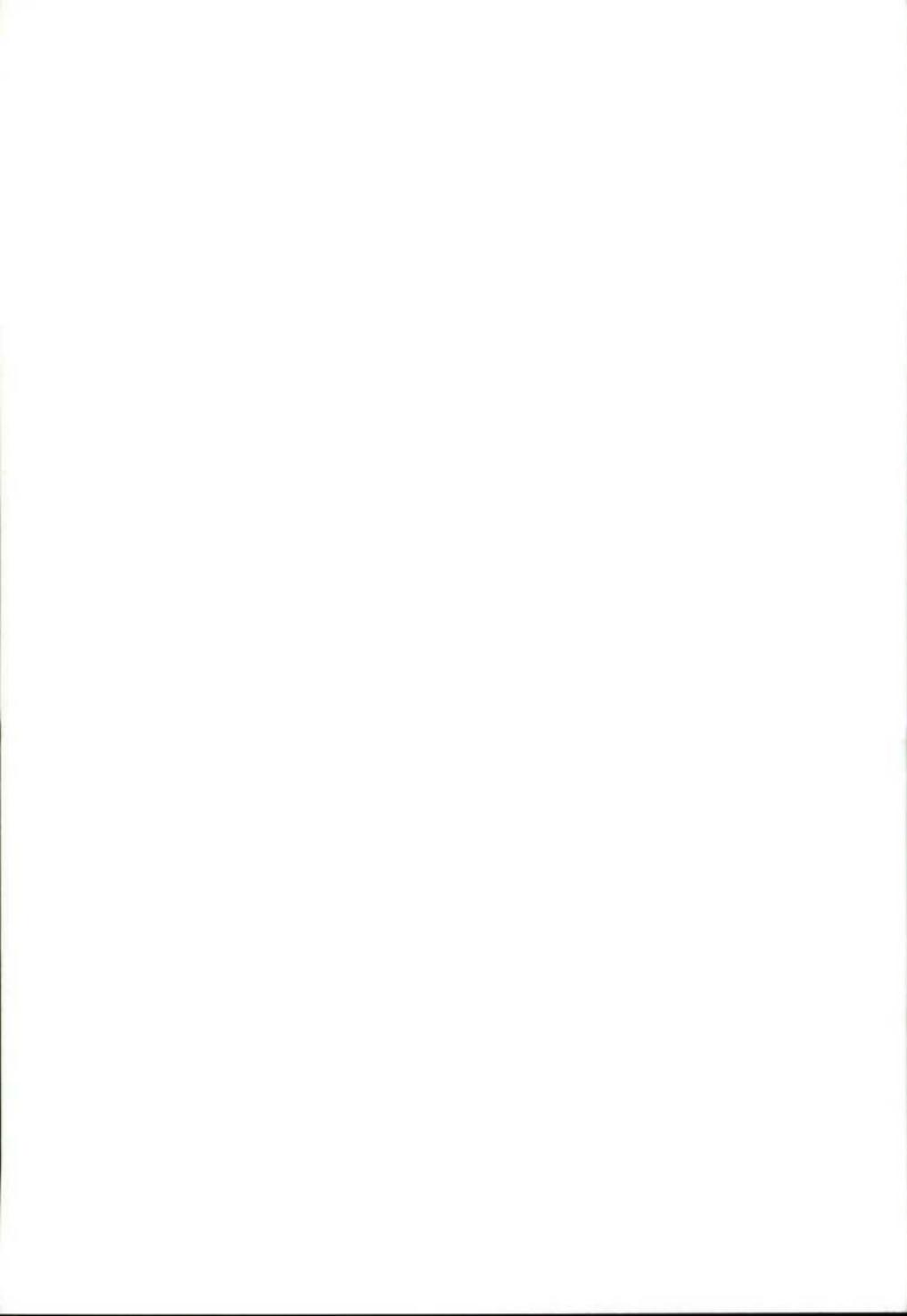




中廢



同上

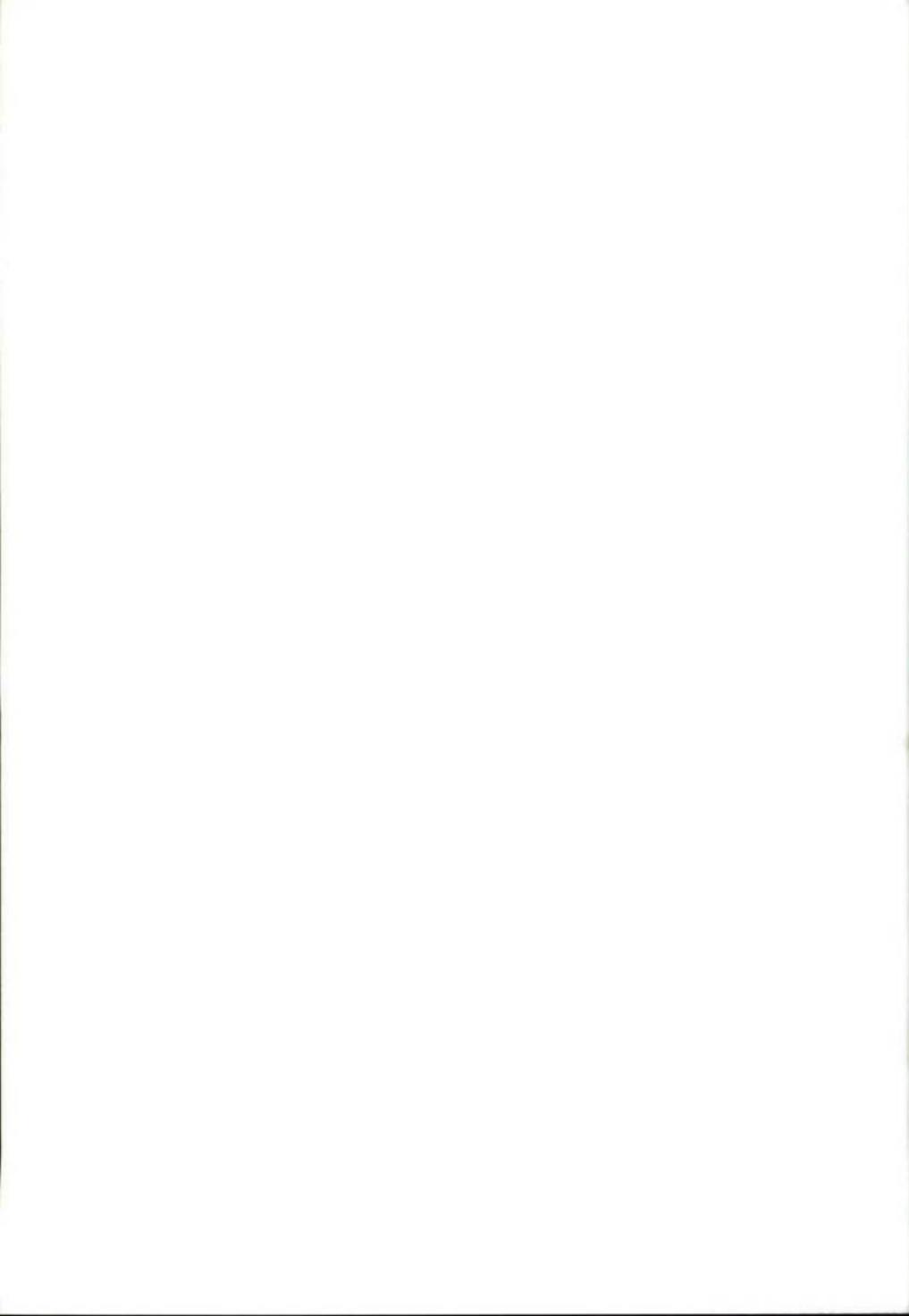




中壺



中瓶

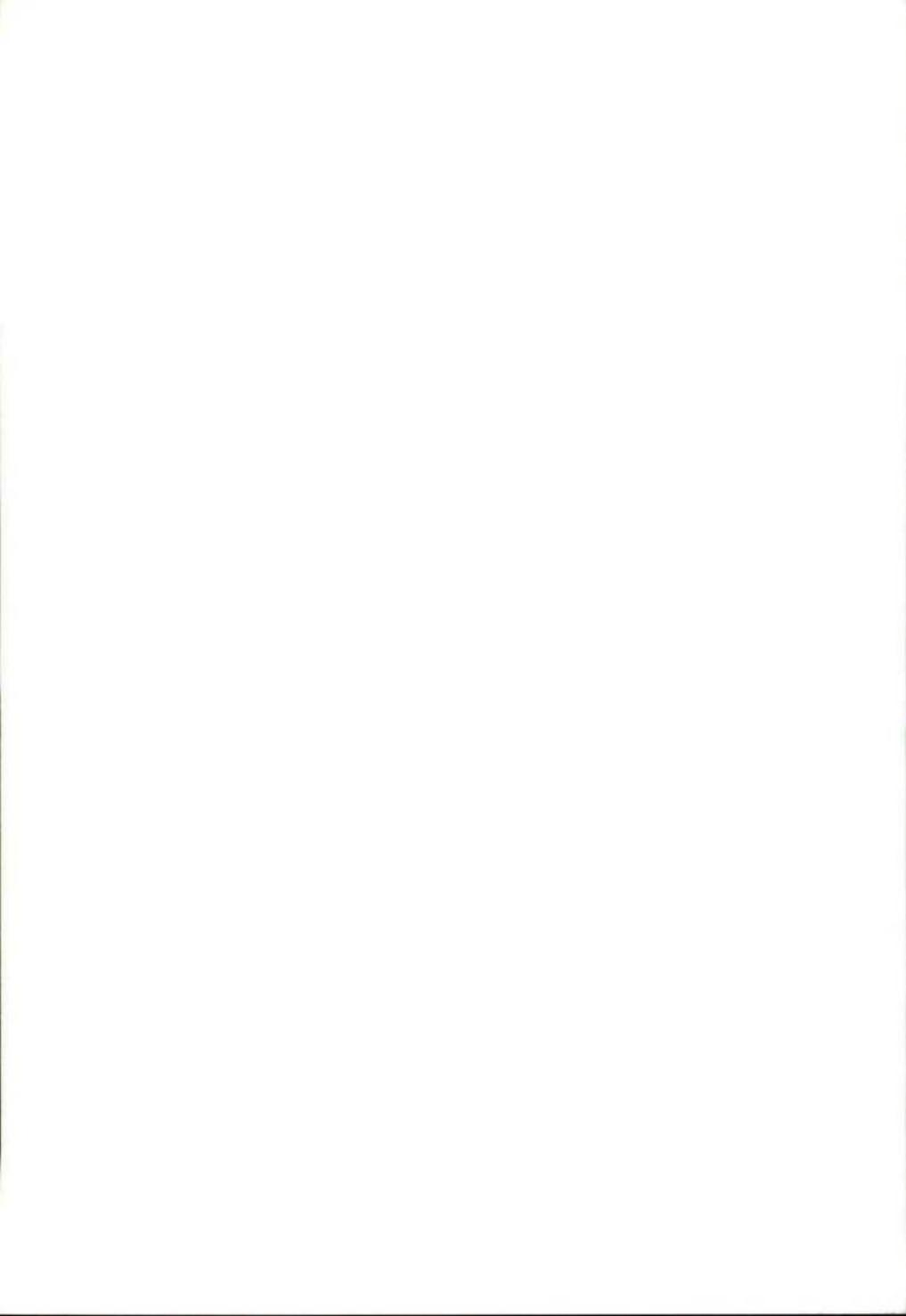




燐德久利



土瓶

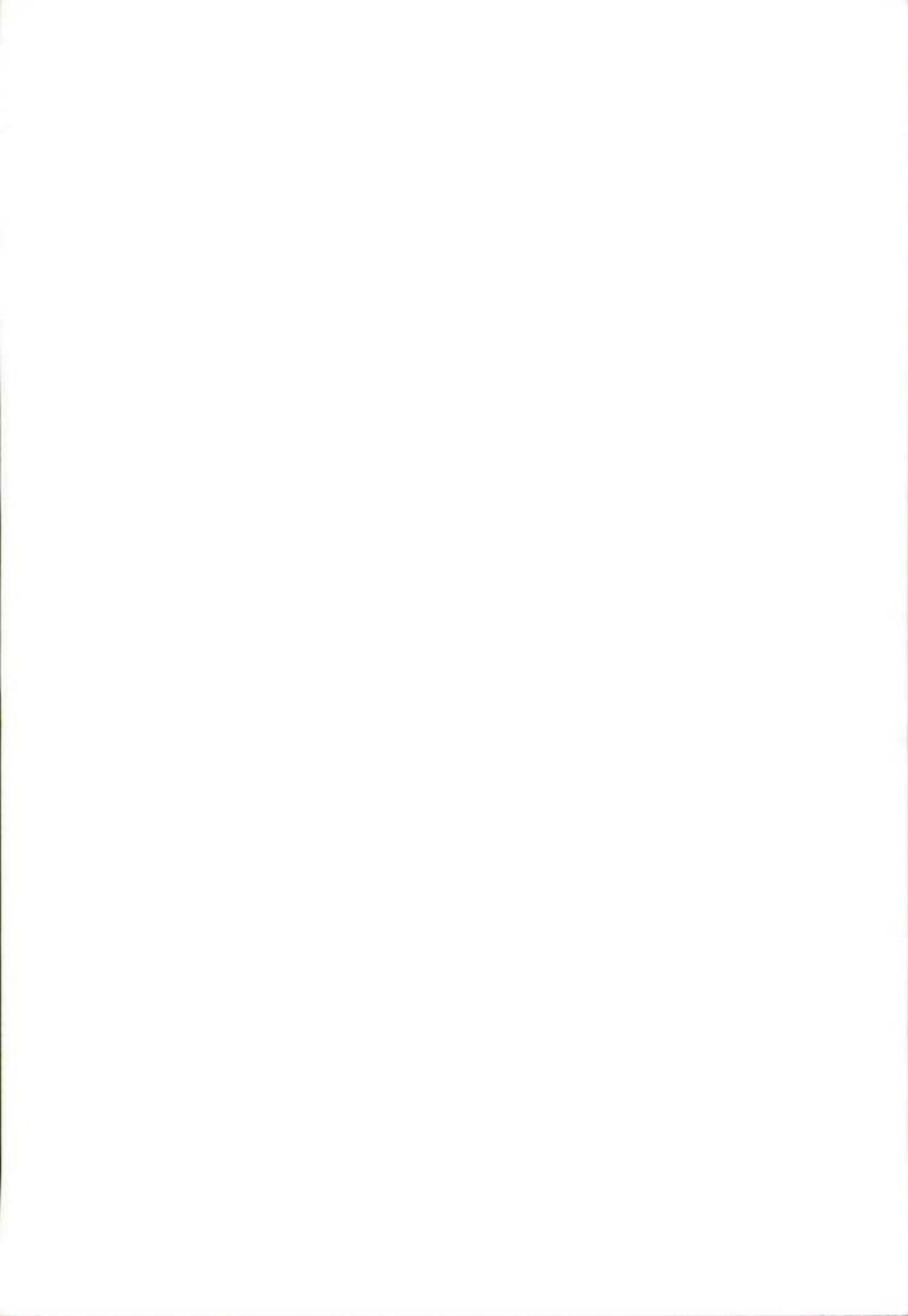


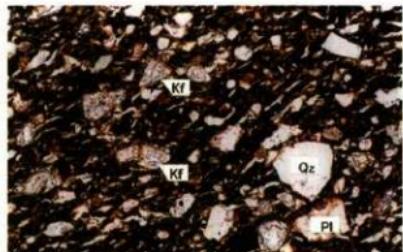


蘭引

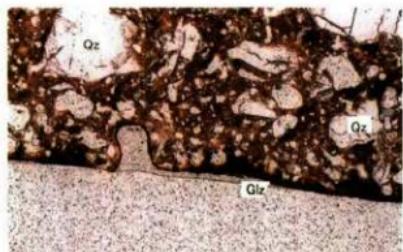
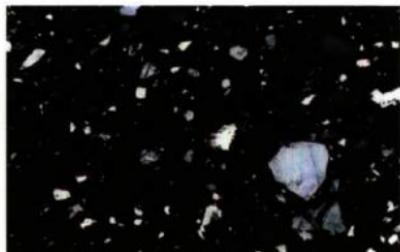


刻印もの

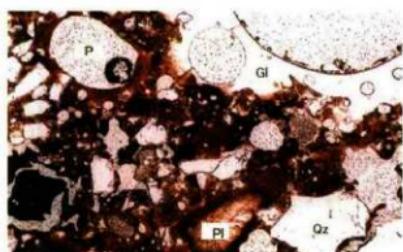




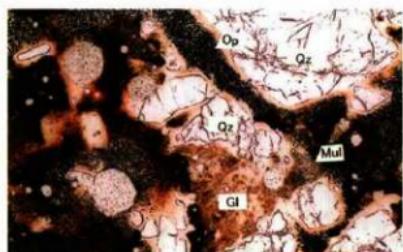
1. 本焼き段階 中斐



2. 本焼き段階 挿鉢



3. 窯詰道具 匣鉢



4. 窯体



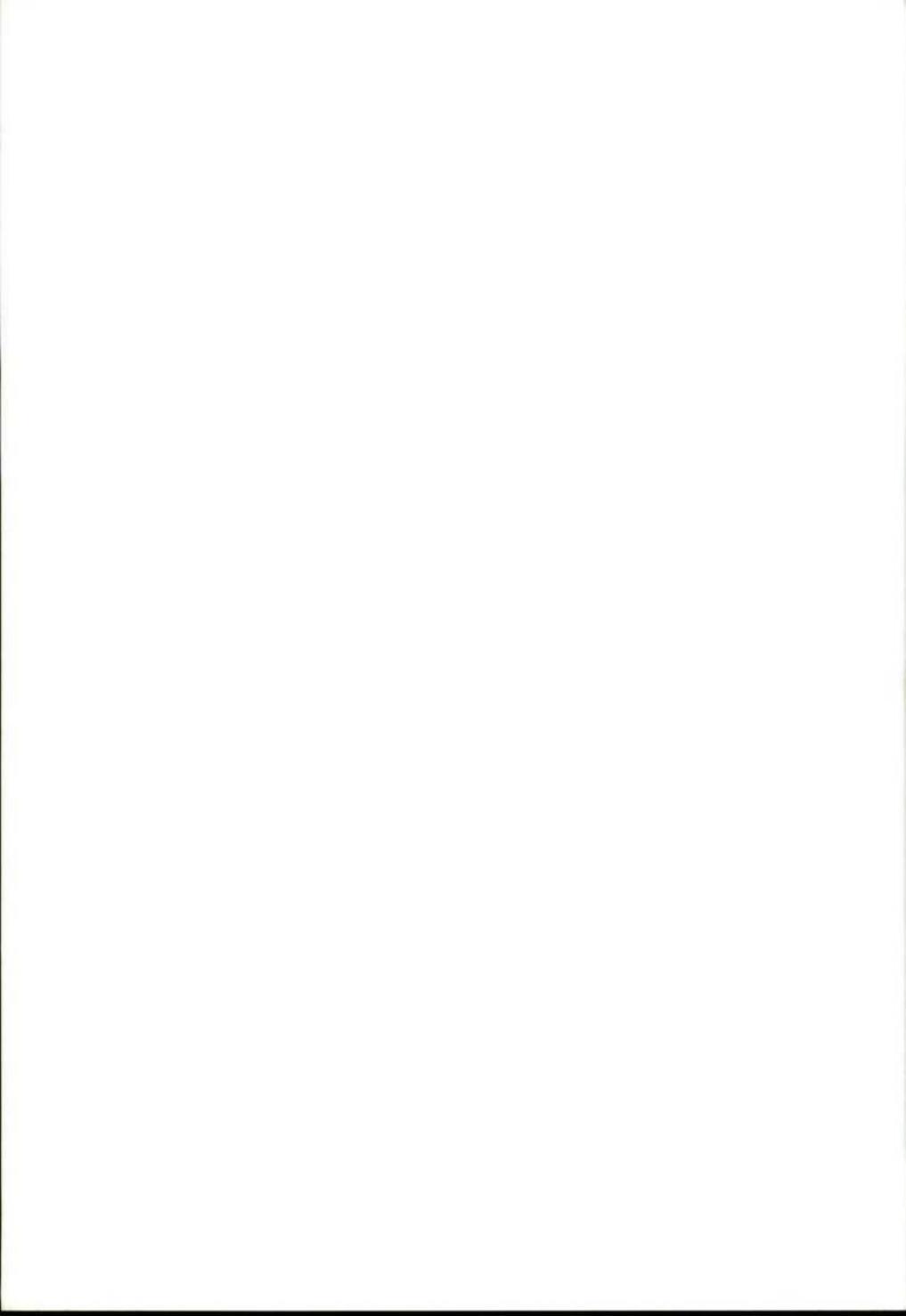
Qtz: 石英 Pl: 斜長石 Kf: カリ長石 Mul: ムライト Op: 不透明鉱物

Gl: 溶融ガラス Gz: 離葉 P: 孔隙

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

胎土薄片



## 報告書抄録

ふりがな	たちばなやまかまと							
書名	橘山窯跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬場保之							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Tel. 0265-22-4511							
発行年月日	平成17年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
市町村		遺跡番号						
たちばなやまかまと 橘山窯跡	飯田市毛賀 1405-1他	20205		35° 28' 50"	137° 50' 10"	平成16年 1月27日 ～ 2月27日	136.5 m <sup>2</sup>	急傾斜地 崩壊対策 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
たちばなやまかまと 橘山窯跡	墓址	江戸時代末～ 明治初頭  縄文時代	灰原 竪穴 溝址 土葬墓 土坑	3基 1条 2基 8基	陶器 繩文土器 石器 煙管 分銅 錢貨	灰原が調査され、 生産の実体が不明 であった橘山窯跡 の内容が明らかに された。		

---

たちばな やま かま あと  
**橘 山 窯 跡**

平成17年3月発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地  
長野県飯田市教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社

---

